

特63
601

學 生 文 庫

第拾六編

新訂

常山紀談

大町桂月校訂

東京至誠堂發兌

中

明治
44.11.20

學生文庫に冕す

われ聞く、獨逸の中等程度の教育にては、力めて多く古典を課す。其意に曰く、古典の知識なければ、人物、學問、事業、共に淺薄なるを免れず。獨逸は新進の國なるが、學問歐米に冠たり、工業亦英國を壓せむとし、國富み、兵強きも、亦以ある哉。我日本は獨逸よりも猶一層新進の國なるが、一躍して世界一等國の列に入り、新興の勢、さすがの獨逸をして後に瞠若たらしめむとす。而して我國は三千年の金甌無缺の歴史を有し、萬世一系の天皇を戴き、世界無類の國體を有す。即ち我國は世界最古の國なると共に、世界最新の國也。其新興の原因を討ぬるに、獨逸の識者が認めて中等教育に實施せる所は、猶一層早く我國の識者が認めて實施せる所也。然るにわれ近時讀書界の趨向を見る

に、徒に奇を趁ひ、新を求め、皮相なる自然主義にかぶれ、危険なる外來思想にかぶれ、よろづ物質的となり、早く生活の安樂を求め、本を忘れて末に趨り、終に淺薄なる人間となり了らむとす。邦家の前途、嗚呼危い哉。余茲に慨する所あり。學生文庫を編み、古典的名著を選び、初學の士の讀誦に充てむとす。益ありて毫も害なきは、余の深く期する所也。前途有爲の士、願くは之に由りて、精神上の好食物を得よ。修養に供せよ。人格の深厚を致せ。餘裕を得よ。清き娛樂を得よ。猶謹んで告ぐ、善く書を読め。書に讀まるゝこと莫れ。

大町桂月

常山紀談中卷に冕す

常山紀談の第十卷より第十九卷までを收めて、これを中卷となす。

上卷の解題にも云ひたるが如く、常山は唯漫然として武士の逸話を集めたるものに非ず。節義といふ事に重きを置きたり。節義にはづれたる猪勇は取らず。この卷に於ては眞田父子の事を紀すること最も詳細を極む。而して常山は一大鐵案を下して曰く、眞田昌幸、徳川家に服従し率りて後、關ヶ原の亂に及びて背きたること二度に及べり。これ義といふべからざるにや。東照宮寛仁におはしませし故に、再犯の罪を宥めさせ給へり。幸村其寛仁に何を以て報い候や心得られず。豊臣家は、眞田數世の君に非ず。若し君に背かずの義を論ぜば、武田家亡びて後、世をすて、山中に隠れずば、いかにあるべき。『義は人の道なり。秀頼に二心あらんこと存じもよらず候』とて、眞田が論ずる處の義、道に叶へるとは云ふべからず。世の人、眞田を以て賞稱す

ること甚し。故に愚論を述ぶるに及べりと。され常山が節義論の本領を發揮したるもの也。眞田幸村は、今の世なほ之を忠義の士と認むるもの多し。知らず、眞に忠義の士なりや、常山の説くが如く忠義の士ならざるや。茲に常山の紀する所によりて、眞田父子の事蹟の大要を述べむに、眞田昌幸は武田家の臣也。天正十年、武田勝頼滅亡せし際には、上州吾妻の城に居りたり。其城は天下の堅城也。昌幸は勝頼の其城に來らんことを勸めたるが、勝頼聽かざりき。武田氏亡びて後、徳川氏は北條氏と争へり。この際、昌幸は徳川氏に屬せり。吾妻より進んで沼田を取れり。徳川氏、北條氏と和するに及び、家康命じて曰く、上田を興ふる代りに、沼田を北條氏に渡せと。昌幸従はずして曰く、上田はもとよりの領地也。沼田は我録にて取りたる地也。故なくして人に興ふべきに非ずとて、豊臣氏に屬したり。徳川氏怒りて昌幸を攻む。秀吉、上杉景勝に命じて、昌幸の後援をなさしめたり。徳川氏の兵拔く能はずして退けり。秀吉、家康と和するに及びて、昌幸は秀吉に請ひて、

また徳川氏に屬せり。家康之を優遇して本多忠勝の女を我女として昌幸の長男信幸に妻はせたり。上田沼田兩城は其有也。然るに天正十六年に至り、秀吉、北條氏政に上京を命ず。氏政口實をつくりて曰く、さきに徳川氏と和せし際、沼田を渡さるべき筈なりしに、昌幸之を渡さず。もし沼田を渡さるやうに命ぜられなば上京せむと。秀吉判断の結果、眞田氏の上州領の三分の二と沼田とを北條氏に渡し、其換地には、徳川氏より昌幸に與ふべし。上州領の三分の一と名胡桃とは、昌幸之を領すべしといふ事になりたり。然るに北條氏は名胡桃城をも奪へり。昌幸之を秀吉に訴ふ。秀吉怒りて、小田原征伐の軍を起せり。この際、昌幸は次男の幸村を人質として秀吉方に遣はせり。これ迄の處、眞田氏は徳川氏に屬したるもの、秀吉の爲めに領土の保安を得たる也。關ヶ原の役起るに及び、徳川氏に就くべきか、豊臣氏に就くべきか、眞田父子の間に議論起る。長男の信幸は徳川氏に屬せり。昌幸と次男の幸村とは豊臣氏に屬せり。信幸の表面には、義あるべし。内面には、妻の關

係もあるべし、成敗問題もあるべし。昌幸、幸村には人生意氣に感ずるの趣を見る。關ヶ原に豊臣氏の兵大敗せし後、昌幸、幸村罪を赦されて、紀州高野の麓九度山に引こもれり。大阪の役起りし時には、昌幸は既に死したる後なりき。幸村は豊臣氏に就くを義としたり。而して常山は之を不義とす。

われ思ふに、武士の上に、武將あり。武士道と共に、武將道あるべし。武士道には、政略なし。武將道は、多少政略を要す。戦國時代、群雄の關係は、今日世界の列國の關係の如きものあり。元來、大阪の役其物より家康を見れば、家康が武士道に叶ひたりとは云ふべからず。されど、武將道としては、大目に見て可なる點なきに非ず。之より推及せば、幸村の事、よしや、常山の説くが如く武士道としては、多少の非難ありとも、武將道として必ずしも非難すべきにあらざる也。殊に昌幸があくまでも、武田氏に盡したると云ひ、關ヶ原の役、成敗を顧みずして豊公の恩に酬いたると云ひ、幸村が家康の寡婦孤兒を欺きて大阪を抑壓したるを憤りて、慨然死を以て豊家に許したると

云ひ、俠骨の稜稜たるを見る。われ常山が節義を主とすることには敬服すれども、其幸村を非難するの點には服する能はず。聊か卑見を陳べて、大方の君子の教を乞ふ。

大町桂月

新訂常山紀談中目次

卷の十

- 二三三 馬場重介武功の事……………三〇三
- 二三四 利家白雲の琵琶を種村に與へらるる事……………三〇八
- 二三五 秦桐若勇威の事……………三〇八
- 二三六 澤村大學朱柄の槍を持たする事……………三〇九
- 二三七 加藤清正天草の一揆退治の事……………三〇九
- 二三八 森本義太夫組討功者の事……………三一〇
- 二二九 朝鮮陣の時東照宮御遠慮の事……………三一〇
- 二三〇 伊達家の士卒異風出陣の事……………三一〇
- 二三一 朝鮮南大門合戦附後向の備の事……………三一〇
- 二三二 國富源右衛門組討の事……………三一〇
- 二三三 加藤光泰大言の事……………三一〇

- 二三四 吉田又助川巾を積る事……………三一七
- 二三五 清正虎を狩られし事……………三一七
- 二三六 清正船を取らせられし事……………三一八
- 二三七 太閤名護屋にて大言の事……………三一九
- 二三八 菅政利後藤基次虎を斬る事附羅山先生南山銘の事……………三二〇
- 二三九 泗川の城に狭間を切る時の事……………三二〇
- 二四〇 加藤嘉明拔懸功名の事……………三二一
- 二四一 淺野長政諫言の事……………三二三
- 二四二 井口興市主従功名の事……………三二四
- 二四三 清正の武備嚴重なりし事……………三二五
- 二四四 朝鮮より虎と象とを渡す事……………三二六
- 二四五 清正の士卒土穴に住みし事……………三二七

二四六 森本庄林黑白鳥毛の鎗鞘の事……………三二八
 二四七 清正の花押筆齋多かりし事……………三二八
 二四八 後藤基次總甲の車を造る事……………三二九
 二四九 和寧館合戦栗山利安武功用意の事……………三二九
 二五〇 栗山利安儉約の事附日根野備中守
 黒田家に銀を返す事……………三三〇
 卷の十一
 二五一 竹中重治心掛の事……………三三三
 二五二 峯澤某謙信を撃たんとせし事……………三三四
 二五三 久世三四郎坂部三十郎物見の事……………三三五
 二五四 野々口彦助物語の事……………三三六
 二五五 石谷定清御供に参る事……………三三六
 二五六 坪内玄蕃心得の事……………三三七
 二五七 道化清十郎平野與兵衛に對面の事……………三三七

二五八 谷太郎左衛門物前心得の事……………三三九
 二五九 可見才藏が事……………三三九
 二六〇 石田三成が事……………三四〇
 二六一 關白秀次公生害の事附吉田修理が事……………三四一
 二六二 木村常陸介最後の事……………三四三
 二六三 秀吉有岡城へ使者に行かれし事……………三四三
 二六四 附河原林越後山脇原大夫が事……………三四四
 二六五 成田助九郎誅せらるる事……………三四六
 二六六 秀吉公運歌の事……………三四六
 二六七 三木牛之介鍬形詩歌の事……………三四七
 二六八 谷大膳武勇討死の事……………三四八
 二六八 戸川肥後守秀吉公を負ふ事……………三五〇
 二六九 黒田如水先見の事……………三五〇

二七〇 秀康卿伏見にて妓女國が舞を見給ひし事……………三五二
 二七一 直江兼續が事……………三五二
 二七二 石田三成直江兼續密謀の事……………三五二
 二七三 兼續惺高先生に逢ひし事……………三五三
 二七四 石田が眞東照宮を謀り奉らんとせし事……………三五三
 二七五 細川忠興忠告の事……………三五七
 卷の十二
 二七六 東照宮細川家の難を救ひ給ひし事……………三六一
 二七七 七人の大将石田を討たんとせられし事……………三六三
 二七八 東照宮上杉御征伐の時近江國水口か立たせ給へる事……………三六六

二七九 東照宮花房助兵衛に起請文を書けと仰せられし事……………三六七
 二八〇 下野國小山にて上杉入庵議論の事……………三六七
 二八一 渡邊惣左衛門野中市左衛門忍びて大阪に使用する事……………三七〇
 二八二 上形景勝會津表手配の事……………三七四
 二八三 東照宮小山の途中にて竹を伐らせられし事……………三七五
 二八四 伊達政宗膽氣相馬の城下に宿せられし事……………三七六
 二八五 竹村半兵衛田中長胤を押し止むる事……………三七八
 二八六 岐阜城攻の事……………三七九
 二八七 森寺四郎兵衛飯沼小勘平を討つ事……………三七九

事……………三三八三
 二八八 南部越後母衣串をぬかさりし事……………三八四
 二八九 兼松又四郎一柳の陣見切の事附
 兼松武功言上の事……………三八五
 二九〇 山田多門兵衛幼年功名の事……………三八八
 卷の十三
 二九一 米田助右衛門見積の事……………三九〇
 二九二 後藤又兵衛決断の事……………三九〇
 二九三 合渡川合戦黒田三左衛門毛付の
 功名の事……………三九一
 二九四 神谷小介先登の事……………三九二
 二九五 藤堂玄蕃赤坂町を鎮むる事……………三九二
 二九六 寺澤廣高加藤嘉明度量の事……………三九三
 二九七 春日九兵衛見積の事……………三九三
 二九八 村上彦右衛門先見の事……………三九四

二九九 土方三九郎武功の事……………三九五
 三〇〇 小栗又市谷々見廻りの事……………三九七
 三〇一 秀家夜討せんといはれし事……………三九七
 三〇二 株瀬川合戦の事……………三九七
 三〇三 稻次右近功名の事……………三九九
 三〇四 淺香庄次郎働の事……………四〇〇
 三〇五 林半介殿の事……………四〇一
 三〇六 伊藤金左衛門三宅平太夫後殿の
 事……………四〇一
 三〇七 毛谷主水物見の事……………四〇三
 三〇八 關ヶ原合戦島左近討死の事……………四〇四
 三〇九 飯尾甚太夫一騎先駆の事附成合平
 左衛門が事……………四〇六
 三一〇 蒲生備中父子戦死の事……………四〇七
 三一 大谷吉隆平塚爲廣最後合戦和歌

贈答の事……………四〇九
 三一二 瀧川内記功名の事……………四一二
 三一三 本多正重の事……………四一三
 三一四 堀左馬助御書を認むる事……………四一四
 三一五 田邊甚兵衛幼年功名の事……………四一五
 三一六 辻小作中黒道隨が事……………四一五
 三一七 島津義弘關ヶ原退口の事附大坂の
 商賈義氣の事……………四一六
 三三八 東照宮勝開の儀を延べ給ひし事……………四二〇
 卷の十四
 三三九 細川忠興の北の方義死の事……………四二一
 三三〇 安養寺門齋三成を生捕らんとせし
 事附姉川合戦の時門齋生捕られし
 事附遠藤喜右衛門討死の事……………四二三
 三三一 大津城合戦京極家の士戦功の事

附赤尾伊豆が事……………四二七
 三三二 十時傳右衛門山田三右衛門死骸返
 しの事……………四三四
 三三三 高次大津の城を出でられし事……………四三四
 三三四 立花家足輕鐵砲の用意附細川家口
 薬入吉田大藏猿頭の事……………四三六
 三三五 伏見落城の事附島居忠政雜賀孫市
 を襲されし事……………四三六
 三三六 村上三右衛門大島源二武者振の
 事……………四四〇
 三三七 三刀屋監物田邊城に籠る事……………四四一
 三三八 田邊城救命に依つて和平の事附細
 川幽齋古今集傳授の事……………四四二
 三三九 古田助左衛門思慮の事……………四四五
 卷の十五

三三〇 伊勢國阿濃津城軍の事附佐治縫殿
が事…………… 四四七

三三一 長東大藏大輔降参の事…………… 四五〇

三三二 渡邊才兵衛武功の事…………… 四五一

三三三 石田三成生け捕らるゝ事…………… 四五三

三三四 小幡助六郎忠死の事…………… 四五六

三三五 河村權七郎が事…………… 四五七

三三六 加藤清正の北の方大坂を忍び出
でられし事…………… 四五九

三三七 淺井暇合戦前田丹羽の將士功名の
事附松平久兵衛軍學鍛練の事…………… 四六一

三三八 山田勘六郎討死の事…………… 四六五

三三九 黒田如水凶相の馬に乘られし事…………… 四六六

三四〇 黒田大友石垣原合戦の事…………… 四六六

三四一 三宅喜藏武勇の事…………… 四七二

三四二 肥後國宇土城攻杉本次郎介夜討
の事…………… 四七四

三四三 福島家の士大將東照宮を拜する
事…………… 四七五

三四四 加藤清正治亂を論ぜられし事…………… 四七六

三四五 黒田如水豪氣の事…………… 四七六

卷の十六

三四六 浮田秀家八丈島へ配流の事…………… 四七九

三四七 小早川隆景遺訓の事…………… 四八〇

三四八 佐竹義宣國替の事并車野丹波が
事…………… 四八一

三四九 杉原常陸智勇の事…………… 四八三

三五〇 前田慶治が事…………… 四八四

三五一 出羽國長谷堂合戦上泉主水討死の
事…………… 四八六

三五二 伊達上杉陸奥國松川合戦の事附
永井善左衛門岡野左内が事…………… 四九一

三五三 石田が子の僧助命の事…………… 四九九

三五四 越後の國一揆堀直寄武功の事附千
利休が事…………… 五〇〇

三五五 世間太兵衛伏兵を知る事…………… 五〇二

卷の十七

三五六 眞田昌幸父子三人始末の事…………… 五〇三

三五七 西村孫之進武功の事…………… 五二三

三五八 佃次郎兵衛伊豫國松前城を守る
事…………… 五二六

三五九 大久保忠佐に三枚橋の城賜ひし
事…………… 五三〇

卷の十八

三六〇 細川幽齋古歌を書きて忠興を諫め

三六一 本多忠勝功名を論ぜられし事…………… 五三一

三六二 井伊家の附人連署して直政を諫め
し事…………… 五三二

三六三 堀秀政を名人と耶といひし事…………… 五三二

三六四 大久保忠隣忠直の事…………… 五三三

三六五 天野康景鹿瀬高國寺の城を去られ
し事…………… 五三五

三六六 井上正就駿府へ御使の事…………… 五三六

三六七 東照宮諫言を容れ給ひし事…………… 五三八

三六八 三河國蒲刈の橋を修造せられし
事…………… 五三九

三六九 山名禪高徹衣を著せられし事…………… 五四〇

三七〇 東照宮禮を正し給ひし事…………… 五四〇

三七一 駿府城中へ水を引かんとせられし

三七一 東照宮御中指の事……………五四一

三七三 金の七本骨の扇の御馬印の事……………五四二

三七四 加藤忠廣物語附飯田覺兵衛が事……………五四二

三七五 前田利常戦死の士を甲はれし事……………五四四

三七六 黒田如水遺言の事……………五四四

三七七 本多正信加藤嘉明を諷されし事……………五四五

三七八 安藤直次先見井本多正信遺言の事……………五四六

三七九 台徳殿御行狀の事……………五四七

三八〇 林道春格言の事……………五四八

三八一 藤惺高秀吉公を論ぜられし事……………五四九

三八二 紀伊大納言頼宣卿諫言を歎び給ふ事……………五四九

三八三 由井正雪反逆の時頼宣卿出仕の事……………五四九

三八四 水野重長諫言の事……………五五二

三八五 松野惣太郎前田權之介賞せらるる事……………五五三

三八六 佐々丸郎兵衛經濟格論の事……………五五四

三八七 不破彦三武備の事……………五五五

三八八 井伊直孝衣服儉約の事附戦國の時質素なりし事……………五五七

三八九 永井尙政執政の用意を直孝に問はれし事……………五五八

三九〇 中院通茂公幼宮を教訓の事……………五五九

三九一 松平信綱恭敬の事附信綱幼年奉公の事……………五六〇

三九二 細川忠興曾の立物の説……………五六三

卷の十九

三九三 忠興飯河豊前同肥後父子を誅せられし事並肥後が妻節義に死する事……………五六三

三九四 黒田滿徳丸袴著の時母里但馬舞をまひし事……………五六四

三九五 龜田大隅江戸の石壁を築きし事……………五六七

三九六 吉岡建法狼藉太田忠兵衛手柄並太田武技を論ずる事……………五六八

三九七 柳生宗矩劍術御師範の事並宗矩先見の事……………五六九

三九八 板倉重昌肥前國島原の賊追討の事……………五七二

三九九 川北九太夫肥後國川尻を守る事……………五七三

四〇〇 天草の一揆夜討の事……………五七四

四〇一 鍋島榊原島原城先登の事……………五七六

四〇二 黒田勢天草丸を攻め破る事並黒田睡鴨武畧の事……………五七七

四〇三 水野勝重父子有馬永純本丸一番乗を論ぜられし事……………五七九

四〇四 陣佐右衛門一揆の長四郎が首を取る事……………五八二

四〇五 松野龜右衛門鐵砲修練の事附松野才覺の事……………五八三

四〇六 藤堂高虎阿濃津にて勢揃せられし事……………五八四

四〇七 福島正則領國を召し放さるる始末の事……………五八五

新常山紀談中目次終

新訂 常山紀談 中

卷の十

二二三、馬場重介武功の事

馬場重介職家は陸奥栗屋川貞任が裔孫にて、備前邑久郡北地村に來り居りしが、其の後も安部といひけるに、京都より來りし馬場氏の人豊原に居て、其の女を妻として、遂に馬場と稱しぬ。重介稚名を岩法師といひて、十三歳にて邑久郡戸石の城主浮田大和守に奉公し、天文十四年浮田直家は乙子の城に在りて大和と軍あり、直家の士池田太郎三郎と岩法師東北地村荷蓋の島にて、鎗を合せ疵を蒙りて戸石の城に歸る、今年十四歳なり。大和守膝に抱上げて疵の口を自ら吸はれけり。無雙の剛の者なり

湯淺元禎輯錄
大町桂月校訂

とて名を二郎四郎と改めさせられぬ。程なく直家・花房又七・近藤五郎左衛門・星野十郎を大將にして戸石を攻む。二郎四郎白團の腰さし指いて、一の城戸口に出る。近藤見ていかに引くか進むかと詞をかくるに、二郎四郎軍場に臨んで引くと云ふ事やあるといひも終らぬに、花房・星野共手利の射手にて、弓取り直し是を射る。花房が矢は中指にあたり、星野が矢は二郎四郎が持ちたる楯をもとはきまで射貫く。二郎四郎物ともせず、敵を追つ拂ひて歸れり。天文十七年赤阪郡鳥取の砦を大和守攻めて軍あり。二郎四郎膝の口を籠深に射させ、二町計引き退きたる所に、味方に泉養坊といふ山伏来て其の矢を抜けば、足なへて歩む事能はず。大和守の馬に乗りて、二三町引き退きたりしかども、馬を返してければ味方も隔りぬ。敵追つかけ來らば討死せんとおもふ時、妹婿なりし片山彦三郎といふ者の弟來て、馬に抱き乗せたるに血鎧を越えて流れ、朱に成りたるを敵見て深手負ひたりと見なしたれば、十文字の鎧を取延べ頼にかけ落さんとする事幾度といふ事をまらす。漸に遁れ得て歸れり。首を取つて見取られて見るといふ諺あるは、此の時なるべしと二郎四郎常に云ひけるとなり。是れ十七歳の事なり。後ち二郎四郎直家に奉公し、與力六十人付けられたり。美作三星の城は浦上宗景番手の兵をやりて守らせたるを、安藝の毛利家より附城を構へ、三村家親大將として度々合戦あり。直家より

馬場を加勢として三星にこえたり。馬場愛宕精進するとして、五月廿四日細き流れに行きて身を清むる處に敵出でたりと聞き直に行き向へば、三星よりも鎧提げたる士一人來て、馬場に並び進む敵を追つ詰たれば附城より出て、是れを助けて城に入る。門内を見れば混背の兵十四五人折り敷きて鎧の先を並べ待ちかけたれば、辭々と引き返す。宗景感状を與へられ、直家夫より重介と名を改めさせ家の字をやらせり。備前上道郡妙禪寺の砦の合戦に、重介は刀、敵は鎧にて相戦ひ溝を飛越えて敵の手の下にぐり入らんとせしに、腹きてうつぶしに伏したり。敵勇みかかりておもふ所を突きばづし行き、あまゐるなづと立ち上り切り伏せて首を取る。同郡土田の軍にも長六尺に餘れる梶井といふ兵を討取つたるを角南怨菴見て、白き浴衣を著右の肩をはだぬぎ太刀打したる兵の有様、昔の辨慶なごやかくも有るらんと驚きたりといふ、則ち重介なり。永祿十年五月十日土田の上盤目の軍に、敵五人鎧を横たへ山の上より來るを、重介は坂の下に在つて一人射倒したれども味方はつづかず引き返す時、山の腰を引き退く味方、敵追ひ詰めて既に討たれぬべく見ゆれば返し合せ敵を切りなびけ、味方を助け引き取り。備前岡山の城主金光興次郎を直家謀を以て殺し、城を取り得たれども近き邊りに敵多ければ、戸川平右衛門を城番とするに、寄騎六十人みな行き兼ねたり。重介我かはらんといふに何の手細が有

るべきといふを、直家に告げて許したれば、重介が奇騎六十人一人も辭退する者なきに、戸川が興力もはげまされて重介加勢ならば行かんといふにより、戸川馬場三年岡山にあり。美作三の宮の城を直家一時に攻めらるる時、城主村上勘兵衛士卒六十人計にて突いて出る。重介眞先に進み鎗武者四人雜刀武者四人と戦ひて、城門の際まで追ひ打ちす。敵鎗を投突にまたるを奪ひ取りて歸る。高城にての軍に直家重介を谷の受手とす。敵來らざれば谷より上る處に、山の半に鐵砲を五段にして待ちかけたる處に行きかかり、三段追つ崩す四段より打つたる鐵砲に右の膝より臂へかけて打ち透され、敵聲をかくれれば重介中らずというて、四段をも追つたつる。崩れたる土手あるに胃の鐵を傾け、寄り添ひて待ちたるに、柴折りかけたる谷の向より打つ鐵砲、脊割具足の右の肩かひがら骨の内より臂まで打ち貫かれ目暗みたり。氣を静めて見れば田中藤介間近く來れり。重介田中を呼びかけ、大事の手負ひぬ、此の所を退かんとせば追討に遭はん、爰を死所とせんといふ。藤介我一支もすべしといふ。重介五間ばかり歩みて耶等の肩に手をかけ、靜に退くを敵慕ひ來れば、藤介鎗を合せ追ひ退けて歸れり。鐵砲に中りし時、大木を以て袋を突通すが如く覺え物の色目分かれず、只朝靨の花の色に見えたりと後に語りけるとなり。備前兒島入濱にて軍有り、浮田七郎兵衛忠家の子與太郎大將にて、戸川平右衛門岡

平内已下渡海し夢飯山の敵城近き邊りにて草を刈る時、敵出て追つたつる。與太郎馬に輪をかけて味方の兵を求むる所に、鐵砲内胃に中りて馬より落つ。中村宗介同じく討死す。重介馬を射られ乗り放し歩立に成りぬ。月毛馬・葦毛馬・黒馬に乗りたる敵三騎重介を目にかけて馬を乗り寄する。重介敵に馬を乗りかけられじと鎗の銃を後になして脇に挟み、靜々と退く。疲れはしつ討死よと思ひたるに、敵引きて助りぬ。戸川見て今日の働き故、我一命繼ぎたりと重介を譽めたる處に、寺尾孫四郎今日は重介を見ずといふ。重介先にて見ざるか後にて見ざるか、一番に進みたる敵の馬の毛色物具はいかにと問ふに、孫四郎赤面して詞なし。重介吾鎗脇に弓をもて後の證に立たれよと云ひて敵一人射倒したる人有りといへば、鷹見傳兵衛進み出で某にて候ひきといふ。中納言秀家大阪より備前へ下らるる時、雨中の徒然に浮田修理・同太郎左衛門・花房又七三人を呼んで軍物語の時、前代の鎗柱功の勝れたるは誰ぞと問はるるに、馬場重介・幸和織部・寺尾孫四郎三人と答ふ。秀家聞きて幸和・寺尾は武功は有りつれど輕薄なりと聞けり。いつとても重介が人に越されたる事なしと聞きつれば、重介こそ勝れ候はんなれといはれしかば、三人重介が武功は申すに言葉も候はずといふ。重介貞實にて詔はず、城下の近き邊りに引き込みて、此頃は耕作して有りける由を秀家聞きて、三百石加祿の折紙を戸川肥後をも

て重介に與へらる。いかにまたりけむ事達せず。重介是れを聞き愈々由る心なく、遂に秀家にも仕へず、七十七にて病死す。士は假初にもきたなき心有るべからざるなり。吉野度の戦場に臨み百死の中に一生を得て、斯く全く終りぬると遺言しけり。其の子孫池田家に仕へけり。

二二四 利家白雲の琵琶を種村に與へらるる事

種村肯雅寺はもと柴田家にて譽れあり。後招かるる人々多かりけれども仕へず、前田利家總兵に迎へられしかども出でず、利家種村が琵琶を彈する事を好むと聞きて、白雲といふ名物の琵琶を贈られしかば、其の志にや引かれけん利家に仕へて、佐々成政と越中朝日山の合戦に目を驚かす功名を遂げたり。其の後淺野長晟に奉公して、彼の白雲の琵琶は今淺野家にありとかや。

二二五 秦桐若勇威の事

黒田家の士に秦桐若といふ剛の者あり。唐團扇長一丈計もあるを指物にしける故、敵見知りて近付かず、或時さし物なかくして近々と成りて不意に出せば、敵大に驚きて引退きたるは此の者なりけり。

二二六 澤村大學朱柄の鎗を持たする事

駿河を攻めらるる時、東照宮横目の人を召してむかしより皆朱の鎗の柄、瑠璃の柄は武功勝れたる者ならで持たせざるに、近比は持たする者の數多ありときく、心得難き事なり、攻めよと仰せ出されざるに、澤村の柄の鎗持たせ、菅浦草のたち付けを着て通る者あり。誰ぞと問ふに細川越中守が土澤村大學と答ふ。此の由を申しければ、東照宮其の大學は若き時才八といひつるが小牧にての事なりき、秀吉二重湟の軍兵を引き取る時、秀吉六百計青塚に陣せしを、吾小牧より押し寄せて引き退く敵を打ち破る。其の時細川忠興秀吉の先陣にありて才八真先に進みて鎗を合せし有様、今も猶目の前に見るがごとく覺えたり。かゝる大剛の者に持たすべしとて、其餘の者を禁ずる事よと仰せられしかば、種村傳へ聞き今更わが功名を世にあげたる忝さを悦びけり。

二二七 加藤清正天草の一揆退治の事

加藤主計頭清正・小西攝津守行長、各、肥後半州を賜はりしに一揆起る。天草領は嶋にて一揆の勢ひ甚だ盛なり。小西志岐城を攻めけるに、天草木戸の一揆の長天草民部後巻に押し寄せ、志岐の東の山に陣す。清正の先陣山岡道阿彌・岡田將監・南部無右衛門・小野木織部・瀧野三位・莊林隼人・森本義太夫段々にすむ。清正鴈平次をして先陣を見しむるに歸らず。又飯田覺兵衛をやられしに飯田見切つて歸る。平次只今軍始まらん先に進みて戦に逢はんと云ふ。飯田しらぬ事はいふまじきよ、先陣只今追つ立てられん。戦に逢ふ場にあらずとてつれて歸る。清正いかにと問はるゝに、飯田先陣は今打ち負けて敵追つかけ來らん。二の勝は旗本に候ふといふ。清正證はいかにと問ふ。敵東の山に陣し地の利を得たりといひも果てぬに、先陣敗北して一揆まつしぐらにかゝり來る。清正高き處より横合に突いて懸かり、天草民部敗軍せしを三里計追討にしたり。清正十文字の鎧を突き折り、七度鎧を合はせ、其の勢ひに乗じて志岐の城を攻落されけり。清正の鎧は十文字にて三日月の形なり。志津の作なりしが突き折りて片鎌と成りし、刃を拾ひ取りて佛木坂の神宮に納めしとぞ。鎧の鞘熊毛なりしに、瘡煩ふ人あれば、其の毛一筋ぬきて戴かするに忽ち落ちけると言ひ傳ふ。朝鮮人は今に至る迄小兒の啼く時東將軍來るといひて啼きやみけるとかや。かばかりの猛將類まれなる事なり。

二二八 森本義太夫組討功者の事

清正一揆を攻むる時、或夜森本義太夫清正の前にて軍評定せしに、凡そ組討は力によらず候ふ。心剛にて手きいたれば易き物なりと申すを、清正組打は危きものなり、男に跨る時は、必ず仕損すべしと戒められぬ。其の翌日清正の眞先に森本馬を進むる處に、歩行武者一人寄せ合ひたり。森本聞ゆる馬の上手なれば敵を横さまにあてゝひらりと飛び下り、立ち上らんとする敵を引つ組んで頓て首をとる。清正に向ひ夕申ししに違ひ候ふ哉といへば、清正大に賞せられけり。

二二九 朝鮮陣の時東照宮御遠慮の事

東照宮江戸におはしまししに、秀吉の使來りて朝鮮を伐たるよしを申す。斯くて一人書院におはしまして、深く思案の體に見えさせ給ひける時、本多正信御前近く出でたれども御詞もなし。やゝありて正信殿は朝鮮に渡海有るべきかと申せども、猶默然とせさせ給ふを、斯くいふ事三度に及びて後、何事ぞかしましきに入や聞くべき。箱根をば誰れに守らすべきと仰せありしかば、正信さてはとく御思

慮定りけるといひて退出しけり。

二三〇 伊達家の士卒異風出陣の事

朝鮮を伐たる時、關東の諸將も兵を出ださる。伊達政宗は遠國たる故に騎兵三十騎、鐵砲百挺、槍百本と軍配を定められけるに、千計の士卒を引き具し、天正十九年正月九日岩出山を打つ立ち、三月十三日京に著く。小西・加藤は先陣たり。岐阜中納言秀信を始として、關東の諸將師を出ださる。其の道は聚樂より良橋を大宮に押し通る。政宗の旗三十本紺地に金の丸付けたる具足著て、弓鐵砲の者も同じ出立に銀ののし付の刀脇差、金のとがり笠をかぶり、馬上三十人黒ほろに金の半月の出でし豹の皮、又は孔雀の尾熊の皮いろくの馬甲かけ、金ののし付の刀脇差あたりもかゝやく計なる中にも、遠藤文七郎・原田左馬介は、はき添に木太刀を一丈計に作り帯びたりしが、鞘尻のさがりければ、金具を真中に設けて糸を結び、肩にかけて馬に乗りたりけり。見物の群衆、政宗の軍兵押し通る時目を驚かす出立なれば、一同にをめきごよめきけるとぞ。

〔明の援兵朝鮮に來り、平壤に在りて練光亭より日本の兵を望みしに、江上に往來する者大劍を荷

ふ。日光下り射て電の如し。是れは眞の劍にあらず。白纓を沃きたる物なりといふ事、懸燈錄に「しるしは伊達家の二士の木劍の事によし」

二三一 朝鮮南大門合戰附後向の備の事

朝鮮南大門の軍は文祿二年正月廿六日の事なり。明の援兵鴨綠江をわたり押し來る。小西行長かなはず引き退く時に、小早川隆景は開城府に止まり、一軍せんと待ちかけたなり。浮田秀家使を以てとく都城に引き返して、一所に軍あるべしと申されしかども、隆景吾れ日本を打つ立ちしより異國に討死せんとおもひ設けたり。年老い候ひぬ。今生の思ひ出に異國の大軍にかけ合はせ、大國の耳目を驚かす軍して、屍を戰場にさらさんと存ずる所なりとて、引き取らん氣色無かりければ、又大谷吉隆を道はして、賊に雙なき志、古の名將も是れには過ぎじ。さればとて二萬計の兵にて大軍に取り巻かれ、空しく討死あらん事口惜しく候ふ、只疾く都城に入りて日本の軍の先陣せられ候へとありしかば、隆景さらば日本の先陣は隆景仕らうするにて候ふ。人に先陣をばかけさせじとて、黒田長政・久留米秀包打ち連れで都城に歸られしが、南大門の外碧蹄館に陣せられけり。廿六日の曙に李如松が軍押し來る、

薩族を立てつられ何十萬とも測るべからず。秀家を始として大軍に野合の合戦危からん、都城に楯籠
 らんといはれし時、立花宗茂目を見出だし刀の柄に手を懸け、敵こはければとて逃げこもる様や候ふ
 只馳せ合はせ蹴散らして候はん物をと勇まれしかば、さらば誰れか先陣せんといふに、隆景吾先陣せん
 と兼ねていひつる事よ、誰人にもあれ思ひもよらすとて、頓て陣を進めらる。士大将粟屋四郎兵衛・
 村上彈正・野島掃部三千計をめきさげんで相戦ふ。立花宗茂・久留米秀包・毛利元康六千餘も奇兵と
 なり、右の方三町餘りに陣せしが横様にかゝる、隆景旗本一萬餘を率して一文字に切つて掛り、忽ち
 敵を討ち破り、首數多得られけり。宗茂取つたる首二つ鞍の四方手に付け、隆景の方に來られしを見
 て、取り敢へず見事に候ふといはれしかば、宗茂毎も仕るにて候ふと答へられけり。此の軍未だ始ま
 らざりし時、黒田長政唯一騎歩の士六七人召し具し、隆景の旗本に來る。隆景よくこそ來られ候へ。
 先陣の粟屋に力を添へ給へと言はれしに、長政悦びの色面にあらはれて承り候ふとて、先陣に向はれ
 けり。殊に寒風はげしう吹きたりければ、長政大綿帽子を被られしが、先陣に行きてばうしをぬいで
 世に聞えける水牛の兜の緒をしめられけり。隆景の軍兵ども、是れを見てけふの軍に勝ちたりと勇み
 けるとかや。長政ことし廿五才、武勇をかく人に信ぜらるゝ事なみなみにはあらざりけり。

〔或説に漢南にて明の援兵大軍なりと聞えしかば、諸將評定して吉川元春を先陣とす。元春勇猛の
 名高き故なり。元春軍兵を後面にして敵を見せず。敵近くなりける時、士大将某焼飯を十ばかり
 もち來りて、時よろしく候ふ、きこしめされ候へといふ。元春五つ食し、士大将二つ食して、
 残り近習の者に與へたれども得くはずとかや。敵合二町計に成りける時、元春下知して一同に
 向き直り、すかさず突きかゝり敵を追つ崩して頓て引き取られけりといへり。目に餘る大軍に逢
 ひて士卒氣を奪はれ見崩れすべきかと元春おもひてかくせられたりとなり、是れ誠に味方の氣を
 挫かしめざる將略にして、元春は關西無雙の勇將たる事、誰れか非開すべき。されども元春は朝
 鮮陣より前に死去ありしかば、隆景かくせられたりしを傳へ誤りたらんも知るべからず。〕

二二三二 國富源右衛門組討の事

南大門の軍に明の兵を追つかけ、秀家の士國富源右衛門とて剛の者大力なりしが、さはやかによる
 うたる敵に追つ付きて、三尺餘ある刀を取りのべ、三刀まで斬りたれども鐵堅くて手も負はさず、國富
 刀を捨て飛びかゝり引き組んだるに、彼の敵國富を取つて押へたり。はれかへさんとするに大磐石を

横たへたるが如し。國富脇差を抜いて二刀させごもいかなる體にや少も通らず。已に危かりし時、味方數十人落ち合ひて敵をば討ち取りたり。

二二三三 加藤光泰大言の事

朝鮮にて秀家を始め都城に在ししに、加藤清正進みて、行程數日を隔つ。諸將糧盡きんとする時、加藤遠江守光泰獨云はく、清正都城を放れて敵に向ふ。人々都城を去つて食に就かんと思へば、清正を捨て殺すべし。今爰を去るものは復男子の交はならじ。清正を捨てん事、日本の恥なりといふ。人々糧既に盡きたり如何せんといはれしを、遠江守怒つて、砂を喰はんものをといふ。砂はくはれじといへば、遠江守居丈高に成りて、汝等砂を喰はん様よしとらじ、我れ教ふべきとて福島正則をきつと見て、いかに市松いつの間に大きに成りたるぞやとて、又秀家に向ひて、今までは中納言殿と敬ひ申したりき、けふよりは中納言めと申すべし、清正を捨て殺し恥を異國にさらす人々なりといひすて、壁を立つ處に、清正糧盡きて都城に引き退き、三里計の近所に陣したりと告げ來れり。遠江守は清正と生死を同じくせんとおもへるにまぬかれけり。

二三四 吉田又助川巾を積る事

朝鮮の平安川は深さ八九尋、四五百石積の船の往來ありて、日本にては見ざる大川なれば、舟の廣さを諸家の士、或は七八町・十町或は十二三町あらんといへども審ならず。黒田長政の士吉田六郎太夫雅名六之介後登載此又助父子に見積り候へと下知せらる。か様の事に慣れず候ふゆゑ覺束なしと辭すれば、父子が組に、功者も有るべしといはれて、翌朝又助組の士を引き具し、川岸に出で川の向ひに朝鮮人三人見えたり。又助小柳權七は長高き者なり、あの向ひの人退かざる間に、急ぎ堤の上を行くべし指物をふる時踏みとまれと言ひ含め、權七走り行き其のたけ向ひの入と等しく見ゆるとき、指物を振りたれば立ちとまりぬ。即ち其の閒を打てみれば八町五段なり。長政聞きて又助二十一歳老功の者にも劣らじと稱美せられけり。

二三五 清正虎を狩られし事

朝鮮にて何れの所にてか在りけん、清正の陣大山の麓なりけるに、虎夜來りて馬を宙に引きさげ虎

落の上を飛び出でけり。清正、口惜しき事なりと怒られけるに、小姓上月左膳をも虎来て噬み殺せり。清正夜明くると、山を取り巻いて虎を狩りたるに、一疋の虎生ひ茂りたる萱原をかきわけ、清正を目がけて来る。清正大なる岩の上に在りて鐵砲を持ちならはるゝに、其の間三十間計。虎清正を睨みて立ち止まる。人々鐵砲を揃へて打たんとするを、清正下知して打たせられず、自ら打ち殺さんとの志なり。斯くて虎間近く猛り來り、口を開きて飛びかゝる處をうたれしに、咽に打ち込みたれば、そこに倒れ起き上らんとせしかども、痛手なれば終に死しぬ。

二三六 清正船を取らせられし事

清正朝鮮にて大川を打ち臨み、向ひの岸に船を繋ぎ、陸に陣屋有りて旗を立てたるを見て、あれを見よ鷗岸に添ひて泛みたるは敵はなきぞかし。誰れかある水練の者あの船取り來れと下知せられしに、果して清正の言のごとし。又清正の陣所に様なくて馬球にくるしめり。清正軍をこまかに切りて、豆にまじへて飼へといはれしに、馬の力落ちざりけり。

二三七 太閤名護屋にて大言の事

明の援兵大軍にて朝鮮に來り、日本の軍危しと太閤聞かれ、軍評定ありし時蒲生氏郷進み出て、何程の事か候ふべき、氏郷に朝鮮を賜はり候へば、切取にして打破るべきものといはれしかば、太閤是れより氏郷の斗志有るを忌みにくみ給ふ。又同時隆景使を以て、隆景が存ずる所は十萬の軍兵渡海せば城々を守らせ、隆景先陣として明朝に押し入り、北京を攻め落すべし、此の旨申せと申して候ふといふ。秀吉小早川の智謀さぞあらん、人々よく聞かれよ。秀吉功を遂げずして死するとも、秀次を大將として、明朝に攻め入らん時、我が魂魄雲に乗じて、鐵の盾をつき、唐土の奴原を一々に蹴ころして捨てなんものを、むかしも柘榴を噛みて火となしし者の有りきと聞く、其の小男の名を忘れたりしといはれしかば、施薬院秀成、夫れは北野の天神の御事にて候ふと申す。秀吉それぞかし、雷になりて天に上りしと言ひ傳ふれど、吾が陰翳の垢ほどもあらぬ物なと、大言にいはれしを聞く人ごとに驚きたり。

二三八 菅政利後藤基次虎を斬る事附羅山先生南山銘の事

黒田長政、朝鮮の全義館に陣せられしに、ある曉、俄に騒ぎければ、敵夜討にや寄せたると井欄に上られしに、虎馬屋に入りたるにてぞありける。恐れて出づる者も無かりしに、菅政利刀を提げて走り向ふ。虎嚙みかゝる處を飛び違へて腰骨を深く斬り付けたり。虎前足にて立ちあがり、愈々猛りて危かりし處に、後藤基次かけ來り、肩先を乳の下かけて切りつくれば、菅得たりやと虎の肩間を切り割つて殺しぬ。長政汝等は先陣の士大將として下知する身なるに、獸と勇を争ふ事おとなげなし、とぞといはれける。政利が刀に、林羅山銘を作りて南山と名付く、周處白額虎の故事なり。銘に曰はく、

節彼南山。山惟劍銳。苛政除去。酷吏逃藏。截邪斬佞。惟刀在箱。惟其冒虎。若有真偽。傳之萬世。爲子孫常。

〔朝鮮機張にて長政虎狩せられしに、虎一匹人の群れたる中にかけて來る。菅六之助が足輕の肩を唾みて後に擲げ、また一人をも腕を唾みて投げ倒しけるが、六之介其の日朱具足を著たるをや目に

かけけん、忽ち飛びかゝりしを、菅二尺三寸ありける刀を抜いて忽ちに切り伏せたり。其の刀合に菅の家を持ち傳ふ。備前吉次が作なりき。大徳寺春庵和尚其の刀に鑑察と付けたり。案は虎狼の國と言ひし故にこそ。羅山林子も銘を作られたりと言ふ一説あり。〕

二三九 泗川の城に狭間を切る時の事

文祿五年朝鮮にて泗川といふ處に城を構へたる時、門脇の狭間を垣見和泉守家純あけて切れと下知しけるを、長曾我部元親見て人の胸あたりより腰あたりを當てて切りたるこそよけれといふ。和泉守下げたらば敵城内を覗ふべきといふ。元親此の門へ押し寄せ心よく内を見るほごに城兵ふわりたらば一支もすへきや、上げて切らば敵の首の上を射るべきかと笑ひけるとぞ。

二四〇 加藤嘉明拔懸功名の事

慶長二年朝鮮の番兵船數百艘をから島に置き、日本の軍船を防ぐ。諸將番船を乗り取るべき評定あり。加藤左馬助嘉明目に餘る大軍を、小勢をもて、争でか打ち勝つべきといはれしかば、ひそかに

手の者に下知し、五人十人船に乗り番船のかたに漕ぎ向ふ。嘉明法を背く者どもを押し留めよとて、追々船を出されしが、やゝありて我れ押し止めずば止まらじと言ひ捨てて船に乗り漕ぎ出だす。河合庄太夫・同且次郎・荻野作右衛門、かき懸の三介五人打ち乗りて番船の中に押し入つたり。三介船は何れと問ふ。正中の本船に著けよと下知し、やがて乗り移る。敵其の勢に恐れ、船底に入りて剣を抜き鐵を揃へて待ちかけたるに、嘉明少しもためらはず飛び込みたれば、從者何かは残るべき、續いて飛び入りてなで切にして本船を乗り取りたれば、諸將も追ひ續き船を押し出だし來る。既に鐵砲の薬に火移り燒船を乗り取る者多し。河合庄次郎は十六歳なるが、飛び入るとて海に飛び込み溺死す。佃次郎兵衛・加藤權七郎、勝れたる功名せり。嘉明一人の武勇にて七月十六日白晝に押し寄せ番船百二十艘一艘に五百人三百人乗り組みたるを、僅の士卒にて悉く海に切り沈めたるは、古今に稀なる事どもなり。秀吉感狀を興へ、六萬二千石に増祿して十萬石を興へらる。池田家の長臣池田河内が妻は嘉明の女にて、河内が男伊賀は外孫なり。伊賀若き時外祖父に武功の事を尋れければ、今は年老いて過ぎつる事皆忘れたりとのみいひて止みぬ。から島の船軍の事を問ふに、十五六歳なる小姓の船に乗り移つる時、矢に中り海に落ちて死したりき。不便の至りなりと、只此の事を語りて他の事に及ばざり

かたは。

二四一 淺野長政諫言の事

太閤名護屋におはして朝鮮の軍はかばかしからぬを怒り、諸大將を集め、今は秀吉自ら押し渡るべし。三十萬の軍勢を三手にして利家・氏郷に先陣させ、三道より打ち破り、眞直に明朝に攻め入るべし。日本の事は徳川殿おはせば心にかゝる事なし。いかにおもふとありければ、東照宮聞し召し利家・氏郷に向はせ給ひ、人多き中より選び出だされて一方の大將たらん事面目にてこそ候へ。抑々我等弓箭を取つて年寄り候ふ。かゝる時に人の跡にかゝり残りたらんは口惜しき事なり、必ず一方の先がけを承るべしと仰せられけるに、淺野彈正少弼長政進み出でて、しばらく候ふ。殿下此の年月の御振廻むかに替りてこそ候へ。古狐の入り替りたると存するなりと申しも果てぬに、太閤大に怒り、やあ秀吉が心に狐の入り替りたる所謂屹と申せ、申し損じなば首打ち落さんものをとにらまれたるに、長政ちつとも騒がず、長政が如き何十人が首刎れられんも何條事の候ふべき。そもそもよじなき軍起して、朝鮮入道は申すにや及ぶ。日本六十餘州に父を討たせ、兄弟を失ひ、夫に離れ子に先立ち、歎き悲しむ者

満々たり。夫れに兵糧の運送相加はり、六十餘州の内悉くあれ野となる。今發向候ひなんには五畿七道盜賊發起せん事必然なり。徳川殿いかに思し召し候ふとも争でが是れを防ぎ給ふべき。愛を思し召して先陣とは仰せ候ふらん。殿下昔の御心ならんには是れ程の事など御心付のなかるべき。是れ唯事にあらず一定古狐の入り替りたるに候ふ。鄙しき人の詞に、人とらむとする難は、必ず人にとらむとは此の事に候ふと、憚る所なく申し放てば、太閤何れにもせよ己が主に斯く難言すること奇怪なれとて飛び草からんとし給ふを、人々押し隔てたり。長政はさあらぬ體にて、人々に色代して靜に座を立ちて陣所に歸る。かゝる所に肥後の國に逆徒一揆を企つと聞えければ、太閤大に驚き、長政を召し出だし、汝が嫡子左京大夫幸長罷り向ひて切り靜むべしと下知せられ、本多中務大輔忠勝を添へて肥後の國へぞ向けられける。

二四二 井口與市主從功名の事

朝鮮にて何れの所の事にや、廣き野に道ありて向うは山の麓なるに、大穴を構へ射手を伏せ置きて、行きがゝる日本人餘多射殺しけり。黒田家の兵井口與市が從者山崎喜藏、いで參つて見申さんといひ

もあへず走り行き、井口も馬より下り走り入りければ、山崎射手三人斬り伏せる井口續いて攻め入り追つ散らす。井口恩賞に望み候はず、あはれ朱柄の鎧免され候へといふ。物しごも寄り合ひて、武功度重なるか、或は一日の中に首七ツ取る時は朱柄の鎧もたすと申す事の候ふ。輕々しく許しがたき事にやといふ。井口是れを聞き其の後一日に首七ツ取りて朱柄の鎧もたせけり。

二四三 清正の武備嚴重なりし事

朝鮮にて清正全州に在る時釜山海より十里餘りの程、日本の軍兵城々を守りて、七八里或は十里計にて、伴の城を設けたり。清正を太閤呼ばれしかば、日本に歸るとて打ち立たれけり。戸田民部少輔高政密隠に有りて清正と舊友なれば、もてなすべき用意して待たれしが、士大將眞鍋五郎左衛門・神谷平右衛門を途中まで迎とす。四里計出づれば清正の先陣見ゆ。其の頃は四方に敵なく無事なり。二人とも軍羽織袴にて出でたるに、清正軍兵皆物具して、軍食付け旗をばり立て、腰筒の鐵砲五百挺眞先に押し立て、鐵砲には火繩をはさみ火をつけたり。清正は溜塗の物具銀の長烏帽子の胄の緒をしめ、頬當に脚當して草鞋をばき、銀の九本馬蘭の馬印を自ら背にさし、月毛の馬に白泡かませで來れり。二人馬下

り下りて迎へけるを、清正見て民部よりの迎の使者骨折なり。早くそれへ著陣せん。殊外に人々垢付きぬ。風呂をたて下々まで湯を賜はりなば大慶ならん。此の由疾く歸りて申されよと詞を懸けらる。二人承り候ふとて馬に乗り、急ぎ歸りてかくといふ。程なく清正著陣せられ、屏重門より入る。縁にて民部近習の士二人寄りて、清正のさしれし馬蘭を取りて旗籠に立つる。清正縁に上らんとて草鞋の紐を解き脚當の緒を解く時、清正腰に付けたる緋曇子の袋を座敷へ投入れたるに、ごうと落つる。米三升計に味噌銀錢三百文入れられたり。馬印をさすに腰の釣合是にて能しきなり。民部驚きて十里近きに敵もなくて、いかなる事ぞといへば、清正ものは大事と心得たるぞよき。油断大敵といふ事有り。我れ物具せず身を安んじたくは思へども、左あらんには皆懈るべし。夫れ故に身は苦しけれども懈なき爲にかくはせしなり。萬一の事あらん時懈りて事を仕誤るならば、今までの武名虚名にならむ事を慮ればなり。凡そ上を學ぶ下とて、大將寛げば下は大に怠るものなれば、常々陣法を嚴にする事に候ふ。上二人の心下萬民に通ずるとかやいふ事の有るよと答へられけるとぞ。

二四四 朝鮮より虎と象とを渡す事

朝鮮より虎と象とを引き来る。象は柔順のものなれば細き綱にて引きけり。虎には鐵の鎖を付け、左右より七八人取り付きて引き来る。朝鮮渡海の諸將一旦名護屋に歸り集まられし時、彼の虎に天力の男あまた左右に鎖をひかへ、どつとてかけ出だし、幾らも並み居たる中を通りけるに、人みな驚きたるに、清正膝立て直し、拳を握り、臂を張りて、虎をきつとにらまれしに、虎もしばし立ちとてまりて、清正をにらみて打ち過ぎぬ。嘉明は壁によりかゝりて居眠して在りしが、虎通り過ぎたる後も初にことならず。やゝ有りて目を開き何事に疑がれ候ふぞ、虎を引き通れる故にやといと靜にいはいれけり。

二四五 清正の士卒土穴に住みし事

慶長二年二月清正再び朝鮮に渡られしに、船の著きたる處は北地にして寒風烈し。土民ども土穴を穿ちて其の中に住み居りしに、日本の軍兵押し渡ると聞き逃げ走りしかば、清正の兵共土穴に入りて臥す。清正漫に民を殺さず、非道を嚴に戒めしかば、後には商人も物を馬に付けて來り賣りしに、寒氣以外の外に甚しくて、馬の毛につららの下りてからめきて鳴る聲、土穴の中に聞えけるとかや。王元

美が詩に、風勢面疑裂、凍粘踏有聲といへるをおもひ合はされぬ。軍兵盡は終日風砂の中に立ち、夜は土穴に臥しける故、皆雀目に成りしを、土民教へて馬を食して愈えけるとぞ。

二四六 森本庄林黒白鳥毛の鎗鞘の事

朝鮮にて何れの處の戦にや、清正の士大將森本義大夫流矢に臂を射させたり。斯かる處に庄林隼人馳せ来るを見て、いかに手負ひたり、此の矢抜いて給はれといふ。庄林馬より下りて抜いて捨つれば、森本とても快き事かなといひもあへず、馬にひらりと打ち乗り、一鞭打つてつとかけ出だし、庄林に纏がれよと云ひ捨てて、敵に逢ひ首を得たり。二人とも清正の士大將大剛の者なり。森本が鎗は白鳥毛を鞘とし、庄林は黒鳥毛を以て鞘とす。世人黒鳥毛・白鳥毛といひあへり。

二四七 清正の花押筆畫多かりし事

朝鮮より諸將連判の書を太閤に奉る時、清正の花押殊に筆畫かさなりやよひまいりしかば、福島正則冷笑ひて病重くなりて遺言の時の状あしからんといはれしに、清正我ればさは存ぞ。戰場に屍を

さらすとも、きたなく逃げて礮の上に死なるとは思ひ散けず候ふ、されば遺言状何かし候ふと尋へられしかば、正則詞なかりけり。

二四八 後藤基次龜甲の車を造る事

晉州の城を攻めらるゝ時、黒田長政の士大將後藤又兵衛基次、龜の甲といふ車を作り出せり。厚板の箱を拵へ内に強き切梁を設け、石を落しかけても箱の摧げざる手當なし、箱の内へ後藤入りて棒の棹を指し車を箱に仕かけ、進退自由に廻る様にして、城際へ押し詰め石垣を崩して乗り入りけり。

二四九 和寧館合戦栗山利安武功の用意の事

慶長二年日本の軍復渡海し、黒田長政の先陣栗山備後利安・後藤又兵衛基次・衣笠因幡・母里但馬・黒田宗右衛門以下四千計和寧館に陣せし處に、明の援兵押し寄する。其の由長政に告げよとて書簡を書きけるを、利安見て敵かゝり候ふ間、早々に救はせ給へといふ詞やある。書き改めよ、敵押し寄せ候ふ。先陣は少しも心を勞せらるゝ事有るべからずとこそ申すべけれとて、直させて告げたりけり。

る。斯くて敵寄せ来れば利安先陣して打ち破りたり。長政聞くとひとしく打ち出でてもみにもんでか
 け来られしに、敵早護龍臺をさして敗北しけり。先づ利安、陣所に入りて何とて軍をしたるやといひ
 も終らぬに、利安目を見出だし、押し寄する敵に辭退することや候ふと申す。長政汝等討死せば我れ生
 きがひなしと思ひてかくはいひしなり。何とて疾く告げ来らざるかといはれしかば、傍より告げ申す
 書簡の詞を書き改むるとて遅かりきと申す。利安夫れば臣が改めさせて候ふ。仔細はしかじかなり。
 たとへ疾く救はせ候へと申すとも、行程隔りたれば無益なり。敵は四萬計も候はん。味方必死を思ひ
 定めて軍すべきにて候ふ。たとへ屍を異國の野原にさらすとも、名は後の世に傳はるべし。黒田が先
 陣の剛の者ども、大敵に取り巻かれ潔く討死したりと言はれなん。又とく救はせ候へと申さんには、
 後日に黒田が者ども、主君の援ひを待ちかれ皆打ち殺されたりと人に笑はるべし。是れ日本の武名を
 穢すに候はずや。弓箭取る身はかりにも名こそ惜しく候へ。且つは今生の暇乞と存じて告げ奉る書
 簡、殊更に改め申しきと申しければ、長政大に悦ばれけり。

二五〇 栗山利安儉約の事附日根野備中守黒田

家に銀を返す事

利安若き時は善介といひ、中頃は四郎兵衛といふ。長政に筑前を賜はりし時、名島の城に長政居て
 左右良の城に利安を置かれけり。祿一萬五千石極めて儉なる人なり。人の衣服の美麗なるを見ては、
 褒晴といふ事の有りといひ教へ、又價高く馬を購ふ者あれば、さばかりの馬も二疋の用をばなまじ。
 何とて無益の費するぞと戒めけり。されども事に臨みて金銀を惜しむの心なし。従者をいたはり憐み
 貧乏を助くる事、尋常の人に大に踰えまされり。

〔日根野備中守朝鮮に使としてゆく時、黒田如水に銀をかり、歸りて後如水のもとに行きしに、如
 水近習の士に先に人の贈りし鯛を、三ツにしてその骨を煮て、もてなし候へといひしかば、香齋
 の甚しき事よとおもひ居たり。頼て肴を出だし酒宴有りし後、彼借りたる銀百枚取り出だし返し
 しに、如水はじめより返し給はらんとの心にてかしか候はず、異國に渡らるゝにより頼まれしかば
 送り參らせしなりとて受け取らずして止みぬ。栗山も如水の風にならひたるにや、君臣ともに頼
 母しき事ぞかし。栗山の戒をもて惣べて世の有様を見るに、士といはるゝ人の體こそ無下にくち
 をしけれ。多くは美衣を着かさり明暮酒宴して馬具武具やうの物いかに有るやらんしらす。多く

は商家に典當し、或は茶の湯よとて古びかけたる器の何の用もなき物に數金を費し、博奕とてあらぬ戯に夜を明かし、斯くばかり無二にいひかはしけん人の黄金を奪ひて、其の人の赤裸になるも顧みず。是れはそも盜賊の心にも劣りはてたる事なるべし。扱て物がたりするを聞けば、多くは女色のたはふれ事のみにて、禮義廉恥は露ばかりもしらず。又或は儉約にことよせて利倍の事には錐刀の末をも争ひ、人を欺きて己が得あらん事を願ひ、或は奢侈にふけりて用度に苦しみ、商人に向つて首をたれ、其の人の恩を得て金銀をかり、是れを恥ともせず、門を出づれば從者あまた召し具し我れは門地のしかじかなりとて、途中には人をいかめしく追ひ拂はしめ、家人を飢ゑしめて購ひたる價をやらす。大國の君も亦大かた斯の如し、不仁不義の行をなして、世の人の誹笑も知らず、世界は皆かくなると思へば、風俗の衰へ無下に口惜しき事なり。

卷の十一

二五二 竹中重治心掛の事

竹中重治曰、分に過ぎたる價を以て馬を購ふべからず。其の馬に乗りたる時、能き敵と見かけ追つ詰めて飛び下りんと思ふ歟。或は又鎗を合はせんと下り立つ時、馬副の人の横かざれば此の馬人の物に成るべし。又かゝる馬は得難しと思ふ心出でて期を延ばす事あり。此の能き馬故に却つて名を失ふ事もあるべし。かせ士は金十兩にて馬を購はんとするに、五兩にて求むべし。なしげもなく飛び下り乗り放ちて能き時は捨てますべし。さて五兩の金にて又馬を求むべし。馬にかぎらず此の心得有るべきなり。身をも義によりて捨つるぞかし。まして財寶をや。塵芥とも思はぬ心掛、常に有るべきこそ土の本意なれどぞ。

〔北條家の厩を預かりし諏訪部といふ者度々功名あり。何れの時の軍にや、勝田入左衛門といふ者と二人物見に出づ。敵不意に出でてつけしたふ。二騎引き取る時、諏訪部は馬を預かる故勝れたる〕

馬に乗りたる故、乗り切つて馳せ歸る。勝田は後れたり。敵追つ詰めたれば、下り立ちて相戦ふ。味方助け来れば勝田打ち伏せられ頭半切られたり。敵引き取りたるに勝田助からじと思ふ。勝田手にて頭を持ち上げいまだ死せざるに、人々は捨てて歸るやといふを聞きて助けて歸りけり。勝田も度々の功名あり。後松平右衛門大夫に仕へけり。竹中が論尤も士たる者の知るべき處なり。弓箭取る身は朝夕に軍旅の事を論ぜん事あらまほしき事なり。さらずは必ず天の冥加に盡くべきなり。戦國に生まれし人は、其の事に臨みて功有りて祿を得たるにてこそあれ。今泰平の時に生まれ父祖の蔭にて祿を世々にするは、天より士の職を命ぜられたるなり。天より命ぜられたる其の任を忘れなんには、天の冥加に盡きん事必定なり。又天下の四民の上にありて、下を鎮むる職おろそかにせんは、口惜しかるべき事にこそ。

二五二 峯澤某謙信を撃たんとせし事

謙信の許に峰澤何某といふ士、罪有りて放斥せられしに、越中の椎名に奉公し、謙信越中へ師を出だされし時、彼の士衆に隠れ、鐵砲を持つて伺ひ居たりしが、俄に鐵砲を傍に投げ捨てて泣き居たり。

謙信見出だしていかにかに峰澤めづらしといはれしに、さばかりの仁君智將を撃ち奉らんと存ぜし事悔しく成りて候ふ。今遙に見奉りて先に屋形の心に背き、又かゝる段けを工み申す事、此の上もなき大罪にて候ふ。とうとう首を刎れらるべしといひて平伏しければ、謙信打ち笑ひ、吾れに智仁とは相應せざる虚名なり。疾く馳せ歸りて椎名によく仕へよといはれしかども、かの士越後に歸りて農夫と成りて、一生を終りたりとかや。

二五三 久世三四郎坂部三十郎物見の事

東照宮何れの時の軍にや、久世三四郎宣廣・坂部三十郎廣勝三人を物見に出だし給ふ。坂部は勇める色あり。久世は氣色甚だ悪しうみえしかば、側より笑ふ人のありしに、東照宮坂部は天性の剛の者なり。久世が及ぶべきにあらず。されども久世は人に劣りて生き甲斐なしと思ひ定めたる者なり。其の故に務めてはげむゆゑ、心を勞して其のけしき願れてみゆ。今見よ坂部よりも敵近く進み行きて見て歸らむ物をと仰せける處に、二人歸り参りたるが果して御詞の如くなりけり。東照宮坂部は生得の勇を頼みにして懈あり。久世は勵むなもて味深じと感ぜさせ給ひけり。

二五四 野々口彦助物語の事

明智光秀が士野々口彦助・山中鹿之介に逢ひて功名せん事を問ふ。鹿之介物まへには必ず目の明かものなり能く心得られよといふ。彦助させる事ともおもはず。其の後何れの戦にや、川際に野々口打ち出でたる處に、朝霧たなびきて物色見え分かず。時に山中が教へし事を思ひ出だし、手綱をひかへ、爰にて目が見えぬといひしは吾が後れたるならんと、目をふさぎ心を静めて目をひらきたるに、川の半に物具したる武者、大差物を指して只一騎渡り来るを見付けて、心もさわやかに目も明かに成りたれば、押し並べて引組んでおち首を取りたり。後に彦助是れも我が眞實の功名にはあらず、彼の敵大さし物に身の疲れて軋く我れに組み敷かれたるならん、彼の敵も物前に目が見えざりつらんと暗りき。

二五五 石谷定清御供に参る事

石谷十藏定清は先祖は遠江石谷村の人なり。大阪御出陣の時江戸に残させ給ひしに、御跡より従者

一人に具足箱を背に負はせ、自ら鎗を荷ひて潛に江戸を出で、駿府にて追ひ付き奉りけり。兼ねて心易かりし近習の人になより、江戸に残り申す事口惜しく存じ重き御法を破りて参りぬ。首を刎れられん事は素より覺悟したる事なれば、いかに御咎蒙らんとも露ばかりも悔む事は候はずと申し上げて給はり候へといひしかば、將軍には殊に法制を嚴に思召し給ふなれば、争でか御ゆるされのあるべき。もし御宥あらんには、御あとより引きつゝきて追ひ追ひに来るべければ、必ず烈しき刑に行はれなん。されど捨て置くべき事ならねばかくと申すに、合徳院殿黙しておはします。十藏は既にわが事聞えつる上は、今夜か明朝は首を刎れられなんとて待ち居たりしに、十藏よべとて召されけり。思ひ極めて進み出づれば、如何にして法を破りたるや、悪き奴哉。切つて棄てばやと思へども、若き者なればゆるすよと仰せ出だされて黄金二枚賜はりけり。さて江戸へは重ねて誰人にもあれ、一人も忍びて御供に参りたらば重罪たるべしと、固く仰せ出だされたりとなり。

二五六 坪内玄蕃心得の事

石谷十藏定清・坪内玄蕃に向ひて度々の功名世に高し。あはれ心掛にて、功名を遂ぐべき道もあら

ば教へられよといふ。坪内聞きて能くこそ問はれたれ。人々事に臨みて、神の力を頼み、八幡八幡といふ。我れも又頼みては相だのみになりて成就せじと思ふにより、我れは毎も八幡といふ神を刺し通さんと一筋に思ひて、後れを取らざりきといひけるとぞ。

二五七 道化清十郎平野與兵衛に對面の事

道化清十郎は美濃の人にて、信長に仕へて度々武功勝れたる故に、信長清十郎が指物に無雙道化といふ四字を書き與へられしかば、世の人無雙道化といへり。平野與兵衛は齋藤家の士なるが、是れも武功譽れ高く、信長是れを招かれし時、人々往きて平野に對面するに、道化も打ち連れて物語せしが、道化いはく御身はかゝるに先立ち引くに殿ると聞く。其の趣を委しく語りて教へられよといへば、平野更に心懸故にも候はず。齋藤家に冥加に叶ふ士は皆々討死しつ。吾生き残りて重ねての軍には必死と思ひつゝ、其の武勇の不足ゆゑに死を遁れ、今日の間にあひ、恥の上の恥にあひ候ふと答へければ、只今のこたへ至極の道理にて候ふ。先がけ後殿は必死を志さずては成りがたしと、大に譽めて感じけり。

二五八 谷太郎左衛門物前心得の事

谷太郎左衛門は武功の士にて、黒田家にて客の會釋にて招き置かれけり。谷が日はく軍の場にて先づ敵より味方に氣を付くべし。一人先に進み出で踐み堪ふる處に、跡より二人三人行き重ならば始め出でたる者を強としるべし。其の處へ行くべからず。吾れは又別の所に獨り踏み出だして堪へ居るべき志せよ。しばらくすれば、又其の處へ味方續くぞかし。又日比心安き人のわが主君に寵愛せらるるも、軍場にて其のかたはらに寄るべからず。必ず獨立の心得すべし。又士は弓鐵砲の上手といはるゝ事好む事にあらず。敵を打ち立てたき時か或は城へ射込みたき事のあらんに、足輕は進みがたき故に人をさして命のあらん時、射あてざれば面目なし。危き場は敵も堅く守る故に、多くは大死する事ありといへり。

二五九 可兒才藏が事

可兒才藏吉長は尾州可兒山の人にて、大剛の者なり。篠を指物にす。首を取りて篠の葉を口中に押

し込み、投げ棄てて後の證としけるゆゑ、世の人傑の才藏といひ傳ふ。關白秀次に仕へ、長久手の軍に秀次引き退かれしに、岡本嘉介・村善右衛門等踏みとまりて支へしに、才藏が来るを見て山に倚り懸る心地せしとなり。さて才藏殿は何方にぞと問ひて其の退かれたる方に行きけり。目前の敵を見捨てて引き退きしは聞きしにも似ぬ才藏かなと論じけるが、或日聚樂にて語り出だして、才藏にいかなる所存ありしやと問ふ。才藏聞きて何心なく殿の跡を慕ひたるばかりなりき。今人々の論を聞くに尤もなり。さらば暇申すとて宿へも歸らず直に立ち去りけり。後に福島正則招きて七百五十石の祿を與へらる。才藏が下人に久右衛門といふ剛の者あり。才藏其の祿の半分を與へ、竹内久右衛門といふ。才藏が墓藝州廣嶋に在りといへり。

二六〇 石田三成が事

石田治部少輔三成は近江國石田村の百姓五右衛門といふ者の子にして、いとけなかりし時佐吉といひしが、家貧しく近き邊りの寺にやりて在りけり。或時秀吉彼の寺に行き、佐吉が明敏なる故、呼び出だして側に仕へしめしが、頼に祿を増し、水口四萬石與へられける。後三成に人數多招きたらんと問は

れしに、島左近一人呼び出だし候ふと申す。秀吉それは世に聞ゆる者なり。汝が許に小祿にていかで奉公すべきやといはれしかば、三成祿の半分を分ち二萬石與へ候ふと答ふ。秀吉聞きて君臣の祿相同じといふ事昔より聞きも傳へず。いかさまにも其の志ならではよも汝には仕へじ。ゆゑしくも計らひたるかなと深く感ぜられ、島を呼び出だして手づから羽織を與へて、是れより三成に能く心を合はせよといはれけり。三成佐和山を賜はりたる時、島に祿増し與ふべき由をいひけれ共、祿更に不足にも候はず、他の人に賜はり候へと辭しけり。左近が父もと室町將軍家に仕へ、江州高宮の傍にかひなきさまにて隠れ居たりしを、三成招き出だしけり。

二六一 關白秀次公生害の事附吉田修理が事

秀吉秀次を養ひて關白を讓り、夫れより太閤と申す。文祿二年秀頼誕生あり。秀次よからぬ事どもさまざまありければ、文祿四年七月八日三成太閤の前に出でて、關白の謀叛既にあらはれしとて證を正したる書を見せ申せば、太閤怒りて宮部善祥坊・堀尾吉晴等に下知して、疾く伏見に來らるゝか、一と先づ高野に退き申しひらきあるか、二つの中よと云ひ送られしかば、秀次畏まり承はり候ふとて

其の後粟野木工頭秀用・白江備後守成定・熊谷大膳亮直澄三人に、此の事いかゞあるべきと問はるゝに、白江聞きもあへず、殿下只今聚樂を出で給はん事然るべからず候ふ。此の三人の中一人伏見へ参りて、犯さぬ罪を申し開くべし。かなはで討手來らば、防矢射て思し召し定められん外他あらんやと申す。熊谷此の謀尤もさる事なれども、帝都の騒ぎとならん事其の恐れなきにあらず。また謀叛人といはれんも口惜しかるべし。父子の禮儀なれば都を出でて東坂本に趣き、讒者を糺さん事を申すべし。御許されなくば唐崎濱に打ち出でて、勝負を決するの外道なしとぞ申しける。粟野只今危きに逼りて宥を請ふとも聞入れられじ。逆も遁れぬ所なれば、今夜伏見に押し寄せて屍を城にさらすべし。婦人の縊れて死するが如くならんは口惜しき事なりと申しけれども、秀次みな用ゐずして高野山に赴きけるが、〔一説に吉田修理此の時申しけるは、謀叛眞實に御座さば、人數一萬我れに付けられ候へ。今夜伏見に夜討して、只一時に城を乗り破るべしといひけれども、聞き入れざりしとなり。修理後に越前秀康卿に仕へ、大坂陣に忠直の供して先陣たり。五月五日天王寺口の御先手加賀利常に命ぜられしかば、忠直甚だ怒られし時、本多伊豆守然らば明日眞先かけて、加賀の軍兵を踏み越え、おもふ儘なる軍せん。かゝる事は吉田修理よく決斷する者にて候ふとて呼び出だす。修理聞きも

あへず、夜も短く候ふ。早支度して打ち立つべし。人々續かれよと言ひ捨てて、己が陣所に歸みや否やひたひたと物具し、先がけして加賀の軍兵の押し行く所に修理馬を乗り寄せ、今度の命には岡山表は加賀、天王寺表は越前の三河守先陣をうけたまはりたり。各々はしらするやと云ひもあへず、眞一文字に押しやぶりかけ抜けたれば、越前の軍兵おしつゝ。修理は今日必死と思ひさだめければ、本多忠朝の陣より鐵砲を打ちかかるとひとしく、死ねや死ねやと聲々に呼ばはり、眞田が陣を切りくづし、北ぐる敵を追ひかけ、天満川のふかみに馬を乗り入れ、溺死しけるとぞ。]

二六二 木村常陸介最後の事

關白秀次高野の青巖寺にて自害ありければ、事を司り寵愛せられし人々、所々にて誅せられ自害しける中に、木村常陸介師春・檢使の松田勝右衛門に向ひ、今度關白聚樂を出でて、伏見に赴かせ給は

んと定められし時、師春申しぬるには、太閤御對面だにおはしませんがには護者のほど明らかめ給はん。されども夫れまでもなく中途より遠國へ放流せられ給ふか、かひなく御身を白刃に伏し給はん。必ず此の二ツの間なるべし。あはれ使者を斬つて捨て、諸將の妻子聚樂に有るを人質に取り、罪なき事を申し開かせ給ふべし。さもあらんには和睦も堅く定まり。又戦にも勇名を遺すべし。空しく聚樂を出でさせ給ふ様もあるべきと再三諫め申しけれども、吾れ太閤に敵する心なしとて承引き候はざりき。然れば關白に於て異心ましまさざる事明かなり。此の旨を達して給はりなば、其の恩黄泉の下にも忘るべからずと云ひ置きけるを、松田折を得て秀吉に申しければ、太閤木村が志を慰みて、妻子に米百石を興へて、京都誓願寺の近所に住居せしとぞ。

二六三 秀吉有岡城へ使者に行かれし事附河原

林越後山脇源太夫が事

秀吉信長の使者として荒木村重が有岡の城に来る。村重が土河原林越後守治冬猿めがつらだましひ遂にあたをなすべし。今刺し殺さん事易からんと村重にさゝやきけれども、村重聞き入れず、此の事

を秀吉に語りければ、秀吉治冬を呼び出だして懇に詞をかけ、さしたる脇指を援きて引出物にぞしたりける。村重指替のなくてといへば、秀吉吾れ刀一つを頼みて、信長に奉公する者に非ずといはれけり。後秀吉世を平らげて、治冬を深く悪みさがし出だして殺されけるに、治冬君の爲に其の仇を除くは武士の常の事なり、秀吉蓄き怨を忘れず、無道なりといひて死したりけり。

〔秀吉河原林に興へられし脇指は、三條吉廣が作なり。河原林が舊友山脇源太夫重信に傳へたり。山脇は攝州の人。幼かりしより勇名の聞えあり。甲州に往きて内藤修理が許に在り。其の後攝州に歸り、荒木攝津守村重に仕へ、類に用ゐられて長臣たり。村重神田伊賀守と軍の時、神田を軍奉行郡兵太夫は勝れし剛の者なるを、毛付けして討ち取つたり。凡そ首數九十八取りて、首供養三度せしとなり。荒木亡びて重信中川清秀の許に隠れ居たり。清秀の妻は重信がなばなり。前田利家・柴田勝家・丹羽長秀一萬石をもて招かれしかども、引き籠りぬたりしを、護國公池田信親に招かせ給ひしかば來り仕へ、山崎合戦に、明智が士大將丹波國にてしら山といひける城を預かり居たる村上源之丞と、馬上にて鎗を合はす。山脇が鎗は十文字にて、村上が馬の額に疵付き馬飛び出でければ源之丞馬より落ちけるを、從者かけ來り助くるを、源太夫詞をかけ、村上で討ち

組みける所を、味方數多おち合ひて村上が首を得たり。其の後も功名ありて、士三十騎の將たり。

二六四 成田助九郎誅せらるゝ事

秀吉北國に赴きし時、丹羽長重の小松の城に立ち寄りたるに、長重の士成田助九郎といふ者あり。秀吉先殿を北陸道の管領にせんと、志津が嶽にて約束ありつるが、加賀二郡・越前・若狹を賜はりぬ。先殿過ぎさせ給ひて後ち小松十二萬石に滅じ、既に滅亡に近しとも申すべし。秀吉の不義憎むに餘り有り。臣に討手仰せ付けられよ願く刺し殺すべしといひけれども、長重聞き入れずして止みたるを、秀吉いかにして洩れ聞かれけん、大に怒つて成田を憎む事甚しかりければ、成田小松を退いて、伊勢の朝熊に隠れぬたりしを、終に搜し出だして殺されけり。成田が子半左衛門、長重に仕へて、小松の軍に戦功あり。

二六五 秀吉公連歌の事

秀吉或時細巴に向ひ、吾れ發句せん汝脇句せよとて、奥山にもみぢふみわけなく螢、とせられしに、しかとも見えぬ燈火のかけ、と細巴脇句を附す。螢は鳴く虫に候はずと申す。秀吉聞きて螢に聲なくとも、吾れ鳴かさんとせば鳴かずしてやあるべきといはれし時、細川幽齋かたへより、武藏野やしのなつかれてふる雨に螢よりほかなく虫もなしとよめる歌の候ふといはれければ、秀吉悦ばれけり。

〔此の歌は螢の聲ありといふ心にはあらず。雨降る夜は皆虫の鳴き止むなれば、光の見ゆる螢より外虫なしといふ事なり。〕

二六六 三木牛之介鍬形の詩歌の事

三木牛之介は畠山高政に仕へて剛の者なり。五尺ばかりの鍬形打つたる兜を着て、運在り天見敵無レ退、又一人は只さし出でぬこそよかりけれ軍にだにも先がけをせば」とよめる歌を鍬形に書きたりしが、天文十一年正月河内の合戦に、一番鎗を合はせ敵の大將を討ち取りたり。天文十六年七月廿三日三好政勝入道宗三と舍利寺の軍に討死しけり。後ち此の歌の事を秀吉に物語する人在りければ、秀吉

歌の趣意よろしからず。吾れならば「人はたゞさし出づるこそよかりけれ軍の時も先がけをして」と
よむべき物なといはれけり。

二六七 谷大膳武勇討死の事

天正六年秀吉播州三木の別所長治を撃つ時、谷大膳は濱手の大將たり。兼ねて大膳は寄騎にと秀吉
望まれしかども、信長許さずして加勢たらしめらる。大膳敵三騎と馬上にて鎗を合はせ皆討ち取りた
り。秀吉疾くかさの丸名を攻められよといへば、大膳城堅固にして容易に攻め取り難しと答ふ。秀
吉日頃勇名高き大膳小城一つ破りかれたるかと謂なかけられければ、大膳も怒り、秀吉も既に刀の柄
に手を懸くべき色なりしかば、竹中半兵衛立ちふさがり、戦場の勝負こそ力を盡くすべきにかなる
事ぞといふ處に、峰須賀彦右衛門も來りて秀吉の轡を取つて押し返す。夜に入りて秀吉酒肴を持たせ
て大膳が陣屋に至り、けふの武功拔群なり、先の問答は我が過にて、後悔大方ならずとて懇情甚だし。
其の後大膳手勢を率ゐてかさの丸へ攻めかゝる。城中もこゝを大事と防ぎ、矢石を打ち出だせども大
膳少しもひるまず、士五十騎・歩卒二百計一の城戸口を押し破りたれば、手負死人數をしらず。寄手

押しつづけば大膳愈なく乗り破りたるが、數ヶ所手を負ひて蹠きたる所に、法師武者狸々皮の羽織著
たるが引き返して大膳に向ふ。大膳吾れ疲れたり、近寄りて首を取つて高名にせよといふを聞き、走
り懸がりて一太刀打つ。大膳敵の草摺を取つて引き寄せ、脇指を抜きて刺し貫く處に、別所が士大將
由井小兵衛と名乗つて引つ返して馳せ來り、大膳を一太刀斬りたり。かゝる處へ大膳が嫡子出羽守十
七歳なるが走り寄つて、疊みかけて由井を打つて芝居に打ちすゑ、押へて首を取り父に向へば、大膳
は息絶えたり。出羽は父の死骸を陣屋に入れ、取りたる首を秀吉の實檢に備ふ。秀吉大膳が討死せし
由を聞きて、せめて死骸になりとも對面せんとて陣屋に行き、惜しき人を討たせけるよとて涙にむせ
ばれけり。

「秀吉家譜に載せたるとは大に異なり。然れども此の一條は谷の家に傳へたる説なる由なれば、家
譜は誤なるべし。」

大膳は江州犬上郡の人。信長に仕へて川尻肥後守・稻葉伊豫守と同じく軍の評定の人のに加へらる。
十四歳より四十七歳まで鎗を合はする事九度、首を取る事十七度なり。

二六八 戸川肥後守秀吉公を負ふ事

浮田秀家伏見にて秀吉を饗しける時、廊下より行く處の白砂の上に、戸川・花房を始として並び居て拜謁す。秀吉戸川達安に吾れを負へといはれしかば、戸川秀吉をかきおうて書院にゆきけり。秀吉かゝるふるまひ多かりければ、其れよりして古き家々の禮儀も多く失ひたるにぞ。

二六九 黒田如水先見の事

秀吉病重かりしかば、朝鮮渡海の軍兵を引き取らんと計られける時、朝鮮へは必ず徳川殿赴かせ給ふべし。さらば日本は自ら徳川殿に歸服すべしと人々いひし處に、思の外に秀吉石田三成に命ぜられて朝鮮に赴きけり。さては日本の權威は三成に歸すべしといひふらす。黒田如水獨是れを然りとせず。朝鮮の事三成是れを承るにより、日本は徳川殿の掌の中にありと覺ゆ、三成是れより伐りて人はれを嫉みなん。然らば徳川殿の仁徳に靡き従ひて、日本は自然と徳川殿に歸服せんといはれしが、果して然りき。

二七〇 秀康卿伏見にて妓女國が舞を見給ひし事

越前の秀康卿伏見にて、國といふ妓女を召して舞はせられし時、襟にかけたる水晶の珠數見苦しきとて、物具の上にかへ給ふ珊瑚の珠數を賜はりけるが、しばし舞ひける時、頬に涙を流し給ふ。人人怪しみければ、秀康卿今天下に幾千萬の女あれども、天下一の女と世に譽められ、名高きは此の女なり。吾れ天下第一の男と世にいはれず。あの女にさへ劣り果てたるかとおもへば、泣かれけると仰せありけり。

二七一 直江兼續が事

越後の士大將直江山城守兼續は、朝日將軍義仲の乳子樋口次郎兼光が末孫なり。謙信に仕へて景勝に至る。景勝奥州にて百萬石を賜はりし時、米澤三十萬石を直江に與へられ、陪臣の中第一の大祿なり。長高く容儀骨がら變なく、辯舌明らかに殊更大膽なる人なり。且つ文藝にも暗からず。五臣注の文選は此の人板行させたるなり。詩をも作りて、春雁似し吾吾似し雁。洛陽城裏背し花歸。なごいふ句も世に

聞えけり。伏見の城にて諸大名幾等も並み居たる中に、伊達政宗懐中より金銀取り出だして人々に見せられしに、其の頃金銀の始まりし比にて珍しとてはやさる。直江が未座に在りしをこれ見られよとありし時、直江扇の上に金銀を置きて、打ち返し女童のはねつくやうにして觀しかば、政宗いや苦しうも候はず手に取られよと言ひも終はらぬに、直江謙信の時より先陣の下知して塵取り候ふ手に、かゝる賤しき物とれば汚れ候ふ故、扇に載せて候ふとて、政宗の方に投げ戻しけり。兼續父も山城守といふもと僧なりしが、還俗して武勇を事としけり。

二七二 石田三成直江兼續密謀の事

石田三成或雨夜の徒然なりしに、直江を近付け私語きけるは、卑賤より出でて天下をなさむるは、大丈夫の志なり。我れ豊臣家の恩深し。太閤斯く世におはしまさん中は思ひ立つべからず。されども終には旗を揚げ天下をとらばやと存するなり。其の時徳川家父子をば如何にして討ち亡ぼすべき武畧を廻らし給はらんやと語りしに、直江之れを幸とや思ひけん。是れこそ志す所に候へ。されども徳川父子關八州を領して、且つ蒲生氏郷といふ勇將に親しみあり。輒く勝つべからず。先づ氏郷を滅ぼし

景勝に會津を賜はりなんや。然らば吾れ景勝に謀りて旗を揚げ、我れ先陣して師を出だすべし。其の時西國の諸將たちをかたらひ、押し寄せて關東を討ち亡ぼすべきよとこまこまと相謀り、終に氏郷を毒害し、後秀行八十萬石の地を削りて、會津を景勝に秀吉賜はりたるは、此の謀より事起るといへり。

二七三 兼續惺窩先生に逢ひし事

直江兼續、惺窩藤敷夫に對面せんといへども聞き入れられず。兼續おして行きたれば不在なり。度度招けども行かざるに、今日來たるにも逢はず、偽りて他に出でたるとや思はんとて、直江が許に行かれしに、直江其の日關東に赴きしかば、跡を追ひて大津に至りて對面あり。直江廢れたる家を急に取り立つる時、人臣の心得はいかにと問ふ。惺窩事を速にせんとせば却りて敗るゝ基なりとぞ答へける。後に直江景勝に勸めて旗を揚げさせ、必ず家を滅すべしと惺窩いはれしが、果して景勝に事を起させたるが、其の功ならざりき。

二七四 石田が黨東照宮を謀り奉らんとせし事

慶長三年八月十八日太閤逝去。其の比台徳院殿伏見におはしまして、太閤の病重かりしかば、關東に赴かせ給はん事延引なりしが、俄に十九日伏見を發して關東に歸らせ給ふ。是れ東照宮遠大の神慮なるべし。四老奉行内々相計り、徳川殿伏見に在りて權威日々に増長すべし。秀頼公を早く大坂へ移し、諸方一同に參り集まりて尊敬すべき事然るべしと、東照宮に強ひて申して同四年正月十日大坂に移居あり。東照宮も送らせ給ひて、大坂へ御出あり、片桐東市正且元が宅に御止宿ありけるが、十二日のあけぼのに俄に打ち立ち給ひて、淀川を御船にて上らせ給ふ處に、枚方近く川岸に人多く群りけり。若しや謀り奉る叛反の輩に有るべきかと驚く處に、井伊直政が足輕と見ゆと申す者あり。程なく御船近く成りければ、脇五右衛門などいへる物頭跪きて待ち奉りて、頓て伏見に入らせ給ひぬ。

〔又此の時御乗物には村越與三右衛門を乗せさせ給ひ、東照宮には陪者の騎馬の中に御まじりありたりともいへり。又井伊直政は馬上にて御迎に出て物具して其の上に常の衣服著たり。直政が手の者皆下に具足を著、弓鐵砲の者彼是二千計にて參り、殊に御愛でありける彌入鹿毛を引き來りければ、其の儘打ち乘らせ給ひて歸らせ給ふともいへり。〕

此の頃既に世間さまざまに言ひふらし、いかなる事が出で來らんと人々あやぶみ思へり。東照宮も御

屋敷に大竹にて菱垣を結ばせられ、御門を押し開き、敵寄せ來らば堅固に防ぎ守らせ給ふべき設あり。御門を開く事然るべからずと申す者ありければ、門を閉ぢて守らば敵に侮らるゝなり、只押晴れて軍の支度をせよと仰せありけるとぞ。京極高次參りて大津の城へ引き移らせられんやと進め申されけるを聞き召し、敵寄せば上の臺へ押し上げ、金札の宮の邊にて眞丸に來て一合戦すべし。吾が兵二千計やあらん。敵何萬もあれ打ち破る事難からずと仰せられけり。正月十五日安國寺瓊長老・生駒雅樂頭・中村式部少輔・堀尾帶刀四人、四老五奉行の使として、東照宮に參りて、伊達政宗・福島正則・藤須賀至鎮・藤原組の事によりて、徳川家獨り擅なる事ども、豊臣家の爲然るべからざる由申す旨あり。依りて世の中愈々様々なる風説あり。其のころ榊原式部大輔康政、伏見に上るとて、二月廿五日尾州宮に著きけるが、伏見の騒がしき由を聞き夜道を急ぎて、道すがらにてきけば、伏見にて既に東照宮の御館へ敵押し寄せたりなごといひふらす。廿六日の晩膳所にて伏見よりの飛脚に行き逢ひ、いまだ弓箭は始まり申さぬといふを聞き、康政悦んで則膳所に陣し、秀頼の下知と稱し、伏見の騒に付東海・東山兩道の人留めすとふれさせ、勢田・矢橋を三日押し留めたり。其の比の騒がしきに、諸國より聞き傳へ京・伏見に集まる人殊の外多かりしに押し留められ、草津・野洲を始として何萬といふ數計るべか

らす。扱て康政三日の後、未刻に構へたる關所を開かせたれば、旅人一同に京伏見に入る。康政膳所を立ちて、七千許の人を率ゐて伏見へ入りければ、京にて關東より數萬の軍兵馳せ著きたりといひふらす。康政小具足著て鉢巻し、馬穿押し立てて参りければ、御前に召して御手づから御のしを下されけり。康政下知して御藏より料足數千貫出ださせ、人々に分け渡し、内府の軍兵六萬にてかけ著きたれば、箭にて兵糧の用意俄に設けられたりといはせて、店屋物を買ひ來らしむ。數千人京・伏見・淀に馳せ廻りて、赤飯・菓子・酒樽の物一つも残らず買ひ來れば、關東より十萬の軍兵集まりたりと、人は思はぬ者もなし。是れに依りて石田が謀、空しくなるといへり。東照宮柳生又右衛門は、石田が士大將島左近と、同國のよしみにて懇なりと聞き召され、左近方へ行きて物語して彼はいかにかいふらん聞きてきたれと仰せありしかば、柳生左近に逢ひて世間の物語し、いかに成るべき事ならんいひければ、左近聞きて今松永・明智二人の智謀決斷ある人なれば、何事かあるべきと打ち笑ひけり。此の子細は或時石田密謀に及びけるに、左近豊臣家の爲を存ぜんに斯くあらで止むべきや、されども愛に存する旨あり。大事を企つるには我が志す處を無二無三に決斷して、少しも猶豫有るべからず。然るに去年より度々仕果すべき圖を、空しくはづし給ふ事多し。既に時を失ひぬ。能く能く世のありさま

を見るに、石田の家を惡む人々大かた徳川殿に心を寄せたり。當家の存亡計るべからず。一日の過ぐるも殘多し。只利を非にまけて、唯今まで疎遠の諸大將達へもへりくだりて遺恨なく計ひて交り親しみ、しばらく時を待つべきも、一つの計策にてこそといひければ、三成されば縱令一時に能く志を遂ぐるとも、後の安かるべき様を計るなりといひけるに、左近いやいや事能く一時に勝を得るならば、後に何の危き事か候ふべき。内府に親しき人々を積るに、其の兵二萬に過ぐべからず。味方素より心を合はする大國の人々、又近國の兵を集むるとも、忽ち馳せ寄つて五六萬には及ぶべし。景勝卿采配を取つて下知し、關東を攻め破らん何程の事か候ふべきとて、又存する旨をいひ出だしけるに、客の來て三成坐を立ちければ、榎原彦右衛門居残りて左近に向ひ、いかに仰せざる事なり。松永彈正・明智光秀は、無雙の惡逆の者なれども、事を決斷するに誰れか相並ぶべき。此の詮議の破り相手に頼むべきものなといひけるとかや。其れによりてかく柳生には答へけるなり。

二七五 細川忠興忠告の事

石田三成を始め相組みする人々、加賀利家を推し尊みて、東照宮を傾け奉らんと日夜謀れり。利家

の長子利長、細川越中守忠興招きて、累年親しみたる閒薄からず、さぞな危ふからんを扶け給はんやと問はるゝに、二代の知音にて候へば、聊籠略候ふまじと答へらる。利長尤も斯くこそあるべけれ。頃日石田三成・小西等相計つて、内府の向島の館を攻め圍まんと議決しぬ。潜に知らせ候ふぞと語られしかば、忠興熱々と聞きて、日比の親しみ、斯かる大事を告げ知らせ候ふ事淺からぬ事なり。心得候ひぬ。明日参りて申し合はせ候はんとして歸られけるが、

〔是ればこれより前、東照宮は藤森におはしけるに、井伊直政が土木侯土佐、もし風に乗じて御館の隣なる宅に火をかけなんは危き事なりと申しければ、東照宮御寢所へ土佐を召して具に聞し召され、其の翌日向島にうつらせ給ひけり。〕

直に向島へ参りて、東照宮御對面ありしかば、忠興近習の人を屏けて、只今参る別の子細も候はず。石田郎黨を結び、利家を依頼として、君を亡ぼし申すべきと企て候ふ。利長と年頃の親しみによりて具に洩れ承りぬ。彼等が謀に落ちざる御設こそ然るべく候へと申されけるを聞し召し、過ぎにし年信長攝州出陣の比弱年にて武勇の譽れありし故申し通せしなり。斯かる深志あらんとも知らざりける悔しさよと悦ばせ給ひて、榊原康政を召して如何あるべきと仰せあり。事急に候ふ。後れては人に制せ

らるべしと申す處に、忠興國のたすけは人の與する事最一に候へば、淺野幸長を召され候へ。彼れば必ず徳川家に心を寄すべしと申されければ、頓て使を走らせらるゝに、取りあへず参られたり。忠興出て向ひて事の子細を認らるゝに、人多き中にかゝる事を知らせらるゝ事交のかひ有り。かゝる時は疑の生じ易き習ひに候ふとて、忠興・幸長先づ誓紙を書きて奉りぬ。若し敵寄せなば幸長は宇治川を固め候はん。忠興は敵の中に打ち交り、不意に一軍仕り候ふまじとぞ相計られける。されども是れも始終勝を全うすべき道にもあらず。利家と和平あるに踰ゆる事候ふまじ。只兩人に任せ給ひ候へとて、其の翌日忠興夙に利長の許に行き向ひて、昨日の密謀一々内府に告げたりとぞ語られける。利長色を變じてこはそも戯に候ふや。實に候ふやと驚かれけり。忠興されば愚者も千慮の一得に候ふ。此事を思慮するに、石田謀つて兩雄を闘はしめ、其の弊に乘らんと料る物に候ふ。兩雄相闘ひて亡びなば、安藝の輝元・備前の秀家なごを大將として、吾等が如き者は手もなく攻め平げなん所存見顯し候ふ。寛仁の内府に與みしてこそ家をも起すべけれ。三成と心を合はせて名を汚し身を失はんは必定にて候ふ。かく申す詞を許容候ひなば、とく内府と令親家と和睦ありて、世穩かならん事こそ然るべし候へ。是れ全く前田家を佑くる所にて候ふと詞を盡して規誨せられしかば、利長も深く思慮して道

理に當れる事どもにて候ふ。さらば父に申さばやとて、利家に斯くと告げて利書詳に語られけるに、利家も諾せられけり。

ハ又一説に五老五奉行の内、争論不利の事あらば、生駒雅樂頭親正・中村式部少輔一氏・堀尾帶刀吉晴三人利平を取り計ふべしと、兼ねて太閤の遺言に因りて、井伊直政に就いて和平の事ははかれりともいへり。

卷の十二

二七六 東照宮細川家の難を救ひ給ひし事

關白秀次生害の後、細川忠興の家に罪蒙るべき事起りけり。其の子細は秀次當時の大名財用乏しきには、潜に金銀を貸し給ふ事あり。是れば人の心をとらんが爲、且つは財を利せんが爲なりけり。忠興も黄金二百枚をかりてければ、彼の家金銀出納の事を司れる人急ぎ彼の金返し給ふべし。券契を破り捨て候ふべし。左なからんには太閤の奉行に券契を出だすべしとぞ申しける。忠興いかにも叶ふべからず。此の事太閤に泄れ聞えなば、罪科に處せられん事疑なし如何すべきと案じ煩らひ、長臣相集まりて議しけるに、松井佐渡守申しけるは、某、年頃徳川殿の御内なる本多佐渡守正信と親しく相語らひ候ふ、彼れに付きて徳川殿を頼み参らせん。徳川殿はさる頼母しき人にて御座せば、いかて是れ程の事にて、人の家亡びんとするを見捨て給ふ事は候ふまじと申す。忠興我れ日頃内府と親しくもなし。斯かる事頼むに便なし。され共汝正信と親しからんには、試に計り見よといふ。松井・本多にしかじか

の事ありといふ。徳川殿徳川聞し召し、其の儘松井を召され、人をのけて重ね問はせ給ひ、正信して唐櫃二つ開かせらる。一つに黄金百枚宛わづらを入れられたり。其の黄金の箱に題せし年月を見よと仰せあり。正信之れを考ふるに廿一年の前、未だ三河に御座ありし時に候ふと申す。徳川殿松井に向はせ給ひ、凡そ金銀は出納の司ある事にて、若し人知れず用ゐんとする時に吾が心に任せ難し。されば此の黄金を貯ふる事斯かる事を待つに年久し。今其の家の爲に吾が年比の志達しけるこそ嬉しけれとて、自ら之を松井に賜ふ。松井大に悦び、かゝる有難き御事こそ候はれ。既に亡びんとする家の斯く再び繼ぐべく候ふ事偏に君の御恩なり。細川が家の候はん限は、いかで此の情を忘れ奉るべき。速に本國に申し下して、黄金めし上せ償ひ奉るべきにて候ふと申す。東照宮聞し召しいや此の事世に泄れ聞えんには兩家の禍にこそあれ。夫れ故に斯く人知れず用ふべき料の物取り出だしたれ。ゆめゆめ償はん事然るべからずと仰せられしかば、松井殊更に悦び急ぎ歸りて此の由を申し候はんとして、御前を立ちて出でにけり。遂經て忠興其の事となく御館に参り、御對面の序に正信を呼び出だし、東照宮に向ひて申しけるは、年頃忠興が家人に仰せ下されし事、謹んで承り候ふ。何事のおはしますべきには候はれ共、若し御家に事有らん時は、必ず君の御爲國をも身をも捨てて、此の度の御情に報じ奉らんずる

にて候ふ。さりながら忠興常に伺公仕りて候はんには本意遂げん事叶ふべからず。是れより又素の如く疎々しくこそ候ふべけれとて、御暇申して出てぬ。されば年頃忠興東照宮と親しからずして、利長を諫め争はれし故に、利家も一向我が家の事なりと心得て、忠興の申す旨に従はれきとなり。

二七七 七人の大將石田を討たんとせられし事

慶長四年大阪に在りたる諸將の中、福島正則・淺野幸長・黒田長政・巳下七人石田と不和なりし人々使を以て、朝鮮に在りし時各々力を盡くし軍せしに、目付に定められし福原右馬助直高・垣見和泉守家純・熊谷内藏允直陳・太田飛驒守政信等、私曲を構へ、太閤に達せざりし事ごもを憤りて、罪科に處すべき由申しやられしより事起りて争論甚しく、使度々に及べり。七人の諸將此の事たゞに止むべきや、石田を討ち亡ぼしても必ず所存を遂ぐべしとの趣を石田聞きて、上杉景勝に如何すべきと問ふ。上杉も案じ煩ひしに、佐竹義宣日頃三成に親しかりけるが、之れを聞きて伏見より大阪に赴き、三成が許に到りて別べつに存する旨もなし。只徳川殿に告げて和平の事を頼むべき外謀あるべからずとて、三千計の兵を以て三成を伴ともなひ伏見に赴きければ、諸將事を延ばしたる故石田を逃がしつるよとて、既に

追つかげんとせられしに、早伏見に著きたらんと聞えしかば、齒をかみてきて止みけり。東照宮閉し召し太閤在世の時は、寵を頼みて權威に誇り無禮にもありぬべし。今に當り諸將の申さるゝ處、其の理なきにあらざれども、罪の疑はしきは軽くすとかや聞きぬとて、強ひてなだめ給ひけれども尙止むべからざれば、さらば今世治りたるに弓箭を起さんとや、力なき事どもなり、我れ石田と心を合はせ諸將と軍すべしと仰せられしにより、止む事を得ずして怒を押へてきて止まりぬ。其の後今の世の亂となるべきも又穩かならん事も、一己の所有に有るべし。暫く佐和山に退きて公の萬事に相たづさばる事なくて然るべからん。子息隼人正の事は我れよく家を全うせん事を計るべしと、三成に仰せられしかば、忝き由謝して、佐和山に歸るべきか否か景勝に相計りしかば、景勝我れ會津に歸りて上らずば内府催促有らん。其の時悔りたる體を顯して罵るほごならば、必ず軍を出ださるべし。行きがかりにたやすく打ち破られんや。固く支へて戦はん其の間に大坂に討つて出て、素より心を合はする諸將を集め旗を揚げられよ。是れに過ぎたる謀有るべしとも覺えずと計られしかば、三成佐和山に赴くにぞ定めける。三成が士大將島左近昌仲、三成に勧めけるは、秀家・秀詮も兩端を持するにや覺束なく候ふ。佐和山の軍兵を計るに一戦を決するに不足候ふまじ。一千餘を止めて佐和山を守らせ、蒲生備

中・舞兵庫・高野越中と某各々二千の兵を率ゐて風上より火をかけ、所々を砲となして攻めかゝるほどならば、内府拒ぎかれて引退かれん處を追つ詰め追つ詰め軍せば争でか打ち洩らすべき。萬に「も」志を遂げざるならば潔く御腹召され候へ。空しく佐和山に退きなば後悔するとも益あらじ。居ながらあたら圖を外さん事、口惜しく候ふといひけれども、三成は景勝と相策りし故、昌仲が謀略を納れずして止みぬ。三成既に佐和山に赴くに及んで、七人の大將猶憤深かりしかば、道に俟ちて討ち取るべしと言ひ觸す。東照宮閉し召し今は打ち捨て置かばや如何すべきと本多正信を召して仰せあり。正信つらつら思慮して今日本を取つて徳川家に獻する者は石田にてこそ候へ。其の故は三成奸曲あるゆゑ、人々惡みて候へども、又三成に與する者も多く容易く打ち亡ぼし難し。故に言を禮儀に託し、手を徳川家にかりて亡ぼさばやと存ずる人々候へば、三成今亡びて後悉く平均に歸せんや。諸將外には殿を敬すと雖ども、内には隙を伺ふ人も候はん。故太閤の恩を得たる豪雄、秀頼に背くに忍びず。三成を憎むの心を移して殿に懐き申すべし。三成あらば殿を敬し重せん事愈々厚かるべし。三成久しく人の下に屈むべき者に候はれば、頼て弓箭を取るべき事掌の中に在り。三成敵とするに足らんや。其の時三成に打ち勝ち給ひなば、殿自然に勢を得させ給ひて、誰れか靡き從はで候ふべき。日本三分の二は

殿に歸服すべく候ふ。只三成に御心を付けられ、しばらく彼れを立て置かれ候ふこそしかるべからむと申しけるを聞き召し入れられて、三成が旅程心許なしとて、結城秀康卿をもて送らせ給ひけり。

二七八 東照宮上杉御征伐の時近江國水口を立たせ給へる事

東照宮景勝を征伐に關東へ向はせ給ふ時、江州水口に御泊りあり。其の明の朝長東大藏大輔御膳を奉るべきと申して御約束ありしに、夜四ツ頃俄に水口を打ち出でさせ給ふ。御輿をかく者出合はざりけるに、渡邊忠右衛門綱守草鞋脚半がけにて御輿の片かたをかきけるを、誰れぞと仰せられしかば、渡邊忠右衛門にて候ふと申すを聞き召し、何とてかく不意に打ち出づるを知りたるぞと御尋ねありければ、若年の時より御傍へ仕へ奉り候ふ身の、是れ程の事を仕るまじく候ふや、情なき御罰なりとぞ申しける。忠右衛門背よりかくあらんと推し測りて、御輿のふちを枕にして臥し居たりけるとかや。其の夜土山に著かせ給ひて、翌日水口へは昨夜時をとりたがへて、早く立ち候ひけると仰せ遣はされけり。

二七九 東照宮花房助兵衛に起請文を書けと仰せられし事

東照宮景勝征伐の御時、小山にて石田兵を西國に起せる由を聞き召し、前には景勝が勇將なるあり。西國は皆敵なりと人々驚きたりしに、花房助兵衛職之を召して、汝は近年佐竹が許に在りて、義宣が心はよく知りたらん、かゝる亂に二心有りて軍を出だし、わが歸る道を塞ぐべき。又義宣謀反の志あるまじとならば、起請文を書きて我れに見せよと仰せられしに、花房承り義宣はきはめて信のあつき人に候へば、別の子細候ふまじ。只人心の反覆は父子の閒も計りがたき事に候ふ。起請文は御ゆるされを蒙るべしと申す。東照宮助兵衛は浮田が家の長臣と聞きたりしに、器量の小き男よとて大息つかせ給ふ。花房かくと後に傳へ聞き、われ起請文を書くならば、佐竹二心あらじと軍兵の疑を散ぜん爲の仰せなりしに、察せずして起請文を書かざりけるこそ口惜しけれ。たとひ義宣軍を出だしたりとも、我れ何の罪の有るべきと深く悔みけりとぞ。

二八〇 下野國小山にて上杉入庵議論の事

景勝を征伐せさせ給ふ時、七月廿四日、東照宮下野國小山に御著陣ありける處に、其の日伏見より、石田三成佐和山を出でて大阪に至り、諸大名と相謀り亂を起すの旨告げ奉る。則ち先陣の諸大名諸將を召され、東條法印・津田小平太・本多中務大輔・井伊兵部少輔を以て今度三成兵をあぐる間、定めて妻子たちを悉く押し籠むべし。心中の難義察せられぬ。且つ豊臣家のために企つる旨申しふらせば、秀吉の恩を受けたる人々多ければ、とく大阪におもむき妻子のかた付け、又は三成に心を寄せられんも少しも遺恨にあらずと仰せ出だされけり。皆疑惑や有りけんとかくの詞なかりけるに、上杉義春入道入菴、末席に在りしが進み出で、福島正則・加藤嘉明・黒田長政に向ひ、各々思慮にも及ぶべからず、人じちを三成に出だし置き、只今御味方申して其の質を棄てば、妻子の恨み世の誹も免るべからず。秀頼公へ出だし置きたる人質を三成横取にしたるならば、三成と一戦に及ぶとも妻子の恨世の誹も有るべからず。人けともあれ我れは先づ御手を引き討死を遂ぐべし。と申されければ、皆一同に御味方仕るべしと決定しぬ。其の座に是れほどの事辨へざる人はなきにあらざるも素よりなれども、時にあがりて義春の片言抜群に聞えけるとなり。

〔又一説に、一座いまだとかくと申さるる處に、福島正則何とて石田に従ひて弓箭をとらんや。秀

頼公に疎遠だにおはしませずば、神明に誓ひて正則御味方たらん事勿論なりといはれし故、皆一決したりともいへり。〕

入菴は上杉彌五郎とて、越後上條の城主後民部少輔といひて、景勝の姉婿なり。

〔義春は能登の畠山義則の弟なるを、五歳の時より謙信もらひ置かれて、上杉定實の養子とせられしなり。〕

謙信の先陣の大將にて武名世に高し。景勝新發田因幡守治長が謀反を討ちて、新發田の城下におしつめらるゝ時、治長切つて出で、景勝の先陣を放生橋まで追ひ崩し、景勝の旗本へ押しかゝる。此の時義春景勝の旗本の先に有りしが、日の丸の旗を取つて三十間計先へおし出だし、手廻りの士どもをり敷かせ、鎗袋を作りて待ちかけたる故、治長引き退くを追討にしたる勇將なり。大阪冬陣に二條の御城御書院に諸大名出仕の時、東照宮入菴を召し、上杉家の武者おしの事共御尋ねあり。入菴詳に答へ奉るを聞き召し、上杉家の軍法素より聞き及びたる事ども深く感じ入りぬと仰せ有り、諸大名列坐の真中に、入菴小男なるが言語分明に、其の次第誠に懸河のごとくなれば、諸將何れも武功智謀の人なれど詞を出だすものなく、深く感じ入りたる色なりけるとかや。

二八一 渡邊惣左衛門野中市左衛門忍びて大坂に使用する事

同じ時國清公朝臣の事こくせいのうらみ小山におはしまし、大阪の北きたの方に誰たれか使つかすべきとて、慶長五年七月廿四日長臣を召して其の姓名せいめいを書きて出だせと仰せらる。各々承りぬとて其の明くる朝書き付けて出だすに、渡邊惣左衛門とぞ記したる。公こうも左の袖より出ださせ給ふに、同じく渡邊を記させ給へり。いかなる患難あなだをも堪たへて事能く使すべき人なりと人々思へる故なり。さらばとて渡邊を召して此の旨を仰せられしに、此れは大事の御使にて候ふと辭し申す。衆議しゆぎ一決したる上は兎角とかくの論に及ばざるとの仰せを蒙かぞり、さては今一人副へられ候へ。人は病と申す事も候へばと申しければ、野中市左衛門を相副あひまへらる。書二通を渡させ給ひて仰せを承りけるが、程なく東西の戦あるべきに、大阪に赴くこと心よからぬ色の見えければ、公たやすく關所せきじよを通り得じ、若し殺されたらば吾が馬の前にて討死したりと思ふべし。たばかりおほせて、大阪の屋敷やしきに到らば、今度の一番首取つたるにもまさるべしとの詞により、二人下人も召し具せず、七月廿五日小山を出でて、其の比三河の吉田は公の領地なりしに、己が宿所しゆくじよへも立ちよらず、笠をかたぶけて忍びて打ち過ぎ、尾州熱田おつたに到れば、船着ふねづまに大竹の虎落とがりをゆひて守りた

り。神職しんしやくの大原左衛門大夫は、渡邊が知れるよしみ有りて潜ひそかに立ちよたり。爰こゝにて大夫が下人竹をかたげわら一把をくくり付けて、七八町計先きだちて此れをしるしに案内者あんないしやとして、伊勢の堺さかいに行きて夫れより野も山も皆敵の中を忍び通れば、飯いひを乞ふべきやうもなく、あら米なかみ關の地蔵ぢざうに行き著きぬ。行きあふ人ごとにあやしみ、あはれ關所せきじよにて殺されなん、よく心得られよと口々にいふ。關の有様傳へ聞くに、なかなか通るべきやうは思ひもよらず。伊賀越いがこにやかゝるべき、淺間越あさまこにや行くべきと、二人打ちかたらひて、先づ伊勢の大神宮たいじんぐうの祝上部いはりうへ左近さこんが許もとに行きて宿を借らんと立ちよりければ、今何方いまかたより参り詣づる人のあるべきとて取りあはず。左近立ち出でて一宿の事はさて置きぬ。とく出でて棒ぼうにてたゞき出せと罵りけり。二人にくき奴やつかな、まさしく池田家の恩を請けたる身なるにと怒れどもせんかたなく、空しく立ち出づる時、左近追ひついて何國なにくにの人ぞと問ふ。池田三左衛門尉いけださんざゑんが士なりと答ふ。左近しからばその川堤かはづつみの下に乞食こじきのすてたるむしろをかぶりて待たれよと小聲こゑにいへば、二人さる様もあらんとて、いひつる詞ことばの如くしたり。夜に人りて左近來り、晝の乞食こじきは何處いづくにあるといふを聞きて爰こゝにありといふ。さてひそかに相約あひやくして、左近が家の裏うらの戸口より内に入り、奥の一間いっまにしげし疲つかれやすめたり。左近今の時家にある下人も打ちとくべきにあられば、晝のたのもし

げなき事を申したるよとて、いそぎ飯をしたゝめ出だし、夫婦給仕をしたりけり。さて道の事を問ふに、淺間越は人の往來まれなれば、此の頃は女の乞食をも殺し候ふ。中々通りがたかるべし。只一命をかけ物にして伊賀越を通られ候へといへば、さらばとて荷だばらをおひ散れたるついでに身をやつし、御祓箱を笠につけ、刀をも左近が許におき、いと見ぐるしき小脇ざしを求め出だして、指したりけり。かくて曉に宮川を打ち渡り關所近くなりて見れば、通るべきやうぞなき。やがて一封の書をば深田の中に深くかくし埋み、其の日は行き暮れて山にふし、あくる朝一通の書をこよりにして、青草をとりて一二三の印をし、笠の緒として一の關所に行きかゝる。固めたる士共かゝる大亂に伊勢に詣づる者やある。それ打ち殺せとひしめきけり。二人はさわがず、とくより伊勢に詣でて、此のさわぎに及び、一夜の宿をもかすべからずとの法令により、いつかたにとまるべきやうもなく進退きはまりて候ふ。大阪の妻子も心元なく、天照大神をたのみて歸り候ふぞとたばかりけり。さらばとて荷だばら・御祓箱・脇ざしの鞘を打ちくだき、髪をとかせ帯・袴・わらぢまでも改め見て、あやしき事なきよとて通しければ、夫れより次の關所をも事ゆゑなく打ち過ぎて、大和の奈良に出て寺に入り、酒を求めて飲みたりけるに、住持の僧さかな參らせよとて別によき酒を出だし、又薄茶をも出だしけ

れば、悦んで二人腰につけたる錢を興ふるに、小僧多しとて請け取らず。其の時住持の僧の曰はく、能くもたばかりて爰迄おはしたれ。たまたま爰まで忍び來る人も候へど、皆關所にて殺され候ふ。よくたばかり給へ故ある人とおぼえたりと語れば、二人心の中に打ち驚きたれども、伊勢に參りける物語して、天照大神に助けられて、無事に下向するにてこそ候へ。此れより後もかくあらんと氣遣はしくも候はずと答ふ。僧つくづくと聞きて是れを信ぜず。さあらんには別の事も候ふまじ。關所を事故なく通られたらんには、朋友たちに奈良の出家は見つけたるもの哉とかたられよといふ。二人見しられじと打ち笑ひ出て行く。奈良と大阪との間に關所有り。何者ぞと咎めければ、又前の如く伊勢に參りたる歸路に候ふといへば、さらばとて改めたり。あやしき事もなきに通さばやといふ所に、番の坐上に有りける老人、物ないはせそ是非を論するに及ばず斬つて捨てよと下知しけり。末座より眞の參宮の者と見え候ふを斬つて棄てば、神の祟も恐ありと再三いひしかば、二人危き所のがれて、大阪に行き著きたり。東國方の諸將の屋敷には虎落ゆひまはし、大阪の兵士門々を警固して、内外の出入も絶えなれば、兼ねて知りたる材木の商家に行きて大根を買ひ、若しや聲を聞き知ると打ち廻りて大根を賣る眞似したり。久保田市大夫窓より見て、いかに渡邊に似たる人もある哉といひて大根と一聲よ

へば、渡邊久保田が窓の下に行き、笠をとりて大根をさし出だすうちに、宿をとへばし加じかなりと答へて、材木がもとに歸りける。野中に斯くと告げて悦びあへり。若原勘解由北の方に屬きて有りけるに、久保田かくといへば、門を守る大阪の士にことわりて、薪を荷ふ人夫三十五人を出だし、其中一人を残して渡邊を其のかはりとし、薪を荷ひて門を通る時、警固の士此の男は今朝出でたる者にあらずと押し留めたり。久しく煩ひて打ち臥し居たるが、快く今日出でたる人夫なりといへども更に聞き入れず。勘解由立ち出でて、さまざまにいひ断り、通り得て北の方の前に参り、公の仰せをこまごまと述べて笠の緒をときて奉る。北の方は簾を隔てて對面あり。其の後渡邊に録ましあたへ給ひ、賞せらるゝ事大方ならず。誠に危き所を遁れ得たる事どもなり。

二八二 上杉景勝會津表手配の事

東照宮會津を伐たせ給ふ時、景勝は謙信の影堂の前にて、諸將士卒に二心有るまじきとの起請文を書かせ妻子をば會津にこめ、燒草を積み置けり。敵寄せ來らば逆よせにせんとて、所々に地形をならし、白川に安田上總介を先陣として、島津下々齋を二陣とし、景勝は只一騎背灸の嶺に登り、樵夫を

案内者にして山中を通り、白川の境の明神に出兵をわかち、不意に討つてかゝるべき道を計られしに、上杉方にも此れをしらず、まして寄手は露もしらず、東照宮の先陣大田原に陣して、白川より一日の行程なり。景勝悦びて其の勢八千を率ゐ長沼に陣し、寄手白川に攻め入らん時、山中の間路より思ひもよらぬ後にまはり、東照宮の御旗本に切つて入り萬死一生の軍せんと謀られしに、石田兵を起すのよし聞えて、東照宮宇都の小山より引きかへさせ給ひけり。

二八三 東照宮小山の途中にて竹を伐らせられし事

會津征伐の御時、東照宮下野小山の途中にて、左右の近習の人々に向ひ給ひ、我れ魔を忘れたり。あれなる小竹林に串になるべき細竹を切れと仰せられしかば、則ち切つて奉るをたゞう昏をとり出ださせ給ひ、鞍の前輪におしあて、切り裂きてくゞり付け、二つ三つ打ちふり給ひ、景勝なごを打ち破らんには是れにてこと足りぬとの給へり、實に魔をわすれ給ふにはあらず。上杉家は父より已來、武勇の家にて、景勝驍將なれば人々あやぶむこゝろある故、景勝を侮らせ給ふの機を示させ給ひしにや。然る處に西國中國一同に御敵なりといひふらし、小山より引き返させ給ふ時、彼の竹林を過ぎさせ給

ふに、上方を攻め破るには此の摩も無用の物なりとて棄て給ひけり。前後に大敵あれば人々愈疑ひおそる、故に、猶々恐るゝに足らざるの機を示し給ふなるべし。

二八四 伊達政宗膽氣相馬の城下に宿せられし事

同じ時伊達左京大夫政宗は急ぎ本國に歸り、からめ手より攻め入るべき由仰せを承り、大阪を打つ立つて夜を日につぎて馳せ下る。白川より白石まで皆敵の中なれば道塞りぬ。常陸國を廻りて、岩城相馬にさしかゝつて國に歸らんとするに、相馬また累代の位なり。然るに政宗僅に五十騎ばかり引き具して常州を經、岩城と相馬の境に到り、先づ相馬が許に使をたて、此の度徳川殿上杉を征伐し給ふにより、政宗搦手より向ふべきよしの仰せを承りぬ。路すでに塞り候ひしほごにやうやう此の城に馳せ著きぬ。あまりにはやめて道をうちしゆゑ疲れ候ふ。願はくは城下に旅館をたまはらばや。馬の足休めて明日國に歸り入らんと存ずといはせたり。相馬長門守義胤これ聞き、あつはれ運の盡きたる事ぞかし。さらぬだに伊達は相馬が年比のかたきなり。ましてや味方討たん一方の大將承りたるといふものを、いでいで今宵一夜打して案内知らぬ奴原を一人も残らず討ち取つて、年比の仇に報い又今度

の賞にも預らばやとて、頼て民家をしつらひて迎へ入れ、人々集めて夜討の評定したりけり。爰に水谷三郎兵衛といふ者、はるか末座に候ひけるが進み出で、末座の意見恐れ入つて候へども、既に兪議の座に連りて候へば、所存を残すべきにあらず。抑々窮鳥懐に入る時は獵者もこれを殺さずとこそ申し候へ。政宗ほごの大將年來の恨をすて、君を頼みて來りしを、たばかりてやみやみ討たれん事勇者の本意にあらず、長き弓箭の瑕瑾ならずや、又彼れが國境駒が峰に至らんに行程僅に三里、けふ日未だ未の時にさがらず。政宗が國に入らんとだに思はゞ、日夕ならざるには至るべし。それに僅の勢にて止る事深き慮なからざらんや。只此の度はよきに警固して國に返し、重ねて戦ひに臨まん日勝敗を天運にまかせらるべきにやと申しければ、一座の人々此の議に同じ、兵糧・秣わら・鹽・魚に至るまでつみ置き、かじりを焼きて夜廻りす。義胤が士ども政宗あまりにしづまりかへりたる體こそ心にくけれ。いざ試みんとて、夜ふけて後ち馬二匹とり放ち、人々走りちりて以の外に騒ぎのしる。政宗小童一人に燭もたせ、白き小袖の上に打ちかけ、左の手に刀を提げて立ち出で、相馬殿の御人や候ふといふ。是れに候ふとて行き向へば、物音高く候ふ。政宗が下人原狼藉候はんには、よくしづめて給はり候へとて、又内にぞ入りたりける。夜明くれども立ちもやらず、巳の時ばかりに成りて義胤の

もとに使して一禮し、さてしづめて馬を打つて行く。ひそかに人を付けて窺はしむるに、かの國の境駒が峰のあなたに伊達家の軍兵雲霞の如くみちみちて出でむかへぬ。かくて關が原の事終はりて、相馬すでに上杉に心を合はせられたれば亡ぶべきに極まる。政宗訴へ申されしは、相馬は年比政宗が敵なり。石田・上杉に與したるが一定ならんには、政宗彼れが爲に討たるべし。然るに君の仰せ奉りて馳せ下るよしを聞きて、深き恨をわすれ新恩を施しき。彼れが逆謀に非るの證に候はずや。又累代の弓矢の家永く断えん事不便の至りなりと度々なげき申されしかば、後には本領を相馬に賜はりけるとぞ聞えし。

二八五 竹村半兵衛田中長胤を押し止むる事

關が原の時、三河岡崎の田中兵部大輔吉政の子、民部少輔長胤は、父大坂に同心したりといふを聞きて、宇都の小山を忍び出で、居城岡崎に歸りけるを、國清公聞し召し、竹村半兵衛を召され、吾れ吉田に歸る頃まで、民部を牛籠におさへともめ置けと仰せらる。竹村是れは安き事には候はれども、いかさま計ひて見候はんとて道に出で迎ひ、鐵砲の者を百姓の家にかくし置き、具に支度を言ひふくめ

其の身は山の狭みに出でて待つ所に長胤來れり。竹村・池田三左衛門尉密に申せと申すことの候うて是れに出で候ふといへば、長胤馬廻りの人を遠ざけられしかば、竹村靜に歩みより、別の子細も候はず。おし留め申せと三左衛門下知したるよと云ひもあへず、左の手にて長胤をひしととらへ、一尺計の脇ざしを抜いて長胤におし當てたり。従者どもこは口をしやと怒れどもせんかたなし。竹村詞をかけ近くよられなば、吾れは殺さるゝとも民部殿をば刺し貫き申さん。唯おし留め申すのみにて別の事は候はずと呼ばはりける處に、百姓の家に伏せ置きたる鐵砲の者どもかけ集まり、鐵砲を長胤にさし當てて、竹村を討たんとならば忽ち民部殿を打ち落し申さんと聲々に呼ばはりけり。長胤力なく竹村に従つて百姓の家に入れば、おし止めて四方を堅く守りけり。かくて東照宮聞し召し、父既に味方に成れる上はゆるし候へと仰せられしかば、長胤則ち出でられけり。後に公に遭ひて手あらしき有りさまにもあはせ給ひけるよといはれきとかや。

二八六 岐阜城攻の事

岐阜の城を攻むる軍評定の時、國清公大手に向はんと仰せられけるに、福島左衛門大夫正則聞いて、

吾れこそ今度の先陣なれとぞあらはれける。井伊・本多・公に向ひて内府の御縁者なり譲られ候へと有りければ、正則は尾越より西美濃に入りて大手に向ひ、公は河田の波より寄せさせ給ふに定まりけり。やし、在りて正則搦手へ吾れこそ向ひ候はめ。尾越は城に遠く河田は遠淺なれば、馬にて涉り易かるべし、大手に向ふも城を早く攻め破らん爲なれば、只搦手よりせんものをと申されけるを、井伊・本多・正則の領地なれば、大手より船筏を以て渡されん事安かるべし、三左衛門尉はからめ手より向はれ候へ。既に定めつる上は今更かへんも然るべからずと申されしかば、正則さては吾敵地に入りて相圖の煙をあげて後、池田殿川を渡されよといひて大手に向はれけり。頃は慶長五年八月廿一日のまだ宵くらきに、公は清洲をうち出で、河田のあたりに陣して、あくれば廿二日の曉に川涯におし寄せ給へば、伊藤五郎右衛門と云ふ者 岐早より津田藤三郎を始として、新加納村におし出だして陣したり。味方の軍兵、勇み進んで早、川に打ち入らん景色なり。公馬を乗り廻し今しはしぞと下知をさせ給ふ。此の時貝福右衛門時はよかりぬと申せば、公然るべしと宣ひける。詞の下よりさかまく波に馬をさつと打ち入れ、二三四歩ませ鞍つばにおりさがり、貝に川水をすくうて打ちうつし、いかにも高く吹き出だす寶螺の聲、諸陣にひびきわたる。是れより一同に打ち入つて、一騎も残らず向の岸に上る。

〔須賀平四郎物見たりしが乗り歸り、敵の多少は蘆原に隔りて見えわかず候へども、二三千人よりも過ぎ候はじ。軍は味方の勝と申す。子細はいかにと問ひ給へば、須賀敵の後陣續かず。後に兵を伏すべき地十町計がほどにあるべしとも存せず。遙にかけ來りなば、人馬の息切れてよきとりになるべしと申しもはてぬに、伊木清兵衛忠次味方の旗は前にかたむき、陣の色くろみたり。敵は後に仰ぎて面白く候ふ。必定味方の勝なりといさみけり。〕

公、味方の陣を整へよ、亂りにすゝむなと下知ありけれども、なごためらふべき、吾れおとらじと進みゆくこと三町ばかり、公、今は時こそよけれと腰に挿したる塵を取りて一振ふらせ給へば、一同にごつと打つてかゝり、忽ち敵を撃ち破られけり。八田太郎兵衛久次北ぐる敵を追つかけたる所に、朱色の物具著て紫のほろかけたる武者一人、息つき居たるを見て馳せ寄りたり。かの武者はかち立ちなるがひたと折りしく。八田馬より飛び下り鎗を合はせ、遂に討ち取りたり。是れ前田半左衛門なり。

〔半左衛門は徳善院の從子にて、岐早中納言秀信の近習の臣なり。打ち見たる處はすぐれく溫柔にして、常によく論にたへたる人なりしかば、人々男子にあらすと笑ひしに、此の日の軍に敗軍の中に武市忠左衛門と二人ふみとまり、引つ立ちたる味方を勵まし、つゞけやつゞけと呼ばはり〕

て、目を驚かすはたらきにて武市も討死す。其比前田を悔りたる者ども、いけふ前田に及ぶべきものなむとていへり。又田は父の彌三右衛門正久といふ士大將の御子。其父は前田兵衛今年十八歳父の御代に。前田を討ち取りたりしに、從者相原空右衛門、尾關彌五右衛門かけ來りて、八田を討ち、は乗せて歸る。八田後に人に語りて曰く、われ年若し。血氣よわきにあらす。敵一人打ち死して、そののみ疲るべきにあらざりしに、其の時たすけ來る敵あらば、小兒にも生捕とせらるべし。死生之間に立つて敵を討ち得て、却りて勇氣の衰へたる故なるべしとぞ語りける。慶長六年、前田正久は、長門と與へられ、同八年公參議に任じ、參内の時久次太刀の役たり。從五位下位に叙し丹後守と稱す。後、豊後守と改む。前田利長久次が武名を聞き、一萬石にて招かれしかども、ゆかりなきに。福島正則は大手の惣大將にて、素より他人に超えられじと思はれしは、公許にて新加納にて敵を討ち、破りたりと聞き、怒りもたえて廿三日の朝先陣して攻め寄せたり。池田家の軍兵朝日より攻め入り、ゆるゆる池田家の土手の上より見て、人の功名を嫉み、道全といへる法師武者が木枯止で、再び火を懸けさせれば、翔手の軍兵畑にもせびて進み得ず。公是れを御覽して、はか身のしわざなり。

火のきゆるを待つべきにやとて桑木畑をめぐり、長良川より後の水の手におし寄せ給ふ。池田吉左衛門は公此の城におはしし時、水門に居て案内はよく知りつ。水ぬきの有りけるより入りて水門を打ち破り旗を差し上げ、池田三左衛門尉本城の一番乗りと呼ばはりけり。正則の道を妨げられしは、却つて池田家の幸なりと後に人いへり。東照宮御書を賜はり敵軍川を隔てて相支ふる所に颯く打ち破り、岐阜を攻め落されし功名、賞するに詞なしとぞ書かせ給ひける。

二八七 森寺四郎兵衛飯沼小勘平を討つ事

岐阜中納言の士飯沼小勘平といへるは、四天王と世にいはれし剛の者なり。新加納の軍破れし時、小き堤を前にして居たりしに、池田家の士大將森寺政右衛門忠勝が弟四部兵衛長勝飯沼を目がけ、一間あまりありし溝を馬に聲かけてひらりと飛ばせたり。飯沼が左右より鐵砲を打ち懸けけれども、甲冑に當つて其の身は手も負はず競ひかゝりしが、敵は多勢つづくと思ひけん、飯沼が者どもちりぢりになりぬ。森寺馬を乗り寄せれば、飯沼名乗れと詞をかくる。池田が内の森寺四郎兵衛と名乗る。飯沼池田が内の森寺ならば、いざといふより刀を抜いて、森寺が馬より下りんとする處を右の膝口を切つ

たりしかば、森寺左の方に飛び下り馬を隔てて切り合ひけるが、又左の腕に疵を蒙むり、今は叶はじと思ひて白刃を握り、掌をくられながら無手と組み、飯沼を押へ透さず刺し通せしが、疲れはて首を取りたれども既に人は奪はるべかりしに、従者久兵衛といふ者走り來り、近づく者を追つばらひ馬に掻きのせて、興國公武藏守利隆朝臣の事 十四五騎にてひかへたまふ處に参りて、かくと申す。又國清公の御前に参りて飯沼を組んで討つて候ふと申しけり。

「飯沼が胃は小田原鉢、刀は行光の作、脇差は菊一文字なり。森寺が従者分捕して今森寺が許にありといへり。森寺が飯沼を討ち取りし事、關ヶ原記其餘の書にも池田備中守としてあるせるは謬なり。」

二八八 南部越後母衣串をぬかざりし事

岐阜の城攻に池田家の士南部越後門際に押し詰めたるに、門のくゞり狭くかけたるほろに支へて入り得ず。かたへより母衣串をぬいて入るべしといへども、いやいやたとへ入り得ずとも、此のほろはぬくまじと呼ばはる。其の中に門ひらきて馳せ入りたり。其の武者振甚だ見事なりきと、其の時の人

いひきとなん。

二八九 兼松又四郎一柳の陣見切の事附兼松武功言上の事

岐阜の城に諸將おし寄する時、一柳監物直盛の兵一騎先駆けて、川に馬をさつと打ち入れけり。直盛に付けられける目付兼松又四郎正儀、九尺計の十文字の鎗を提げ鹿毛なる馬に乗りて、堤の上にひかへて是れを見、あはれ剛の者よ老武者か若武者かと問はるゝに、直盛聞きて安井新九郎とて今年廿三にや成り候はんと答ふ。正儀我れなれば功名をとぐべきに、若武者なれば惜しき事よといひも終らぬに、安井向の岸に待ちかけたる敵の中に入れて討死しけり。直盛馬を蹴たて進むけしきに見えしを、正儀おし止め、早く候ふとてやゝ有りてこゝぞと云ふまゝに、馬を川に打ち入れられしかば、直盛もおとらじと渡されけり。敵敗北しけるに、正儀閑覽堂のこなたにて、追つかくる味方をおしとむる。直盛など追ひ討たざるかと問はるゝに、敵はや陣を整へたり。引きかへさば一定味方崩るべし。百々木造は岐阜の古兵なれば、ふみ止まらんと思へども、地の理なくて退くならん。今見られよ返すべしといひも終はらぬに、竹林によりて鐵砲を打ちかくる。正儀少しもさわがず、相向ふ

事しばらく有りて、城兵遂に引き退く。

〔一説に、津田藤三郎光房は秀信の士なり。敗軍の中に引き返し、朱の物具し赤ほるかけ、鹿の角の立物打ちたる兜を著、月毛の馬に乗りて、引色に成りたる味方を勵まし、散々に戦ひけるを、兼松見てよき敵なりと目をかけて追つかけたるに、其の間十間計になりける時、津田光房引き返して城に引き取りけり。黄母衣かけたる武者取つて返し、正儀とわたり合ひ戦ひしが、相引にくといへり。此の時にや又前に川を渡したる時の事なりや詳かならず。〕

正儀敵是れにて一面目有るに似たり。此れより返さじといはれけり。直盛岐阜の町口にて將机に倚りて鎗を横たへ、敵出でば一鎗せんと正儀の方を見やられしに、正儀いや敵は出で候はじと云ひしに、果して軍はなかりけり。亂鎮まりて後ち直盛正儀を襲し、今度の軍毎事仰せの中りて候ふ。中にも安井が討死を察せられしはいかなる子細に候ふと問はれしに、正儀聞きて死生有命と申し候うて、いかで人力の及ぶべき。さりながら川を涉りて先陣する時に、馬のあげ場二三十間も置きて、敵の前を横さまに乗り、あとに味方づく時大音に名乗るべき事に候ふ。左もなくして唯一騎岸に打ち上り、敵の真中にかけて入り討死すれば、敵に利を得さすことにて候ふ。時により地により進退のしわざかはり候ふ物

なりと能く老兵にうけたまはり置きて候ふほごに、六十に及んで猶ながらへ武功をも遂げ候ふとぞ語られける。

〔合徳院殿御上京の時、熱田にて國士御目見に出づる時、兼松も同じく出でらる。土井大炊頭利勝を以て今川義元合戦の時功名、利根山にて信長より足半を賜はりし事、猪子内匠兼松と年はいづれまじたるかと御尋あり。御覺には猪子を年まじと思し召すとの事なり。兼松承り信長・義元合戦の時、朋輩七八人一所に打ち立ち候ふが、馬を乗りそこなひ、いな事と見候へば、鎧を逆に掛けたり。心中に不吉とおもひ、其の日勇みなく進み兼ね候へば、功名したる者手をふさがず見苦しとして、朋輩ごも取りたる首の血を鎧に塗り、草摺に泥をぬり、朋輩の中に交り信長の前に出づれば、義元の首を信長見てよろこばるゝ時にまゐり合はせたりき。刀根山にて前夜觸有りしにおこたりて、信長はや打ち立たれけるゆゑ、草鞋はく間もなく脱ぎにかけ付け首取つたれば、信長見て、太刀のさやに付けられたる足半を賜はりさふらふ。別にさせることもなしと申し上ぐ。利勝猪子と年はいかにと問はるゝに、それは御見ちがへなり。内匠はわれより二ツ若しと答ふ。利勝御死を御自慢の事なれば、わかしと申されなばよかりなるといふ。兼松いやいやいつはりば申

されずと答へたるまゝに利勝申されしかば、大に御感有りて、時服に黄金を添へてたまはりけりとぞ。

二九〇 山田多門兵衛幼年功名の事

河田の渡をこして岐阜に向ふ前、堀尾信濃守忠氏川岸に陣せらる。池田家先陣の士大將伊木清兵衛忠次使を以て、池田が者ども川に打ち入りて後ち渡され候へ、今度の先陣は池田が承りたるにて候ふとぞ申しける。忠氏聞きて暫く馬より下り立ちて吾が下知を待ち候へといはれければ、山田多門兵衛十五歳軍はけふを始なり。馬より下りんとするを、従者馬より下る事や候ふ。鞍の前輪に取り付き俯しに成つて待たせられよと教へしかば、山田しかしたりけるに、やゝ有つて忠氏の旗本に寶螺の聲せしかば、我先にと馬に乗りしに、山田眞先に川に打ち入りて渡しけるが、遂に一番首を取りたるは従者の物なれたる故なりけり。後に吉晴此の日の勝軍の告を聞き首帳を見られしに、首一つ山田多門兵衛と知るしるたるを讀みも終らず、近き頃まで竹馬に乗りたる童のはや功名しけるよ。父ながらへ居たらんには、いかばかり悦ばんにとて涙を流されけり。又梯權八が功名の無きはいかに、討死せんは知ら

ず。功名は二三人の中をばづるゝ者にあらずとあやしまれしに、やがて飛脚來りて、權八一番に續いて首を取りけれども、手負ひて帳に記す事おそかりしと告げたりければ、吉晴吾が見る所よも遠はじと思ひつるよと云はれたり。

卷の十三

二九一 米田助右衛門見積の事

岐阜の城攻に細川忠興七曲口へ向はれしに、米田助右衛門あれ見給へ、あの門矢倉はたやすく打ち破るべしと申す。忠興子細はいかに。米田今朝より矢倉より打ち出す箭玉次第に少くなり候ふは、本丸へ引き入りたるゆゑに候ふよと申せば、やがて軍を進めて七曲口を攻め破られけり。

二九二 後藤又兵衛決断の事

岐阜を攻め破る時、黒田・田中・藤堂等の諸將は、犬山を押へたりしに、犬山の城明けのきける故、岐阜をさして打ち向ふ所に、大垣より石田・島津・二萬餘り打ち出でおし来る。頃しも八月雨の後、合渡川水かさ増りたり。諸將香が島の札の辻にひかへて、各將机に凭りて川をや渡す、待ちてや戦ふと評定して決せず。高虎銀の天衝の立物打つたる兜を著、黒ほろ掛けたる武者は黒田家の士大將後藤又兵

衛なるべし。存ずる旨を聞かばやとて、扇を揚げて招かれしかば、後藤ほろをゆりかけて來り跪く。高虎いかに此川を渡るべきか待ちて利有るべきかと、先の程よりいへども決せずといはれしかば、後藤打ち笑ひ、評定も時により候ふ。今日岐阜の城攻に後れ、又爰にて一戦なくば内府に御面目は候ふまじ。川を討死の場ときはめられん事然るべし。しからずば男子にては候ふまじと大言すれば、諸將尤もなりとて川を渡されたり。

二九三 合渡川合戦黒田三左衛門毛付の功名の事

合渡を渡す時、長政の士大將黒田三左衛門可成、川の東より遙に敵を見渡して長政のかたへに馬を乗りよせ、朱の枝釣のさし物指して黒き馬のたくましげなるに乗りたるは、よき敵なり。必ず討ち取るべしといふ。長政勝敗は運命による事なり。なごたやすう敵を討つべきさなひそといはれしに、可成耳にも聞き入れず、川に馬を打ち入れ向ふの岸にはせ上り、遂にかの武者を切つて落し、首にさし物を添へて得たりけり。石田が物ぬし村山利介といへる剛の者なり。可成が此の功をむかしより毛付の功名とて、たぐひすくなき譽なり。

二九四 神谷小介先登の事

合渡の軍に長政の内神谷小介先がけして川をわたり、待ちかけた敵の中におめいて懸け入りければ、鎗だまに揚げられ既に危かりし時、長政の軍兵進みかゝりて敵を追ひたてければ、小介流るゝ血に朱に染みたるを、戸板に載せて長政の前に来る。小介けふ我れと先を争はん者長政ならでは有るべからずと思ひ、長政をまつて見て、小介より先きたち立ちて鎗を合はしし者一人も候はずと申しければ。長政汝ならで誰れか先がけすべき。手負ひ候ふものゝ氣をばりて物いふはあしきといはれけり。小介後に有馬の温泉に浴して創愈えけり。

二九五 藤堂玄蕃赤坂町を鎮むる事

合渡にて東國方の軍北ぐるを追ひて赤坂まで進みゆく時、高虎の士大將藤堂玄蕃赤坂の町口にかかり、大音あげ百姓商人をなやますにあらず、悪逆の輩を討ち平け静謐を致さん爲なり。皆ちつともさわぐべからずと觸れ通り、其の後小家一ツ二ツ引き廻ち、東の方の町はづれにて相圖の煙をたてけり。高虎大に悦んで傳へ聞きし古の王者の軍を學べる玄蕃哉とて、其の日著られし唐冠の兜を脱ぎて與へられぬ。

二九六 寺澤廣高加藤嘉明度量の事

關ヶ原にて東照宮いまだ岡山に御着陣なき以前、諸大將地の利に據りて面々陣取りたりしに、或夜諸陣俄にさわぎけり。寺澤志摩守廣高臥しながら徐に我れ既に聞きたりといひて、斯かいて寢られけり。廣高士六人歩の者六人を物聞とす。三番に互に代りて途を異にしてすこしの事も必ず告げ来る。今夜告げ來らざれば夜討にあらざる事を元より知りたるゆゑなり。其のあくる夜忍びて加藤嘉明の陣所を通る者あり。とらへて忍か火付か切つて捨てよといふに、嘉明其の士は主君のために死を願みず、吾が陣所の備意らず。彼れいかにして吾れを殺ふべき。殺すと殺さざると勝敗にかはらずとて追ひはなされけり。

二九七 春日九兵衛見積の事

丸毛兵庫が弟春日九兵衛、大坂より大垣に到り、諸將の内に二心ある人の候ふ。陣所の有様必定味方敗北すべし、陣替せられよと三成にすゝむれども是れを用ゐず、果して敗れたり。

〔後に前田利長春日をまれかれしかども、江戸駿府を憚り事ふる事あたはず。京極若狹守高次は東照宮の婿なるゆゑに、しひて乞ひ招き寄せ藤千石に過ぐべからずとの仰せによりて、京極家に仕へけり。後ち岡飛驒といふ、岡越中は飛驒が子なり。〕

二九八 村上彦右衛門先見の事

關ヶ原の時大坂の舟手村上彦右衛門・菅平右衛門九月十二日の夜桑名に著き、十三日諸將に對面し、安國寺に向ひて味方陣所の體見及びたる所心得られずといふ。安國寺吾れもさこそ思ひ候へ。されども關東者一人に上方勢十人の積りなれば、四五日もちこたへなんには必ず勝つべしと答ふ。村上味方山ヅりの有様高くとりあがりまばらなり。戦ふべき色にあらずとて下りあふ事も叶ひがたからん、東勢は物し故陣所あつく見ゆ。一兩日を過ぎずして合戦あらん、覺東なしといひて歸りしが、果して計りし如し。村上は敗軍の時阿濃津より九鬼大隅守嘉隆の許にゆき、夫れより上方にのぼりけり。

二九九 土方三九郎武功の事

關ヶ原の軍の前、有馬豊氏大垣と川を隔てて陣せしに、豊氏の兵土方三九郎を始め十騎川を渉り、敵少し出でたるを追つ立て、大垣の矢倉の下に馬を立て、聲々に名乗りければ、弓鐵砲を打ち懸けたり。三九郎左の肩先に手負ひぬ。續く味方もなければ、十騎の者ごもしづしづと馬を引き返したるを、東照宮も聞し召しけるとなり。

〔賞功うすかりしかば、土方・岡本彌一右衛門・渡邊佐左衛門・上田丹波と言ひ合はせ出奔しけり。土方が養母を百姓のもとに隠し置きたるを、豊氏番人を付けて守らしめられしかば、三九郎歸りて養母を人質にめしとられし上は、とかくの事を申すに及ばず腹を切らんといふ。豊氏尤もなりとてゆるされて、もとの如く仕へ居しかども、同じく立ち去りしものゝおもふ所もありとて、養母を打ち具してまた出奔し、加藤清正に五百石にて仕ふ。豊氏かまはれしかば落ちぶれて年月を經る所に、外舅中内惣左衛門といふ者豊後に在りてまれき寄せたり。中内は長曾我部が長臣なり。大坂の事起るに及んで、長曾我部とともに大坂にこもりしかば、三九郎も打ち具したり。元親はた

を二つに分け、國澤掃部と土方にあづく。三九郎此の時六左衛門といひけり。五月六日に矢尾の堤森ある所に東に向つて押しける時、朝霧深く物色定かならず。森の南より紺地に白もち付けたるはたをおし立て敵寄せ来る。堤せばければ、はたを引きおろして立つる處に、敵は藤堂の先陣にて旗を堤の下におろすを見て、敵は逃ぐるといひて馬より飛びおり突いてかゝるを、元親大普あけ鎗を横に持ち引き付けて突き崩し候へ。一人もみだりにかゝるべからずと下知し、十分に敵を引き受け一同にぎつと起き立ちて切り崩し追討にしける所に、渡邊勘兵衛押し来る。六左衛門散々に戦ひ鎗も歪みけるが、後ちには敵の鎗を奪ひて働きけり。かゝる所に元親先陣敗北し掃部も討たれ、大坂の諸陣皆やぶれしかば、三里計が間援くべき味方もなく、元親久寶寺をさして引き退きけるに、勘兵衛したひ來り、鐵砲を打ちかくる。三里が間に旗竿過半打ち折りけれども、旗ぎぬは一ツも捨てず、みなしぼらせて城にもたせ歸りけり。落城の日元親僅に士十二人打ち具し。八幡の方に落ちたりしを、六左衛門も従ひしに、元親汝等とく是れよりおもひおもひに落ちよといへども、いづくまで附きそひ申さんといひけるを、元親志はさる事なれども、遂にわが爲によからざる間落ちよといひしかば、中内一人とごまりて其餘は落ち行きけり。六左衛

門其の子孫今池田の家に仕へてあり。」

三〇〇 小栗又市谷々見廻りの事

東照宮岡山に御著陣の夜、小栗又市露に濡れて御前に参り、谷々心元なく存じ打ち廻り見て候ふに上方者何の手だてもなく候ふと申すを聞し召し、井伊兵部に下知して、宵より官澤次郎右衛門を、山かげ谷々見て歸れとてやりつると仰せありけり。

三〇一 秀家夜討せんといはれし事

關ヶ原の時東照宮岡山に御著陣を秀家見て、敵の陣所あさまに見ゆ。夜討せんといはれしに、三成かゝる大軍にて夜軍は利なきものなりとてやみけるを、秀家後ちまで悔まれけりとかや。

三〇二 株瀬川合戦の事

關ヶ原の軍の前、九月十四日浮田・石田軍を出だし、一色村に兵を伏せ株瀬川を渡り、中村式部少

輔の軍兵の陣所に押し寄せて鐵砲を打ちかく。中村が士竹田五郎兵衛先がけして打つて出る。有馬豊氏も陣所相竝びたれば兵を出だす。竹田は討死し、伏兵に射しらまされて敗北しけるに、中村が士大將一色頼母白ほろかけ、栗毛なる馬に乗り、崩るゝ味方をはげまし返し合はせたるに、藪内匠引きて通りけるを詞をかけ、何とて返し合はせざるかといへば、藪ふりかへり手負ひたりとて川を渉す。頼母は鐵砲にあたり馬より落ちたりしを、其の組の士松村清介頼母がわたかみをとりに引きずり退きけり。敵追ひ来れば頼母が上帯を切り、刀脇指ばかりとりて退きけり。其の後富村といふ者頼母が首をとる。

〔其の前の日、一色・藪二人、國清公・福島正則等の諸將の前へ出で、岐阜攻め落され功名致すべきやうもなく候ふ。さて此れよりは中村が者ども軍始仕らんといひけるに、軍始はわれわれどもがわざなり。いはれざる事をいふとて不興なりき。其の中に正則目を見出し怒られける故、左様にも仰せられざるがよく候ふ。太夫殿のおし付羽織のうしろ紋を見申したる事もありき。式部事本園より以來先陣を勤め、何れの軍にも功名とげ候ふ。とかくつかまつりて御目にかけんといひきとぞ。〕

浮田石田等が軍兵きそひかゝれば、矢野助之丞、金の團扇の指物、林文大夫は赤ほろかけて、二騎面もふらずかけ向ひ、進む敵を追つ崩したる有様目を驚かせり。赤坂の御本陣より御覽せられ、井伊直政・本多忠勝に御下知ありて人数をまとめらる。此れを株瀬川のせり合ひといへり。

三〇三 稻次右近功名の事

株瀬川にて三成が兵勝に乗りて進む處に、有馬の士稻次右近鳥毛の半月のさし物にて殿しけるを、横山監物といふ三成が士馳せ寄つて引つ組んだり。稻次が従者助け來り、横山を引き伏せたる處に、敵走り寄つて稻次が兜をとり引き仰ぐ。稻次ふり放さんとする時、従者又助け來りて敵を一刀斬る。かゝる處に堀尾忠氏のほろの者はせ寄りて、誤つて稻次が手の者を切り伏せて首を取る。稻次は終に横山が首を取りまた敵をも打ち取り、馬を靜に歩ませて、東照宮の御陣所に参りけるを御覽じて、先に此の陣のかたへより敵に向ひたる武者、功名したるは誰れが者ぞと仰せ有りに、有馬法印側に在りて、豊氏が手の者にて候ふよと申す。稻次首帳を記す處に行きて従者を味方討に打たせて候ふ。其の首帳をば消して給はり候へと云ふ聲を聞し召し、何事ぞと問はせ給へば子細を申す。かゝる大軍のみ

だれ合ひたる戦には、味方討もある物よとぞ仰せられける。

〔其の後稻次には六千石祿増し興へられ、八十五歳鳥原の城攻に討死しきとかや。堀尾のほろの士とも味方を討ちたる者と同じく、ほろ預り居らん事口惜しと申ししかば、忠氏の父吉晴是れを聞き、彼の士をばほろを取り返して、別に弓の足輕二十人預けられけり。〕

三〇四 浅香庄次郎働の事

浅香庄次郎後左は奥州葛西大崎の木村に仕へ、其の頃關白秀次の不破萬作、蒲生氏郷の名越山三郎と共に天下に聞えたる美少年なり。木村家滅びて石田に仕へたりしが、咎を蒙る事のありしに、株瀬川にて鼯の皮の羽織を着、銀の大釘の立物打ちたる兜にて、中村がほろの士梅田大藏が首を取り、大垣にはせ歸り、三成隅矢倉に居たる下にゆいて、勘氣をゆるされ候へと呼ばはる。三成聞きて能くこそ軍したりといひければ、又馳せ行きて三成が軍兵を引き揚げたり。後に加賀利常にまれかれて率公しけり。

三〇五 林半介殿の事

林半介は美濃安入郡青柳村の百姓なりしが、石田に仕へて祿七百石使番たり。石田兵を起すの時、佐和山の城中に軍兵を集め、書院にて饗禮を行ひ、吾れ今かゝる一大事を思ひ立ち、運命を天に任すといへども、汝たちが武勇をひとへに頼む處なり。其の旨を存じて軍忠あらば、賞は功によるべし。其の約束の印として酒盃を座の中央に出しける時、林、遙の末席より進み出でて、軍に臨みて一番は知らず、二番はかく申す半介としろし召されよとて、其の盃をとりて飲みたりければ、皆にくきふるまひよといひしが、株瀬川にて一番首をとりぬ。斯くて兩軍物別れする時、稻葉助之丞は金の切裂の指物にて秀家の軍士の殿し、林は白じなへのさし物指して乗りさがり殿しけるが、猶も本多忠勝が兵に向つて一騎輪をかくる有様、敵ありとも思はざる體なりしを、東照宮御覽じてあつばれ不敵者哉。武功に志す者はあの武者の草摺をいたしけと仰せありけり。

三〇六 伊藤金左衛門三宅平大夫後殿の事

關ヶ原の軍の前の日、伊藤長門守至孝が大敵の陣所に石田使を以て、とく大垣に入りて一所になられよといひ送りしかば、至孝大垣に行く所を徳永左馬助壽昌・市橋下總守正舒したひけるに、伊藤金左衛門紫ほるに蛇の目の紋付きたるをかけ、三宅平大夫と唯二騎殿しけるが、十四五騎計追つかけたり。伊藤大音あげ大事の殿、勝負なせそと言ひて引き退く。三宅は馬より下り立ちしが関の聲に驚きて、馬は口に付きたる下人をふみ倒してかけ出だしぬ。歩立に成りて靜かに退くに日は暮れたり。かかる處に正舒の兵市橋勘左衛門追つついて詞をかけ、鎗を合はせんとせしに、三宅とは昔より親しみ深かりければ、互にその聲を聞き知りて、夜中誰れも知らざる處に行きあひぬるこそ幸なれ、爰にて戦ふとも何の功名かあるべき、いざとて立ち別れけり。至孝大垣に入りて三宅は討たれしならんとをしまむ處に、歸り來りてしかじかなりといへば、至孝悦んで鹿毛なる馬によりき鞍置きて與へ、三成は黄金三十兩引出物にぞしたりける。伊藤は十六七のころより功名ありて、赤き手ぬぐひを鉢巻としければ、敵例の赤手ぬぐひ又出でたりと、世にいはいはれし者なり。或時軍破れて川岸を只一人引き退く時、餓ゑられたるに敵一人腰なる兵糧を遺ふを見、走り寄つて斬り伏せ腹をさいて飯を取り出だし、川水にひたし洗ひて打ち喰ひ、陣所に歸りけるとなり。

三〇七 毛谷主水物見の事

關ヶ原にて諸將物見を出だされしに、馳せ歸りて敵或は八九萬又は十萬計も候はんといふ所に、黒田長政の物見毛屋主水、敵は一萬にも過ぎ候はじといふ。やがて東照宮の御陣所に參りて申せば、敵は大軍なるを汝が詞こそ怪しけれと仰せられしかば、主水承りおよそ敵は七八萬もや候ふらん。されども兩軍の勝負を計りておのが身に懸けて、軍に志し候ふ兵は幾程も候はず。石田・小西等が頼み切つたる者ども彼れ是れ合はせて一萬計に過ぎ候ふまじ。一陣敗北せば餘は戦はずして敗れ候ふべしと申しけるに、東照宮主水は敵の内通を知りたるにや、軍の情によく通じけるよと感させ給ひ、御手づから饅頭を賜はりけるを、ふみ壇に在りて此れを食して出でける後ち彼れは本姓は何といふにやと仰せありければ、かたへより毛屋と申すと申せば、いやよと北國の毛屋といふ所にて功名せしゆゑ毛屋と姓を更へつると聞きたりと仰せありけり。主水もと山崎源太左衛門に仕へ、後黒田家に奉公し朝鮮にて平安道の小川を渡しし時、味方は遣に渡せるにやと云ひけるに、主水味方は川上を渡し候ふ。子細は馬の沓草鞋の流れ候ふ故に察し候ふといへば、長政尤もなりとて渡されきとかや。主水後ち

千五百石の祿なり。此の時は旗奉行たりしが、合渡の軍にいかにしたりけん、長政の旗しごるに成りし時、主水馬より飛び下り、鎗の鐔を以て旗竿をうつむけ、汝等もし旗を仰げなば、忽ち切つて捨てんと下知して、岩巻といへる旗さしの強力のものに取り分けてかたく戒め、主水もえいえいと聲をかけて押し立てたり。又關ヶ原にて長政の旗卑き所に立ちたりければ、長政あとの高き所に立てよと下知せらる。主水進んだる旗を退くるはぎならば、敵に勢を付け候ひなんとて遂に旗を立て直さず。長政後ちに此の二事を賞せられけり。

三〇八 關ヶ原合戦島左近討死の事

黒田長政はもとより石田と不和なりしかば、關ヶ原合戦の前選り立つたる士十五騎、明日の軍にわけ懸けすべからず。吾が馬の廻りに引きそひて軍せよ。石田と手を取り組みて討ちとらんと用意せられけり。石田が陣の前に柵あり。島左近昌仲左の手に鎗をとり、右の手に塵をとり、百人計り引き具し柵より出でて、過半柵際に残し静かに進み懸かりけり。長政馬より下り立ち鎗を提げてにらみ合ひたる處に、菅六之介政利少し高き處に上り、五十挺の鐵砲を透間なく横合にうたせけるに、眞先に

進んだる敵手負ひて、左近も生死は知れず倒れしかば、ひるむ所を長政ごつとおしかり切りくづされけり。左近は肩にかけてそこを退きぬ。菅後に六千石の祿賜はり和泉と稱す。長政筑前の國領せられて後、關ヶ原にて選にあひ、長政のかたへに在りて軍しける人々集つて閑話しけるが、石田が士大將鬼神をも欺くといひける島左近が其の日の有様、今も猶目の前に在るが如しと云ひけるに、其の物具の事をいひ出だして更に定かならず。人々口々にいひしかば、其の軍の頃石田が方に在りける士の筑前に仕へけるを三人呼び寄せて問ひければ、左近兜の立物朱の天衝、溜塗桶かは胴の鐵に、木綿淺黄の羽織を着たりきと語る。人々驚きて近々とつめ寄せたるに目覺えざる事、能くうるたへたるよ、口をしき事なりと云ひしに、其の中に取りわき剛の者の云ひけるは、見たがへたるはわれながらも、とわり哉。左近が引き具したるは皆すぐりたる物にして、七十計は柵際に残し、三十計左右に立てて塵を取り下知したる有様、つくづくと案するに、三十人計の兵ども鎗の合ふべき際にさつと引き取り、味方ばらばらと追つかけんを近く引き寄せ、七十餘人の人どもえいえい聲を揚げて突きかゝり、手の下に追つ崩し残りなく、討ちとらんとの手だてなりき。今思ひ出づれば誠に身の毛も立つて汗の出づるなり。かく酒酌みかはして心安き朋友と物語するとは大にことならずや。人々大かた目のたましひ

は失ひたるにぞ、若し其の時横合より鐵砲にて打ちすくめずば、われらが首は左近が鎗にさし貫かれなん。見たがへたりとて必ずしも恥にあらずとぞいひける。

三〇九 飯尾甚太夫一騎先駆の事附成合平左衛門が事

門が事

關ヶ原にて飯尾甚太夫安信只一騎、黒田長政の陣の前に馬を乗り寄せ、大音あげて名乗りけるをいざ討ち取らんとはやりをの若者共進みけるを、野口左介・益田與介見て只一騎先駆したる志、昔をいはい、一の谷の木戸口にて熊谷・平山が終夜名乗りつる體なり。平家の士出で合はざりしも志の者を助けんとするべし。たやすう討つべけれども、夫れは情なし後を見よと鎗を横たへて制しければ、飯尾庭々名乗つて馬を引き返しけり。飯尾は豊後國富來の垣見和泉守が兄利右衛門が子にて、五千石の祿にて秀家に奉公し居たり。

株瀨川の軍に、中村の士成合平左衛門利忠、午の舌の指物にて眞先かけたるを、飯尾討ち取りけり。其の後黒田家に仕へ千石の祿鐵砲預かりしに、長政成合が首取つたりと聞き、彼の成合は世にかくれ

なき勇士なり。其の首を取りたればとて三千石増し與へられきとぞ。成合もと中村家の士なり。天正中、秀吉が蒲生氏郷・木村伊勢守秀俊に、奥州數十萬石賜ひしころ、兩家とも士卒の少きに困りしかば、秀吉下知して日本國中の士主人に不足ある者共、或は主人かまひある面々皆兩家に行きて祿を得べし。主人咎めなば秀吉相手たらんと札に書きて立てられしかば、成合は和泉小木川の一番鎗を合はせ、秀吉の感狀賜はりけれども、一氏わづかに三百石あたへられし故、木村が許に行きて三萬石、佐沼の城代たりしが、木村が家滅びて後ち、復中村が家に歸りて仕へ、株瀨川にて討死したりけり。」

三一〇 蒲生備中父子戦死の事

蒲生備中眞令は石田が内にて聞ゆる勇將なり。關ヶ原の前軍評定の時、眞令明日は偏に必死と定めらるべしと云ふ。島左近明日先陣に進んで、忠義を兜として打ち勝つべき物なといへば、眞令また昔より利を得るは、天のたすけによるといへども、軍の正しきと法令の嚴しきとの二ツにあり。よく内に省みたまへ。偏に必死とおもひ定められれば勝の半なるべし。左あらずば復御目見致さじと座を立ち

けり。眞令元より敗軍をさとりて、三成に必死を究めし詞を出だしたり。斯くて關ヶ原にて只一騎三成が陣に乗り行きて何事をかいひけるに、三成うちうなづく。眞令馳せ歸り、競ひかゝる敵に向ひて散々に戦ひけるが、織田長益に合ひて昔は蒲生の家にて横山喜内、今は石田が内にて蒲生備中として、人に知られたる者なりといへば、長益神妙に候ふ。われに降参せよといひも終らぬに、こは何事をやとて拜みうちに斬つてうち落す。長益の從者千賀文藏鎗を以て突き通すを、其の柄を握りて引つ組んだるに、文藏が弟文吉刀をとり直し、眞令を刺して遂に打ち取りけり。眞令が子の大膳は戦ひ半に首一ツ提げて父に見すれば、功名を何にせんといふを聞き、又東に向ひて押しかゝる敵にかけ合はさんとせしが、父討たれたりと聞き、

まてしばし我れぞわたりて三ツ瀬川あさみ深みも君にしらせん

といふ歌を高らかに唱へ自害したり。大膳幼より戯を好まず。關ヶ原に出陣の時、母われ汝が富貴を願はぬにはあらざれども、弓箭の家に生まるゝ身は昔より名を重んずる習なり。凡そ物二ツは兼ねがたし。身を全うして名を忘れよとは言ふべからずといひしかば、父と共に死して母の戒にたがはざりけり。

三二一 大谷吉隆平塚爲廣最後合戦和歌贈答の事

越前敦賀の城主大谷刑部少輔吉隆は、會津征伐に従はんとて兵を出ださんとせしに、石田三成より檣原彦右衛門を便にて、しひて佐和山の城に來られよ。密に評議すべき事有りと云はせけるに、此れは心得ずと思へども、是非を論ぜずしひければ、止む事を得ずして佐和山に至る。三成悦んで今度關東を討ち亡ぼすべき謀を語りける。大谷驚きて故太閤常に徳川殿の智勇の備はりたるを崇敬おはしましき。今徳川家をうち亡ぼさん事思ひもよらずといひければ、三成我れ上杉景勝と計りて景勝旗を掲げられたり。其の約を變じて景勝一人を攻め殺させん事本意に非ず、運を天命に任するの外道なし。豊臣家の恩を厚く蒙りたる身なれば、秀頼公の御爲にかく一大事を思ひ立つたるぞかし。など豊臣家の恩をわすられしやといへば、大谷さらば力なし。命を秀頼公に奉りて、今度の軍に討死すべし。但しかゝる一大事を思ひ立たれんには、思慮すべき事二つあり。申し出だして見ん、用ゐらるかといへば、三成いかで所存を防ぐべきと悦びしかば、大谷が曰はく、世の人石田殿をば無禮なりとて、未々に至りてもこゝろによからずいひあへり。江戸の内府は只今日本一の貴人なれども、卑賤の者に至るま

で禮法あつて仁愛深し。人のなつき従ふ事大方ならず是れ一ツ。次に大事は智勇の二ツならではとげ得がたし。石田殿は智ありて勇足ざるかと存じ候ふ。今度毛利・浮田も皆かりに同意したる人々なり。必ずしも頼みとすべきにあらず。水口の長束と計り、内府關東に歸路の時、石部あたりにて旅宿の時夜討して火をかけ、十死一生の軍せば勝利疑なきに、あたら圖を外されぬ。内府關東に歸られけるは虎を千里の野にはなつが如し。十全の勝をはかられなば、又圖をばづして悔むとも益あらじ。此の上は命を秀頼公に奉るの外他の道なし。士卒は皆平塚に下知させて候へば、其の志計りがたしといへども、よも別の事は候はじとて伊益の驛に至り、平塚に告ぐれば平塚大に驚き、三成志大なりといへども、大軍を率ゐるべき將畧なし。然るにかく與るせられしは禍をまねくといふべし。然れども既に許諾せられたればいかんともすべからずとて、三成が送り來りし使者には心得候ふとぞ答へける。吉隆敦賀に歸りしに、關東勢岐阜を攻め落しけると聞きて、敦賀を打ち出でて關が原に乗り入りしが、秀詮の裏切を元より悟りければ、僅に六百餘の陣を一手になし、關ヶ原におし出し鎗衾を作りて秀詮に向ふ。吉隆は目を病みて、士卒は皆平塚に下知せさせ、練組の小袖の上に村蝶を墨にて書きたる鎧直垂を着四方取りはなしたる竹輿に乗りたるが、秀詮裏切して討つてかゝられしかば、大谷齒をかみ秀詮の不

戦骨髄に徹せり。敵の旗本を目にかけて切つて入るべしと下知しければ、木下山城守・大谷大學・戸田武藏守重政・平塚因幡守爲廣、けふを最後と思ひ定め、面もふらず切つて入りしかば、秀詮の先陣立つ足もなく敗北す。されど藤堂高虎を始め、東國の軍おしかけ進み來れば、秀詮の先陣もり返して討つてかゝる。されども死狂ひする鋒尖に、秀詮の先陣又追立てられけり。爲廣敵あまた打ちとり、其の首を吉隆に送り、此の首自ら討ち取り候ふ。其途のつとに參らせ候ふ。日比の約束只今討死し候ひなんとて、自害候うて人手にかゝらざれと言ひ遣はし、外に歌一書き添へたり。

名のためにすつる命は惜しからじつひにとまらぬ浮世とおもへば

「一脱に秀詮の士横田半介を討ち取り、其の首を吉隆に送るともいへり。」

吉隆使に向ひて、武勇といひ和歌といひ感ずるに餘あり。はや自害して追つ付け再會すべしと答へて、甥の祐玄といふ僧に返しを書かせて使に渡しけり。

契りあらば六のちまたにしばしまておくれ先だつことはありとも

かくて平塚は戦ひ勞れて、畔に腰かけ息づく處に、小川土佐守祐忠が兵糧井太兵衛鎗を掲げ歩み寄る。平塚立ち上り我れば平塚因幡守なりとて散々に戦ひけるが、終に倒れながら十文字の鎗を投げ出

だし、汝が重寶にせよとて討たれけり。戸田重政も思ふほど切つて廻り討死したりければ、大谷が軍敗れて吉隆自害しけり。行年四十二歳とかや。岩佐五介首を羽織に包み、其の邊の田の中に埋み、光手に向ひ討死しけるを、藤堂の士大將藤堂仁右衛門其の首をとりて、御旗本に奉りけるに、東照宮五介は聞ゆるものなり。缺辱なるべしと仰せ有りけるに、しか有りきとぞ。

三二三 瀧川内記功名の事

瀧川内記辰政は左近將監一益が末子なり。秀詮に仕へて松尾山にて秀詮の軍敗北の時、いさみかゝる敵を支へて從者に首五つとらせ、秀詮のもとへ持たせやり、其の所をさらで吉隆が兵に鎗を合はせ、岸より下に敵を突き落したれば、山田喜内其の首を取る。敵なほ競ひかゝりけるを、笹地兵庫と俱に散々に戦ひて首を取りたり。後ち池田の家に仕へて祿三千石士大將たり。此の軍の時廿四五計の年をや。

〔辰政其の始織田上野介信包に仕へて、十六歳の時小田原の軍に、信包織田常真に對面せんとて、從者を遠ざけ、辰政只一騎を具しておもむかれけるに、江川の丸より横筋かひに鐵砲を打ちかゝ

る。辰政信包の矢面に乗りふさがりしゆゑ、ほろに鐵砲の玉三つあたる。信包大に感賞して臨ましをあたへらる。辰政此の時七郎といひけり。池田家に仕へて丹波と稱し、又出雲と改む。〕

三二三 本多正重の事

關ヶ原の戦九月十五日辰の刻過ぐるまでは、東照宮桃配に御旗を立てられつる所に、本多三彌正重來りて、今少し先へ御旗を進め給ひて然るべし。是れは敵合遠しと申すを聞し召し、口わきの黄なる男にていはれざる事をと仰せければ、三彌御後の方に廻り、口わきは黄なるにもせよ、遠きは遠しとひとりごと申しけり。

〔三彌は佐渡守正信の弟にて、若き頃武者修行として度々功名あり。長篠の後は瀧川一益のもとに在り。いづれの軍にや、諸浪人皆はたらきありしに、三彌手にあはざりしかば、一益さしもほまれ高き人の今日の事はいかにと云ふ。此の答は明日こそとて、其のあけの日首二つとりて、昨日の答是れなりといへり。甚だ風流を好み、物數奇いやしげなる事なく、常に身に薰物をとめたり。前田家にもしげらくあり。慶長元年伏見にて東照宮に仕へ奉りけるが、以の外に直貢する人なり。〕

或時幸若八九郎を召され、高館の舞終はりて後、武藏坊辨慶は世にすぐれたる者なり。今の世になかるべしと仰せありしに、三綱承りて今の時辨慶は有るべけれど、判官に似たる主君の候ふまじと申ししとなり。大坂冬の陣の時台徳院殿に仕へ奉りけるに、東照宮三綱はよくすれる者なりとて仰せられけるが、其の後ち一萬石賜はりたり。東照宮御前に召し出だされ、いかに思慮したるや人がらをたしなみて、すれざる由聞きたりと仰せ有りければ、三綱將軍様は仕へ奉りよく候ふ。あのごとき主君にすね申すはきちがひにこそ候へ、と申しけるを聞し召して、又持病おこりたりと笑はせ給ひけるとぞ。七十二歳元和二年病死せられけり。

三二四 梶左馬助御書を認むる事

同じ時祐筆梶左馬助、かれて御書を九月十五日の日付にて、今日巳の刻御勝利と認め置きけり。東照宮御感あつて、十五日とさしたるは尤もなり。巳の刻とはいかに。左馬助承り敵は大軍なり。巳の刻を過ぎたらば御敗軍と存じたりきと申しけり。

〔左馬助は上田善四郎が四男にて祿四百石、後ち千石賜はりて御使番なり。〕

三二五 田邊甚兵衛幼年功名の事

田中兵部大輔の士田邊甚兵衛、十四歳にて關ヶ原に出で、従者敵を突き伏せ、田邊を馬より抱き下して首をとらせたりきとなり。幼少にて武功世に名高かりければ、黒田長政田邊に逢ひて大に感賞し田邊をとりかひたる従者を呼び出だし、其の事を問はるるに馬より抱きおろしたるに、刀を抜いて振ひければ、恥ぢしめて首を取りたりと云ふ。長政さては勇士なり。ふるはずにかかりたらば途方なき故といふべし。恥ぢしめられて首を取りたるは、勉めはげますによりて勇氣を致す所なりとて彌ほめられけり。

三二六 辻小作中黒道隨が事

辻小作は福島正則に仕へしが、可兒才藏と親しみ深く、共に世に聞えたりし者なり。中黒道隨は石田の賓客の如くもてなし置きけり。關ヶ原の軍敗れし時、中黒唯一騎落ち行く兵の中に踏み止まり、さんざんに戦ひけるを、辻見ていざ討ちとらばやといへば、可兒なさけなき事をいふもの哉。たすけば

やと云ふ。辻さては生けざれとや。可見に好まれて辭し難しといひすて馳せ行くところに、中黒馬を深田に打ち入れて、賭籠もろかごを合はせて更に動かす。辻岡をかけ日頃のよしみに助んずるよ。早く取り付けとて槍の鏑しんがせをさし出だす。中黒かかるきはに命助かりても何にかせんとて、すでに自害じがいすべく見えしかば、辻何とたげかるべきや、神明にかけていつはらじといへば、とりつきたるを辻主從引きあげて陣所に歸る。可見見て大に悦びけり。さて辻は物具脱ぎて裸はだかになり、仰あやむけに打ち臥して只今まで敵なりし中黒を物とも思はぬ有様にて物語す。中黒あまりに侮りたるよと心中にいかりけれども、命を助けたりし恩を思ひて、さてやみぬと、後に中黒此の事を語りて笑ひきとなり。中黒後井伊直孝なほなかと招きて祿二千石興へられけり。

〔或説に、丹羽山城・谷出羽・笹野才藏・稻葉内匠・中黒道隨・渡邊勘兵衛・辻小作、兄弟の約束して武勇を勵み、天下七兄弟と云ひきといふ。〕

三二七 島津義弘關原退口の事 附大坂の商賈義氣の事

關ヶ原の軍敗れし時、島津義弘しまづのりひろ眞丸まひるまんなまるに成りて、福島刑部少輔ふくま正武まさたけの陣の前を切り抜けん、一文字

におし通る。正武十六才かけ合はせんとする處を、梶田かじだ又右衛門しげのり死狂する敵に軍はせぬよとて追ひ留めたり。東國勢おしかけしかば、義弘の從子まがつかま中務大輔なかつま豊久義弘の馬のかたへに乗り寄せてささやく體なりしが、やがて大敵にかけ合はせ討死す。義弘今は是れまでなりとて取つて返されけるに、阿多長壽あたながさ入道にゅうだう成淳なるみ義弘の馬の前に打ちふさがり、大將は千騎が一騎に成り候うても猶死せずして謀はかりごとをめぐらし候ふを道とこそすれ。とく打ち破りて引き退き給へといふままに、馬の首かしらを引き直し、島津兵しまづひやう庫頭このかみ最後の合戦をするぞと呼ばはりて、さんさんに戦ひて討死しけり。成淳なるみが義弘に勵まされ、ふみ止まり支ささへ戦ひ討死する者多かりける。其のひまに義弘又士卒を集め列を整へ引き退く時、松平忠吉・井伊直政いひのちかあますなとて追つかけてたり。義弘が兵へいども種々しゆしゆ島しまの鐵砲てつぱうを腰に挿したるを抜き出だし、ひたひたと折りしきて打ちかけたるに、忠吉・直政共に手負ておひて、それより物わかれましたりけり。

〔一説に、本多忠勝ほんたのちか追つかけたるが、馬を鐵砲にてうたれ馬より落つれば、梶金平かぢのへい馳せ來りて、おのが馬に忠勝を乗せし其の間に、島津が軍隔たるといへり。又河上左京かはがさが從者まがらひ柏田源藏かしはたがうちける鐵砲に直政中ちかるともいへり。又松田某といふ朝鮮陣の時連れて歸りし小兒の成長せいちやうしたるを、組にして在りけるが、鹿の角のたて物の兜かぶとこそ兵部へいぶよ、打ち留めよと下知しければ、鐵砲をさし向

けたるに、直政なむね眉尖刀なみを横たへて馬を乗りかけられしに、彼の兵松田某と名乗つて打ちしに、眉尖刀なみに中り、其の玉腰骨にかすりて馬より落されけり。さて亂鎧らんざいまりて後薩摩のもとに直政を襲せられしに、直政松田を呼び出だし、盃さかづきをさし、關ヶ原にて既に死すべかりし身の幸にながらへて今日對面する事を得たりといひて後、わが片足かたあしをなやみぬ。かゝる武功の人に少祿せうろくこそ不足に候へ。今日のもてなしに祿を増し給はり候へといはれけり。彼の物頭ものがしら後ちに直政の呼び出だされて對面に及びし時のめいわくなる、一生いっしやうに覺えずといひけり。」

義弘近江の甲賀かかにかかり、老翁一人案内者にして道しるべさせ、伊賀の山路を経て上野まで行き着かれたり。爰は筒井伊賀守定次の城なり。使を以て島津義弘唯今打ち過ぎ候ふと云ひ送りて行く處に、野武士四五百人がほど山の中に待ちかけたり。義弘物の數ともせず打ち破り、二人生け捕りて上野に立ち歸り、大手の棚の木にからめ付け、さてそれより奈良に出で、かの老翁には刀にさし添へられし赤銅の筈かすがいをあたへ、此れをしるしに必ず薩摩に來れ、今度の勞ろうに報ぜんとして大坂に至り、船に乗り鹿兒島に歸られけり。

〔一説に、左近丞と云ふ姓薩摩に在り、是れば慶長の頃大坂の商にて、年久しく薩摩の米をあきな

ひける者なり。關ヶ原破れて後義弘大坂に著かれしに、士一人先だちてかの商家に行きしかば、彼の商待ちわびたる體にて、君はいかにおはしまし候ふと問ふ。いと討死ありしよと答へければ、商家涙を流し、年比厚恩を蒙りし事なれば、關ヶ原破れぬと聞くより、必ず爰にわたらせられんと相計りて、船を設けて待ち居たるかひもなく、口惜しき事なり。せめて御供に參らんとて水中に飛び入らんとせしを押し留め、今の時なれば人心の測り難くてかくはいひしなり。實に一方打ち破りて爰におはせしなりといへば、かく疑はれしは恨なれども、それを言はんには時移るべしとて、船にのらせられん様をこそといひも終はらぬに、義弘來られしかば、酒樽を積み其の間にかくしのせ、其の身も付き添ひて直に薩摩に赴きし、其の者の子の中一人薩摩に仕へし其の子孫なりといへり。〕

彼の老翁薩摩に行かばやとおもへども、道遠ければむなく過ぎしに、程經て人にいざなはれ、鹿兒島かごに行きて筈を出だしければ、などくと來らざりしぞとてさまざま襲し、黄金五百枚あたへ、いざなひし人にも黄金あまた與へて、人を添へておくり返されけり。

三一八 東照宮勝鬨の儀を延べ給ひし事

關ヶ原の軍敗れしかば、金森法印とて、勝鬨の儀式行はれ候はばやと申しけるを、東照宮諸將の武功によくかく敵をば打り破りたれども、諸將の妻子大坂に人じちとなりて敵の中に在り、此れを事故なく歸し興へざらん間にわが心を安んぜず、勝鬨をいかて行ふべきと仰せられしを、聞く人愈々感服しけりとぞ。

卷の十四

三一九 細川忠興の北の方義死の事

細川忠興の北の方は明智光秀が女なり。父謀反の時、忠興に向ひ申されけるは、父ながらかかるくはだて事よくなるべしとおもはれず。瀧川・柴田など申す人々多ければ、必ず軍敗れ候ふべし。女の淺き智慧にも口をしくこそ存じ候へ。男の身ならんには縊の袖にすがりても諫め申すべきを力なし。君もし與せさせ給ひなば、世の譏いかでのがれさせ給はんと涙に沈まれしかば、忠興光秀に同心なかりけり。其の後程經て秀吉伏見に在りて、諸大名の北の方を呼び入れて饗されし事のありしに、忠興の北の方かくと聞き、女の人なくて一間に入りて他人にまみゆる事やある。われも召されんとならばとて懐に匕首を用意せられけり。此れより秀吉の悪行はやみてけり。石田四國の諸將を語りて兵を起す時、諸大名の北の方を大阪城中に取り入れんとするを、北の方聞きて、傳に付けられし河喜多石見・稻留伊賀・小笠原正齋を呼びて、吾れ此所を出でん事思ひもよらず。城中にとりこめられんは恥辱なり。

よく斷を申し候へ。猶聞き入れられずば、是れを限り思ひ定むべしと語られしかば、正齋殿東國に向はせ給ひし時、おもひかけざる事のあらんには、正齋はからひて、武將の恥なさらしそと仰せ置かれ候ひき。敵奪ひとらんとするならば、其の時思し召し切らせ給へと申しけり。かゝる處に城中に入れよと使を以ていせしかば、再三斷りの旨を述べられども、聞き入れず。七月十七日の未の刻ばかりに、大阪の軍兵五百餘玉造口の屋敷をとりまきて、とく城中に入れ申されよ。さらば亂れ入りて奪ひ取らんと呼ばはりけり。女房輩あわてて泣き悲しめ共、北の方は騒ぐ色もなく、かくあらんとは兼れて思ひ設けつる事ぞとよ。正齋介錯せよ。われ生ける世に見えざりし人々に、死しての後ちも見られんはよからじとて、面に覆面打ちかけ、括袴著て刀を抜き、胸につきたてられしかば、正齋眉尖刀にて介錯し、其のままそこにて腹を切らんとせし處に、正齋が小姓はしり來り、殿の北の方と同じ所に自害あらば、後ちの誹の候ふべきと云ひければ、正齋餘りのいたましましさにわすれたるよとて、障子の外に走り出で、家に火を懸け、石見と共に腹切つて炎の中に死したりけり。伊賀は光秀より附けられし身なれば、遁るべき道もなきに、人にまぎれて落ちうせけり。

「忠興後にさがし出だし誅せんとせられたるを、松平忠吉、伊賀は無雙の鐵砲の妙手なれば、助け

置きて若ものに教へさせんとしひて乞はれしかば、忠興力なくて止みけり。伊賀は世の交もな
く髪をそり一夢といひけり。百發百中の手だれなりしかども、人多き中にては大きなものも中
らざりきとぞ。」

忠興の北の方かたみとやおもはれけん、手ずさみのやうに書きすてて、硯の中に入れられし歌に、
先だつばおなじかぎりの命にもまさりてをしき契とぞしる

落ち出でたる女房 取り降へて世に残りけるとなん。北の方はかかれてかくあらんとおもはれしかば、
幽齋の妹年老いて宮川殿と申ししと、忠隆の北の方長利の妹とに、吾は人じちに取られんと、世の物いひ
の候ふ程に落ち失せばやと存するなり。同じくともなひ参らすべきれど、人多くては中々うき目や見
る事の候ふらん。とく此の隣の築地一重踰えて落ちさせ給へやとて、宮川殿は建仁寺忠隆の北の方と
浮田秀家の北の方に忍び行きて此の禍を免れたりとかや。誠に義烈のみにあらず、謀もゆゆしき人
なりと語り傳へて、袖をぬらさぬ人もなし。

門齋生捕られし事 附遠藤喜右衛門討死の事

三成兵を起す時、大津の城に入りて京極高次に對面し、彌々秀頼公の味方有るべしとぞ申しける。高次の士に安養寺門齋と云ひし者、黒川伊豫に向ひ、今三成城中に入る事、誠の天のあたふる處なり。からめ取りて關東に奉らんと云ふ。黒田聞きて三成を生け捕るとも、西國の諸將大軍にて攻め圍むべし。いかで防ぐ術のあるべきとて聞き入れず。門齋あざ笑ひ、三成は譬へば亂の首なり。其の餘は手足の如し。首を碎くほどならば、手足何の恐の候ふべき。たとへおし寄せ候ふとも、固く守りて戦ふべし。軍せずして三成を生けざるならば、天下に名を揚げ勳功誰れかならぶべき。吾年老いぬれど、三成をからめん事はたやすからんとて、今村掃部をも勧めしかども、争論に時うつりて三成城を山にけり。門齋はもと淺井長政に仕へ、姉川の軍に生けざられ、龍ヶ鼻の陣にて信長の前に引き出たす。信長曰はく、けふ勝に乗りて小谷を打ち破らんと思ふはいかに、汝が命を助けなん。此の勝敗いかなるべきと問はるるに、安養寺承り、長政が父下野守小谷に在りて、其の兵三千ばかりもや候ひなん、然るに疲れたる兵を以てかるがるしく攻められ候はん事然るべからずと申す。信長うちうなづい

て、けふ取りたる首ごも出だして、安養寺に見せて其の姓名を問はるる中にも、竹中久作が取りたる首を見て、遠藤喜右衛門直繼と申す者にて候ふ。いかなる有様に候ひきと問ふ。

「久作はもと齋藤家の士信長に奉公しけり。姉川にて淺井の士遠藤喜右衛門直繼云ひけるは、信長はかたく守り、夜々横山の城を攻む。信長の本陣龍ヶ鼻を一夜討せば、勝利疑なしといふ。長政是れを用ゐず。まからばかかる圍をばづして、淺井の家危き事朝夕にあり。軍敗れん時信長を討たん者は、吾れなりといひしが、いひつる詞にたがはず、首を刀の鋒につらぬき、大將の實檢にそなへんと云ひて、信長の旗本に來りけるを、久作討ち取りたり。久作かれて必ず遠藤を吾れ討ち取るべしと人さししたりけり。いかなる故ぞと問ふに、其の子細二つ有り。われ江州にて、遠藤と相知り、よく見知りたり是れ一つ。彼れば聞ゆる剛の者にて、力あくまですぐれたり。常に進むに先だちて、退くに後る是れ二つ。といひしが、果して直繼が首を得たり。」

竹中聞きて首一つ提げ、殿はいづくにましますぞと云ひてちかづき來りしまま、敵のまぎれ入りて殿を切り奉るならんと思ひ引つ組んで討ち取りき。と語りければ、夕部大依山にて、もし軍破れ候ふならば、必ず生きて歸らじ。信長一太刀恨み申さんと、遠藤がいひつるが、果して其詞の如くなりきと

いふ。

〔遠藤は浅井家に名有る剛の者なり。信長江州佐和山にて、始めて長政に對面あり。公方昭の歸京の次に、佐々木承禎を攻め打つべき事を議し、長政も力を合はすべきの由の約を定め、岐阜に歸らるるとして江州柏原に宿せらる。浅井縫殿・中島助九郎・遠藤喜右衛門、三人馳走の爲め、柏原に行きしが、遠藤早馬にて小谷に歸り信長を見るに、武勇猛にして謀たくまじき人なり。浅井家をくつがへすべき事疑なし。今日決断せられ候へ。臣信長を刺し殺し申すべし。其の勢に乗りて美濃に攻め入り候ふべしと云ふ。長政聞きて一度約して變ぜん事本意に非ずとて、聞かざれば、直繼再び柏原に赴き、信長をもてなし、信長無事に岐阜に歸られたり。直繼常に是れを悔みけるゆゑ、姉川にて獨りすすんで信長を討たんとしけり。

其の次に出だせる首を見て、是れば安養寺が弟にて彦六甚入と申す者にて候ふ。死なば一所と契りしに、先だちつる事口惜しけれとて、首をはねられよとて其の後にはものもいはず。かかる所に秀吉其の比は藤吉郎と云ひしが、栗毛の馬の汗かきたるに諸證を合はせ、白沫かまして馳せ來り、いざ小谷へおし寄せ攻め破るべきといひしに、信長いやとよ、かるがるしき軍はあぶなしとて許されず。秀吉

後悔あらんものを、急ぎ寄せ給へと強ふれども、信長聞き入れずしてさて止みけり。安養寺は只首をはねられ候へといひけれども、吾れに奉公せよとてさまざまなだめ申されけれども降参せず。遂にゆるされて小谷に歸りけり。安養寺にたばかられて信長軍を返されしかば、淺井三年經て小谷の城落ちたり。其の後安養寺・淺井と京極と一族なりし故、高次に仕へけり。若き時三郎左衛門とぞ申しける。

三三二 大津城合戦京極家の士戦功の事附赤尾伊豆が事

高次は關東に素より心を寄せられしを、大阪より朽木河内守元綱を使にて、秀頼公の外戚たれども江戸大納言殿にもゆかりあれば、人の疑を散ぜん爲に、幼息熊若丸を人じちに出だされ候へとなり。高次かるがるしく敵の色をも立てがたしとて、止む事を得ず、熊若丸北國に軍を出だされけるが、岐阜の城おちたるよしを聞きて、北國に向ひたる人々、大垣をさして引き返されしかば、高次北の庄より、直に海津にかかり、九月二日の夜半に大津に歸り、立花宗茂・筑紫廣門、粟津に陣せしを、夜討にせんと謀られしに、黒田伊豫同心せずして止みぬ。さらばとて、關寺の門を閉ぢ、城下の兵糧を取り入れ、専ら防禦の支度せられけり。宗茂・廣門石部より引き返して勢多に陣取り、輝元の陣代毛利元康

は三井寺に陣し、久留米秀包・南條中務を始として、三萬七千餘、四方よりおし寄せたり。中にも宗茂の軍兵ははげしう攻めつめて、死人をふみ越えて乗り入らんとす。防ぎ兼ねて京口の旗をしぼりければ、多賀出雲守眞先かけて扉を打ち破り、三の丸に関を作りかけて、ひたひたとおし入りけり。山田大炊・赤尾伊豆・足輕頭には井口左京・大橋肥後・安養寺門齋・使番山田三右衛門・横山久内・田中茂兵衛・茨川口を固めたるに、京口より敵亂入せしかば、二の丸さして引き退く。高次使を以て何とて三の丸をすてて早く二の丸へ引き取るか、仕寄を付けられなば防ぎがたかるべし。はやく敵を追ひ出せと下知せられしかば、門を開いて切つて出づる。山田大炊十字の鎗の鱗を片手に取つて兜の上にてふり廻し、参る参ると呼ばはり懸けて一番に鎗を合はせ敵二人突き伏せたり。此れを山田大炊が茨川口の鎗と世に稱しけり。赤尾は猩々緋の羽織を着て長身の鎗にて、數人突き伏せ、山田三右衛門も散々に戦ひけるが討死せり。二の丸に引き取る時、山田と赤尾とかはるがはる六度まで返し、突き拂ひたる殿の振廻目を驚かしけり。二の丸の門際にて赤尾・山田已下ふみ止まりける時。唯少齋門をたて關貫をさす。赤尾ちつともひるまず、長身の鎗をかたはらに置き、敵の方へ足を投げ出だし草鞋のひもを結び直す、其の武者振を敵見て少しためらふ時、少齋門を開けば中に入る事を得たり。赤尾棄て殺さん

としたるよといひしに、少齋敵追ひすがりて二の丸に攻め入らんとするゆゑにこそ門をさしてけれ。各々を助けん爲めに城の危きを忘るべきかといひければ、さばかりの伊豆も答ふるに詞なかりけり。黒田次郎兵衛・尼子宮内・安養寺長門・三田村安左衛門・今村掃部・赤尾久助・中井民部・小豆掃部・油井周防等は京口を防ぎけるが、三の丸へ攻め入り敵と戦うて討死すくなからず。銚子五郎兵衛は始め關白秀次に奉公せしに、あくまで酒をすきけり。ある時朋輩に語りけるは、殿下のかたへに立て置かれし白熊色白く丈長し。あはれ兜の上に亂しかけて軍の先がけせん物をといひしを、秀次聞きて、銚子を呼んで是れを肴に酒を呑めとて彼の白熊をあたへられしかば、銚子誠にありがたく存じ候ふ。敵れに申し詞しるしめされて候ふやらん。若し此の後、軍のあらん時先に申し詞をいかにせんといひけるが、今日栗毛のしほ革に金の筋つけたる羽織を着、かの白熊の雪の如くなるを兜の上にみだしかけ、十文字の鎗を横たへ、尾關甚右衛門と共に亂れ入る。敵五六人突き伏せて兜の鍔を傾け、一足も引くまじきぞと呼ばはり討死したりけり。事ふる君は異なれども、賜ひたる白熊にて敵味方の目を驚かす討死をぞ遂げたりける。尾關はもと柴田勝家に仕へしが、後高次北國より歸られし時、尾關を近づけ夜酒を酌みて密にささやかれたるは、吾れ石田に與するにあらず、歸りて大津の城を守らんと思ふなり。

敵の眞中に小勢を以て軍せん事尤もかたき事なり。汝が智勇を頼むと語られしに、尾關涙を流し、人いくらも候ふ中に何と思召されて斯く仰せ候ふぞや。此の上は三つなしと答へければ、高次汝討死すべきか。わが爲に命を捨てんとおもふ者多けれど、謀を同じくする者稀にこそあれ。汝前に討死とのみおもへるは、吾が志に非ずといはれしかば、尾關かく身にあまり候ふ御詞を承りては骨をきざまれ候ふほどの堪へがたき事有り。此の恩に報じ奉らんといひしが、此の時銚子と俱に戦死せり。後高次城を出でられける時、赤尾と山田に高次の奥の左右に供しけるを見て、寄手の軍兵指をさし、かの大膽者よと云ひあへり。

〔一説に伊豆茨川口の敵を追ひ拂はんとて出でける時、跡をば弟の久助・内田太郎左衛門・多賀孫左衛門等守りけるを、寄手きびしく攻む。久助手負ひて、吾れは本丸に引き退かんといふ。内田聞きもあへず、昔熊谷が子の直家うす手ならば討死せよ。痛手ならば自害せよ。といひし事弓矢取る身の詞なり。爰を逃げんとは口惜しき事よ。大剛の伊豆が弟に汝が如き人の有りけるこそ怪しけれど罵りけり。内田は銀の馬櫛を兜の立物にしけるに、銀の馬櫛よとほめけるほどの物前なり。敵今村掃部が持口を破りて亂れ入りしかば、伊豆ふり返り見て三の丸はとられしとて引き返す。人々敵

既に攻め入りて入るべき方なし。京洲の丸より入らばやと雖も、伊豆少しもひるまず、初め出でたる所より入りなんこそゆゑしかるべけれど、鎗を提げて敵に向ふ。伊豆に従ふ者四十五人下部は皆逃げ散りて伊豆が若黨一人平野藤兵衛と云ふ足輕一人残り留まれり。伊豆むら立つたる敵を物ともせず、蜘蛛手十文字に追つ立て、さんざんに戦ひけるに、敵尙烈しく進み來りしかば、尾關甚右衛門・銚子五郎兵衛二人、土橋の上にて返し合はせ、大音あげて存する子細ありて討死するよ、寄つて首をとれとて面もふらず切死をぞしたりける。其のひまに赤尾そこなつと行き過ぎて城際に至る。門の外の柵に簀戸あり、赤尾簀戸を閉めよといへば、平野靜に簀戸を閉めたり。門を開けよといひしかば、少齋法師武者にて門を固めて在りしが、矢倉に上り、味方とは知りたれど、敵付け入りすべし。人は軽く城は重し、爰こそ死すべき處なれ。はなやかに討死せられよ。是れより見物せんといふ。赤尾石によりかゝりて息をつき、九尺計なる鎗を下に置きて、脚半のひもを結び直す。敵簀戸を破りて押し寄す處を、八十餘人の兵ども爰を限りと面もふらず突きかゝる。赤尾しづかに緒を締め終りてつと立ち上り、赤尾伊豆とは知らずやと名乗りて、亂れ入る敵を念なく突き退け追ひ出だす。少齋矢倉より鐵砲を嚴しく打ち出ださせければ、立花の勢も餘り

に手いたう防がれて引き退く。かくて少齋すしょう跪ひざまづいて鎗の穂先ほさきを門のくゞり戸に當てて、一人づつ静しづかに入りてけり。かくするは無禮むれいに候へども、門を守る法なりといふ。皆入り終はりて伊豆と平野と二人門外しんがらに殿しんがらして残りけるが、平野は赤尾にまづ入れよといふ。赤尾は平野に汝先づ入れよとて終に赤尾おくれて入りけるといへり。」

赤尾伊豆は美作が子なり。信長に滅ぼされて、

〔信長江州小谷せがひの城を攻め浅井長政勢盡きて既に自害じがいせんとする時、不破河内ふはかわちを以て縁者のよしみ降参かろまあらば疎意そいあらじと云はせらるゝに、長政降参すべき志に非るを、近習きんじゆの志どもも別の子細も候ふまじ。城を出でて運うんを開かれ候へといふ。されば父下野守も共に疎意なくば降参せんとて城を出づるを、信長見て長政何の面目めんぼく有つて今更の降参ぞと高聲たかこゑに呼ばせられしかば、長政怒りて赤尾美作が宅に入りて自殺じまつせり。浅井石見・赤尾美作いざ切死せんとてかけ入りけるを、多兵押し隔て生け取りて信長の前に出だす。信長汝等長政をすゝめ朝倉あさくらにくみして吾れを敵となすなれる果を見よと罵ののしらるゝに、浅井居直かたむねり事新しき事を承り候ふもの哉。義景を別事べつじなく立て置かんとせいもんの誓文、其の血もいまだかわかさるゝに越前えちぜんに軍を出だし、是れによりて長政義の當たる處

にて義景よしかげに與したり。今日城を出づる疎意あらじといつはりたる詞ことば、押しばかり、只自害と一すぢに決したりしに、若し天運てんうんによりて家を立つるならば、信長を斯くのごとくからめんと思ひしにかく成りたり、義を知らず恥を知らざるは信長こそ、人面獸心にんめんじゆうしんなれといへば、信長彌い怒りて汝詞にも似ず、生けざられたるはいかにと罵らるゝに、年老いぬれば力に及ばず。昔より士の生捕はととなる事恥はぢにあらず。勇武を以て敵を討ち得ず。いつはりたばかりて人の國くにを亡ほろぼすこそ恥なれ。見られよ必ず下人に首を切らるべしと罵り返せば、信長杖つゑを以てうたれしに、石見うち笑ひ、からめたる者にかゝるはからひ、あつばれよき大將の禮儀れいぎかな、いかほごもうてや犬坊いぬばと罵りけるが、石見も美作も終に殺されけり。」

伊豆幼かりしが、僧そうと成りて多賀たがに匿居かくしに、十二歳の時多賀明神たがやろしんの鳥居のほとりにて遊びける處を、いづれの家の士にや十二人打ち連れて通りしに行きあたる。士怒つて小僧こそうめ無禮むれいなりとて拳こぶしにて頭をうつ。伊豆飛びかかり其の士の刀やいばを抜ぬいて只一打に切りはなし、つと走りぬけて赤尾にかくれて居ゐたりしが、後ち京極きやうごくに仕へけり。

三三二 十時傳右衛門山田三右衛門死骸返し之事

立花宗茂使を城中じやうちゆうにたて、けふ味方討死の中に十時傳右衛門と申す者あり。とりわけて不便ふびんに存たもずるなり。骸かばねを返し給はり候へとて物具の色を書きて云ひ送られしかば、やがて返しぬ。又城中より山田三右衛門が首を返し給れと望まれしかば、兜かぶとを添へて送られけり。此れを大津の死骸返しとて勇士死後のほまれとしたり。

三三三 高次大津の城を出でられし事

高次大津の城を守りて固かりければ、高野の木食上人を以て和平を執り行ふ。高次更に同心なかりしに、さしもの長臣黒田伊豫守よそでに心を通じければ、力なく和平して城を出で、京都大佛の養源院やうげんいんに立ち寄り、それより高野に赴く。關ヶ原せきがはらに三成さんせい亡びて後、東照宮高次を召しけるに、今度諸將皆大功有りし人々なるに、吾れ城一ツ守りとげざりし身の立ちまじらん事口惜しとて出でられず。又使を以て御物語ありたき事あり。尙出でられずば、我れ行かん。年老いたる身を勞せられんよりは

若役わかしやくにと仰せ出だされしかば、高次辭しがたくて出でられけり。東照宮此の度城を攻めける敵兵大垣に到る程なれば、關ヶ原の軍危あやふかるべきに、九州の大軍を數日隔てられし故、わが軍の援たすけとなりし事大津城中の軍兵残りなく關ヶ原に來りしよりも遙はるかにまされり。敵より乞ひたる和平なれば恥にあらずと仰せらる。大津にての事なれば近江おんみにて四十萬石賜ふべしとなりしに、高次聞きて、かく賞せさせ給はば關ヶ原にて大功の人には百萬石を賜はるべきか、おもひもよらずと固辭申されけり。

〔一説關ヶ原の軍敗れて、東照宮大津の城に入らせ給ふ。山岡道阿彌やまおかみちあやみ供奉しけるが、京極宰相よく持ちこたへ候ふに、今少しの事にて本意を遂げずと申しければ、御答なく奥平が長篠ながしのにて武田を防ぎしに、戸障子とじやうしに鐵砲の玉の痕鹿の子かの子をゆひたるが如く、土も落ち板もぬけたるをむしろはり疊たかみを立てて持ちこたへたりとぞ仰せける。又高次の使者多賀孫右衛門大阪に來りけるに、御前に召して、京口の旗を早くしぼりし故、敵攻め入りたると聞し召すよし仰せありしかば、口惜しく存じ候ふよしひて涙を流しけり。さて井伊・本多に向ひ、下部の申す木履きりに雪のつきたる如くなる御出馬しゆつばにやぶれ、あんごの如き城に高次なればこそ數日敵をば支へ候へといひければ、戯たむれながら理ことわりなりとぞ答へられしといへり。〕

三三四 立花家足輕鐵砲の用意附細川家口藥入

吉田大藏猿頭の事

立花宗茂大津の城攻に足輕に繩だすきかけさせ、其の繩目に藥の早合をはさませて、箭をつがふよりも早く鐵砲を打たせられけり。

〔又細川家の鐵砲は口藥入を革にして、今世のはながみの幣の如く造りて用ゐる。事の急なる時指にてひねり入れて利あり。又加賀の吉田大藏とて世に聞えし手だれの射手あり。常に矢を取りて俄に出づる時、十筋も持ちたき事のあるに、腰にさせば走るに落つるとて、革にて角袋造りて緒を付け腰にさげ、それに入れて腰にさしけり。其の名を猿頭と名付けたり。〕

三三五 伏見落城の事附鳥居忠政雜賀孫市を饗されし事

會津に向はせ給ふ時、伏見の城には本丸に鳥居彦右衛門元忠、二の丸には松平主殿頭家忠・松平五左衛門、松の丸には内藤彌次右衛門家長をおかせ給ひ、六月十六日東照宮打つ立ち給ひ、十七日伏見

の城にて鳥居を召し、今度士卒少くして残り止まる事を仰せありしに、元忠、臣が存ずる所會津は強敵なり。一人なり共召し具せられて然るべし。伏見には臣一人にて事足り候ふ。世上無事ならずして變の出で來ん時は、近國に援ふべき味方も候はず。今の十倍の軍兵を残し置かれたりとも防ぐべきやうは候はずと申しけるに、東照宮黙しておはししが、やや在りて駿州宮ヶ崎にて十一に成りし時、彦右衛門は十三にて初めて出でたりしよ、年久しくもなりぬとて、御物語に夜痛く深ければ、元忠會津の御留守世に變なく候ひなんには、復御目見も仕りなん、もし事あらば今夜ぞ永き御別れに候ふと申して座を立ち兼ねたりしに、東照宮御袖をもて落つる泪をおそひてぞおはしましたしける。かくて石田兵を起ししかば伏見を攻むべきやと評定しけるに、増田長盛城固うしてしかも内府の内に名高きものごもあれば、たやすく落つべからず。先づばかりて見んとて山川半平を使にしけり。元忠對面すれば増田が申し候ふには、今度輝元・秀家・景勝徳川殿と弓箭をとり、九州中國の諸大名皆同心せられ候ふ。かゝれば此の城を請け取り申すべし。長盛久しく徳川殿の御したしみ深く候へば、此の事然るべしとは存じ候はれども、思慮の及ぶべきにあらず。伏見の城は太閤きづかれ候うて今徳川殿姑くあづかりておはしませば、徳川殿の城と申すべきにあらず。とく城を出でて内府に忠を致さるゝ道あらん

と存ずるよし言ひ送りければ、元忠聞きて、過ぎし頃内府會津に向ひし時かたく守り候へと申して候ふに、敵に渡し候ふ事は存じもよらず、増田殿は内府にしたしみ有るゆゑ、かゝる事を述べらるゝ旨心得られず候ふ。若しおめおめ城を渡さんには同じくば城を枕にせよとの使たまはり候はゞ恭しとも申すべし。とく城を出てよとは武將の詞にあるべき事とも存ぜず。とく寄せられよ討死せんと答へしをかへりて長盛に告ぐる。かたへに渡邊勘兵衛在りしがつくづく聞きて感じ入りて、顔に涙を流しければ、長盛も我れもなしき人を殺さん事のなげかしきとて共に涙を流しけるとぞ。かくて三萬餘の寄手四方より攻めけるに少しもひるまず。十日餘防ぎけるに、甲賀の者内通して七月晦日の夜、松の丸に火をかけしかば、寄手力を得て攻め入りたり。内藤は精兵の手きゝにて、さし詰め引き詰め射ける矢に死人数をしらず。終に内藤父子も討死し、主殿頭五左衛門を始として残なく切死にぞしたりける。元忠本丸に在りて門を開かせ、門際より六七間しさりて、士卒三百餘自刃を抜きそるへ、しづまりかへりて待ちかけたり。寄手しばし攻め入り兼ねてためらひけるに、元忠大音あげ、一人にても敵を討つて死するぞ士の志なる。吾れ三方ヶ原にて、足に手負ひ行歩心にまかせざれども、逃げんとせばこそ足をも頼まめ、いざ最後の軍せよと下知する聲を聞きて、一同に切つて出で面もふらず戦ひ

て、一人も残らず討死しけり。元忠戦ひ疲れて玄關に腰をかけ息づく處に、雜賀孫市重次死骸を踏み越えてすゝみよれば、吾れは鳥居彦右衛門よ、首取つて高名にせよとて、物具脱いて腹を切りたりしかば、雜賀其の首を取りたりけり。本丸に二ツの門ありけるを、大手の外はみな堅く鎖してければ、一人も逃げちる者なく討死しけるとぞ。後ち元忠の首を大坂京橋に梟せしを、京の商佐野四郎右衛門と云ふ者鳥居にしたしみ給ひしが、かゝる忠義の人の首を惡逆の罪人と同じくさらす事やあるとて、夜深けて盗み取り、智恩院に葬りて、一字を建て龍見院と名付けしかば、石田圃かば必定刑罰すべしせんなき事なりと云ひける者あり。佐野吾れ久しく恩を受けし身なれば、自刃をふむまでこそなからめ。是れ程の事は人の義なり。義なきは禽獸なり。人生れて死せざる事なし。刑罰にあはん事ちつともなしからずとぞいひける。

〔雜賀孫市、後ち水戸中納言家に仕へたりしが、ある時中たちを以て鳥居忠政のもとに云ひ送りけるは、重次むかし伏見の城にて、元忠の御最期に乗りあひ、其の時の御物具吾が家に取り傳へ候ひぬ。先考の御形見にて候ふ。御覽せん爲返し参らせたくこそ候へといふ。忠政悦んでなき父が形見是れに過ぐべからず、一目見ばやと答ふ。重次自ら携へてゆき向ふ。忠政門外に出で迎へ重次

を奥の間に招じ、亡父に再び對面の心地すとて涙を流し、甲冑・太刀・刀おし板の上にかき居ゑて是れを拜し、さて今日重次を饗せし有様誠に美盡くせり。其の翌日重次の方に使を立て、昨日の見參を謝す、又重次の御志によりて、父が最後に帶せし物具再び見候ふ事、返す返すも悦び入り存じ候ひぬ。忠政が家に傳へし父が形見に見るべき物もすくなからず、見苦しうは候へども、此の物具重次の家にとどめて、御武名を子孫に傳へられん事、弓箭の道にはよき御遺戒にもや候ふべきとて、甲冑・太刀・かたなことごとく返し遣はす。それより年毎に、冬綿厚く入れたる衣五領使者にもたせて、はるばると水戸に贈り遣はし音信を通ずる事、忠政が一期の程終におこたらず。水戸公此の由聞し召し大に感じ給ひ、鳥居が使者の來るべき前、道梁を修理せさせ、重次に客儲すべき魚鳥やうの物賜ひけるとぞ。」

三二六 村上三右衛門大島源二武者振の事

筑前中納言秀詮、先陣の士大將平岡石見・松野主馬各々祿一萬石なり。伏見の城攻めに、主馬が仕寄の竹把を城中より火箭を射かけ焼きたりしかば、其の處を退きて竹把を付けんと雖も村上三右衛門

聞き入れず。焼跡に竹把を付けずしてはあるべからずとて、主馬と相謀りて竹把を付け直し、竹把の上にかへ土をぬるべき用意しけり。主馬、外に出づる事を嫌ふ。人々は士たりとも内にて土をこねられよ。又土をぬりたらん者には、中間下人なりとも士とせんと下知しければ、下部八人出でて土をぬりたりしかば、其の後竹把を焼かさざりきとなり。旗本より大島源二といふ者使に來り、仕寄場より堀端まで間敷幾許かあると問ふに、村上間を打つては見候はず、凡そ十二間許もあらんと答ふ。大島とてもの事に間を打たんといへば、城近く箭玉の飛び來る所に強みを出だして何の爲ぞといふ。源二殿に問はれて間をうたずといはれんは快からずといひしかば、村上旗本の使に先陣の間をうたせる事は有るまじとて、村上靜に出でて、竹を間竿に切り一間づつうつ。源二先へ廻り、しづかに一ツ二ツとさし終はれば十一間半也。大島・村上進退のふるまひ見物なりきと云ひあへりしに、源二は廿二歳伏見落城の日討死しけるとぞ。

三二七 三刀屋監物田邊城に籠る事

三刀谷監物孝和は其の先祖承久の亂に軍功有りて、出雲の三刀谷の郷を賜はりけるによりて氏とし

たり。其の末雲州尼子の旗下に屬しけり。孝和が父彈正左衛門久扶毛利家に奉公しけるが後仕を止め
て終はりぬ。孝和は吉田兼治に便りて吉田に居たりしを、關ヶ原の時安國寺、北村五郎右衛門を便に
して招きけれども聞き入れず。細川幽齋の丹後田邊の城に行きて力を合はせんとす。從者ども奥州は
大國なり、景勝は勇將なり、いかでたやすく破るべき。西國一同に石田に與みし候ひぬ。徳川家の危
き事近きに候ふに何とて安國寺が招をいなみ給ふぞと云ひけるに、孝和聞きて、石田島津に叛かせ、
内府を引き付け軍を起させ、あとにて京・大坂を取らしめん謀こそ然るべけれ。徳川家の領國其の便
よき會津に手始をしたるは無謀なり。三成必定勝つべからずとて、吉田家は幽齋と縁者たりしかば田
邊に行く。大敵にかこまれしかども持ちこたへしは、偏に孝和が智勇たくましかりける故なり。

三二八 田邊城救命に依つて和平の事附細川幽齋

古今集傳授の事

大坂の軍兵一萬七千を以て田邊の城を破る。細川忠興は奥州に赴き、父幽齋城にあり。三刀谷孝和
大剛の人にて、度々切つて出でて防ぎ戦ふ。幽齋和歌に長じたる人なり。古今集の秘訣、爲家卿のし

るされしを殊に秘藏せられしが、兵火の爲に焚げん事を、桂光院知仁親王慮らせ給ひ、使を以てかの
古今集源氏物語を禁裏にまゐらせよとなり。又烏丸大納言光宣卿勅命を奉りて、城に赴き給ふとも
いへり、則ち其の書を奉るとて、

いにしへも今もかはらぬ世の中にこの種の種を残す言の葉
又烏丸光廣卿のもとへ封じたる歌書をやるとて、

もしほ草かきあつめたる跡とめてむかしに返せ和歌の浦浪
斯かる處に前田德善院を禁裏に召し田邊の城攻利平の事を勅命ありければ、寄手かこみを解きて幽齋
城を出でられけり。光廣卿幽齋の許より送られし書いまだ封をひらき給はざりけるが、かへし、
あけて見ぬかひもありけり玉手箱ふたたびかへす浦島の波

幽齋かへしに、

浦島やひかりをそへて玉手箱あけてだに見ずかへす波かな

〔一〕説藤原公國卿早世ありて其の子實條卿幼かりしかば、和歌の口傳を幽齋に傳へられけり。後に
幽齋實條卿を田邊の城に迎へとりて養育し、悉く授けられしに、古今集の説は未だ傳へられざる

中に朝鮮征伐の起りしかば、弓矢取る身は討死のほごばかりがたしとて、古今傳授の事書きたる書の箱を烏丸大納言光廣卿へ贈られ、預けまゐらす間、朝鮮に渡り若し討死せば、實條卿へ渡し給はり候へとて添へられし歌、

人の國ひくや八島も治まりてふたたびかへせ和歌の浦浪
もしほ草かき集めたる跡とめてむかしにかへせ和歌の浦波

光廣卿のかへしに、

萬代をちかひし龜の鏡しれいかでかあけんうら島がはこ

其の後秀吉遺言して、豊後白杵を、幽齋の男忠興にかへあたへられしかば、光廣卿より宮をかへすとして、

あけて見ぬかひもありけり玉手箱ふたたびかへる浦島の波

幽齋田邊の城を守られし時、勅命により三條大納言實條卿へ附し傳へられしに、一首の歌あり。
いにしへも今もかはらぬ世の中に心のたれを殘すことのは

三二九 古田助左衛門思慮の事

古田助左衛門は古田兵部少輔重勝に仕へて祿千石を受く。景勝を征伐の時、重勝伊勢の松坂の城に助左衛門を置かれけり。三成兵を起しし時、大坂の重勝の屋敷をとりかこみ、松坂の城渡さずば重勝の北の方を殺害すべしといひ送りしに、助左衛門此の城は殿の仰なくて人に渡さん事存じもよらず、若しさあらずば、北の方害にあひ給はんとや、誠にいたましき事なれごもいかにせん。妻子の死するが悲しきとて、城を敵に渡しきと、殿を人譏り申すべし。運盡きたらば死を潔くする事、弓箭とる身の習なり。人々は大坂の屋敷にていかにも成り候へ。敵やがて城に寄せ來らば散々に軍して討死し、冥途にて對面せんと大坂の屋敷に云ひ送りけり。かゝる處に重勝も東國より歸り來り、松坂にて籠る。此の時富田信濃守信高阿濃津を守られしが、加勢を重勝に乞ふ。兵を分かちやるべき體のなかりければ、助左衛門阿濃津へ加勢あらん事尤も望む所なり。敵阿濃津を攻めて其の後ち爰に攻め來らん、若し阿濃津落ちざる前に東方の味方來らば、敵敗北せん。其の時は古田が士は敵の旗をだに見ず、富田が力にて松坂を持ちたりなき、人に笑はれ候ふべし。又加勢あらば隣國相援ふの義に叶ひ、

又阿濃津にて敵を防ぎしは、古田が加勢の故なり。世に申すべしと勤めて、五百人の軍兵を阿濃津にやりけり。やがて重勝の領地の百姓の中に大家なる者二十人を士として城にこもらせ、後に百石の地をあたふべしと約しけり。是れ人質の心にて、百姓を騒がせじとの術なり。關ヶ原の亂治まりて後ち重勝約に背かんとせられしかば、助左衛門信を失ふは君の道にあらず候ふ。かゝる言葉は金石よりも堅くすべき事なり。是れより後又欺かんとて、百姓も何事も聞き入れ候はじ。信なくば立たずと申は事の候ふ。臣が祿地を分かちあたふべしといひければ、重勝約の如くせられけり。

卷の十五

三三〇 伊勢國阿濃津城軍の事 附佐治縫殿が事

毛利秀元・吉川廣家・富田信高の阿濃津の城を攻むる時、城兵城の乾の隅に有りける伽藍を焼き拂ふ所に、俄に風かはりて、焔を城に吹きかゝる。奇手是れに乗じていざ打ち破らんとて、兵備前守隆家先がけして攻め入りけるを、分部左京亮政壽城中に加勢有りしが、切つて出で兵戸と戦ひ互に痛手負ひたり。信高本丸の大手にすゝみ出で鎗を合はせて相戦ふ。かゝる處に、容貌美しき武者緋をどしの物具中二段黒革にてをぎしたるを著、鎗を提げ來り富田が矢面に立ちふさがり支へ戦ひたり。秀元の清左衛門といふ者を討かくて富田門に入れるとき、かの武者を見れば殿は恙なくわたらせ給ふか。討死と聞きて形は女なりとも男におとるべきかとして、出で候ひしにといふを聞けば信高の北の方なり。其の後高野の女也。信高驚きて且つ悦び打ち連れて城に入り、今日の有様たぐひまれなりと云ひあへり。其の後高野の木食上人和平を取り計ひ、信高城を出でけるに、程なく東照宮伊豫の宇和島にて十萬石下し賜はり

けり。

〔佐治縫殿は近江甲賀郡伊佐野村の人にて、父を左京といふ。秀吉の爲に城を落され流落して、縫殿九つの際富田信高に仕へ、十四にて四百石あたへられけり。津の城に籠る時十六歳、名を善大夫と云ひけり。八月廿四日京口清嵐寺の三の丸を焼き拂ひ、敵攻め入りけるを防ぎ戦ひて、信高本丸に引き取りたれども、分部左京亮もいまだ來らず、家老物主も來らざれば、信高天守に上り自害せんとて物具を脱ぎ、佐治に汝介錯せよと下知せられしをおし留めたる處に、分部・富田五郎右衛門・同主殿・上田吉之允も二の丸に引き退く體見えければ、信高上帯しめ直し、佐治を天守より使にやられけり。大手の門・矢倉・廣間の前・屏重門の左にて、毛利秀元の土紫ほろかけたると、其の外五六人と、上田吉之允鎗にて渡り合ひ居たる處に行き懸かり、詞をかけて敵を追つたつる。ほろかけたる敵大手の門くゞりへ引き退くを追つめ、兩人にて討ち取りたるを信高天守より見られけり。後城にこもられし時著られし甲冑と、白河原毛なる馬に小鞍といへる作の鞍鎧を添へて佐治に與へらる。其のあけの年佐治富田の家を出て、筑前中納言秀隆に仕へ、其の家滅びて黒田の家に仕へしを、富田禁錮せられしが、大坂陣に後藤にまねかれて士三十騎の將

となり、五月六日道明寺の軍に寄手の物色を見んとて谷川すぢに出づる處に、東より來る物見武者に行き逢ひ、即ち討ち取りて兜首を得たり。是れ後藤が手の一番首なり。後藤が旗本敗北し、敵におし隔てられ丸山に北げ、細腰にて返し合はせ、敵一人討ち取り兜に刀を添へ分捕しければ、兜をも奪てけり。敵慕ひ來りければ大坂へ引き取り、事叶ふまじ討死せんとてかけ出だししを、伴野次左衛門・佐竹安大夫・本多小右衛門もつゞきて鎗を合はせんとするに、深田にて敵かゝり兼ねたり。伴野いざ是れまでよとて佐治をとらへて引き返し、道明寺と平野の間にて眞田に行きあひて遁れ得たり。其の後流落し仕を求め貧しくして、江戸柳原の町家のうち少しばかりの所をかりて、妻と二人ありけるが京都に赴く。妻殊にあはれなる體なりしを、近隣の者ども心を付けていたはり、日を送りしに、いかなる事にて京にゆかれしぞと問ふ。池田の御家新太郎少將の縁千石賜はらんとの事なれども、二千石ならば奉公すべしとて、其のために京へ行きたりと答ふるを聞いて、千石ばくと異名してあざけりしが、程なく從者十人ばかり引き具し、馬に乗りてきらびやかなる士來て吾れば佐治なりとて、妻を迎へ近所の者にそれぞれに土産し、妻を心付けたる禮を述べて、池田の家に仕ふとて去りけり。

三三一 長東大藏大輔降参の事

關ヶ原の軍敗れしかば、長東大藏大輔正家江州水口の城に引きこもりしを、國清公船戸帶刀を使として降参を勧めらる。船戸是れは物なれたる人然るべしと辭し申しけれども、汝とく行き向へよと仰せられしかば、船戸方三四寸ばかりの小さき鐵の板を造らせ、ふところに入れて水口に行き、長東に逃ひ降参あらば士卒も別の事候ふまじ。此の旨よく申せと申すなりといふに、長東阿濃津の城攻して、關ヶ原にさせる軍もせて口惜しく候ふ。さらば此の城を枕にせんと手の者ども存する處なり。然るに降参せんは恥辱にて候ふといへば、船戸長東がかたへの士を呼びて懐より鐵の板取り出だし燒きて給はり候へ。三左衛門尉が詞今かく申す所、偽なき印に、鐵火をとりて見せ申さんとて思ひ切つたる體、げにもいつはりならざりしかば長東感じて、たとへ誑られていかにならんも力なし。汝がしわざたぐひなきによりて降参せんずるにて候ふ。是れは見苦しき物に候へどまゐらすとて、貞宗の脇指をあたへけり。船戸尙座を立たざりしかば、長東小性をよんで硯取り出だし、降参すべきよし書きて船戸にあたへしかば、船戸歸りぬ。長東城を出でければ、警固の兵を入れられけり。

三三二 渡邊才兵衛武功の事

佐和山の城をかこむ時、堀尾信濃守通晴渡邊喜兵衛を呼んで凡そ城を攻むるに敵の虛實・土地の要害具に知らでは叶ふまじ。いかにもして生捕をせばや、汝事よくせんやと言はれければ、渡邊首を取るだに易からず候ふ。まして生捕せん事叶ひがたしと申しもはてぬに、渡邊が弟才兵衛進み出で、殿の仰に何とてさはの給ひ候ふぞ、喜兵衛年老いたり。軍令を司るには然るべし。かゝる力業は才兵衛に仰せ付けられよといへば、喜兵衛思慮なき事な申しそ無禮なりといへば、通晴大志壯力人の及びがたき事なまなし得べき眼ざしよと才兵衛を稱せられしかば、才兵衛座を立ちけり。兄の詞は禮儀なり、汝が詞は血氣なりと人々戒めけれども、吾れ思ふ仔細あればこそとて、夜の更くるを待ちて從者一人打ち連れ、ひそかに城際にしのびゆく。茂りたる桑の木の下にさゝやく者あり。近くなりてそれのがさじと二人鎗をとりてかゝるを、才兵衛一人は突き伏せ一人は追ひちらし、首を從者にもたせ城に忍び入りて生きて歸る事萬に一ツなり。此の有様を兄に語れと云ひて、堀に添ひて行く所に、夜廻りするとおぼしくて打ち過ぐる。其の跡についてゆけば、ふり顧みて名乗れとて弓に箭をつがふ。才

兵衛小聲に敵の忍び後より来るぞ。爰に待ちて打たんといひつつあゆみより一丈計になりける時、鎗を取りのべて敵の弓弦を突き切りて、其の儘鎗を取り直し、諸膝ないで打ち伏せ上に乗りかかり、汝よく聞けよ、吾れ殺さんとはあらず。しかじかの子細有りて忍び来りしに、行きあひたるは天の助けなり。汝死なんとならば、吾れ汝を刺し殺して自害せん。それは益なし。吾れに随ひ来れよといふ。彼の士怒つて既に斯くなりし上は命生きんと思はんやとて疾く刺し殺されよと云ふ。才兵衛聞きて二人空しく死なんより生きて功あらんこそよけれ。軍神も照覽あれ吾れ偽なきよといへば、さらばいかにもせよと云ふ。才兵衛悦んで引き起し物具に付きたる塵を打ち拂ひければ、彼の士あはれ汝は大剛の人にて、しかも辯舌明かなり。からめられぬれど恥とは思はず。名は松田大介と云ふものなりと云へば、才兵衛松田を先にたて、始め首を取りたる所に行けば、従者喜兵衛殿も追つついて出て給ふが歸られずといふ。才兵衛いかにし給へるにか、松田は逃ぐべき人にあられども、汝付きそひ居よと云ひて城の方に行く所に、喜兵衛歸りたるに逢ひ生捕をしてこそ候へと云ふ。城門は固く閉ぢたり。兄弟打ちつれ歸りてかくと申す。通情ゆしき事なもしたるよとて一同にとよみあへり。生捕はいかにせんと申すを、東照宮心に任せよと仰あり。才兵衛松田に申しし詞しかじかなり、松田に腹きらせ

られなば、臣先づ死罪になり候ふべしといへば、勇あり又なさけ有りとして松田もゆるされけり。

三三三 石田三成生け捕らるゝ事

田中兵部大輔吉政石田を生捕にせられしが、いと懇に會釋して數十萬の軍兵をひきぬられし事、智謀のゆゆしき事と申すべし。軍の勝敗は天の命に候へば力に及びがたしと、禮義正しかりければ三成打ちわらひ、

「三成此の時坐上の楹によりかゝり、もとより田兵と呼びしが如く、此の時も田兵と云ひて常に替はらざりきとなり。」

秀頼公の御爲に害を除き、太閤の恩に報い奉らんと思ひしに、運盡きかくなりし事何をか悔むべき、是れば太閤より賜はりし切刀正宗の脇ざしなり。かたみにまゐらすよとて興へけり。

「馳走の士を付けてもてなしたれども、片時も早く死なんとて食せず。馳走の士いかで兵部がはからひに及ぶべき、よくいたはりて最後の御用意候へかといひければ、さらば此の頃腹中のあしきに糞糞氷をたまへと云ひしかば、其の設してすゝめければ快く食して打ち伏して斬かきたり。」

田中石田を引き具して大津に参りければ、東照宮本多正純に石田を守護すべきよし仰せ出たされけり。正純石田に向ひて秀頼公年若く事の是非をしるしめさじ。唯太平を致す道こそ有るべきに、よしなき軍おこしてかく恥辱にも及ばれしぞかすと云ひしに、三成吾れ土民より國を賜ひたる恩たとへんやうなし、世の様を見るに、徳川殿を打ち亡ぼさずは終に豊臣家のためによからじと思ひて、秀家・景勝を始めとして同心なかりしを、しひて勤めて遂に此の軍をば起したりき。戦ひに臨んで二心ある輩を切せし故勝つべき軍に打ちまけぬこそ口惜しけれ。二心ある人だになくば汝たちを始め、かくの如くからめなんに志を失ひたるよ。運盡きぬれば九郎判官も衣川にて空しくなりたりき。吾れ打ちまけしは天命なりといふ。正純、智將は人情を計り時勢を知るところこそ申せ。諸將の同心せざるも知らず、輕々しうも軍を起されしものかな。軍敗れて自害もせで、からめられしはいかにといふに、三成忿つて汝は武略は露も知らざりき。腹切つて人手にかゝらじとするは業武者の事よ。頼朝公土肥の杉山にて朽木の洞に身をひそめし心はよも知らじ。大庭に擲められなば汝に嘲らるべし。大將の道は語るとも汝が耳には入らじ。今は是れまでなりとて物もいはず。

〔東照宮の御前へ三成を召し出だして、いかに武將もかゝる事むかしより有るためとなり。恥にあ

らずと仰せられしかば、三成けしき打ちとけて、唯天運のしからしむる處にて候ふ。とうとう首をはれられ候へと申す。東照宮三成はさすがに大將の器量なりけるよ。平宗盛には大に異なりと仰有りけるともいへり。又一説、中納言秀詮石田が體を見ればやとて座を立たれしに、細川忠興何てふ益なき事なりといへども聞き入れず、三成秀詮を見てわれ汝が二心あるを知らざりしは愚なり。されども約にたがひ義をすてて人を欺き、裏切したるは武將の恥辱、末の世までも語り傳へて笑ふべしと云ひけるに、秀詮詞なかりけり。又三成大津にいたる時、御本陣の門外に壘をしき、其の上に坐したりしに、諸將打ち過ぎけるが、福島正則無益の亂を起して其の有様なりといはれしに、石田おのれを生けどりて縛らざりしは天運なりと云ひければ、正則詞なく過ぎられぬ。黒田長政通られしに、馬より下りて不幸にてかくなり給ひぬ、是れをとて著られし羽織をぬいて著せられたりといへり。

石田を始め小西・安國寺生捕られて、三人の肌にも木綿のやぶれたるものを著たるを、東照宮聞し召し、石田は日本の政務を取りたる者なり。小西も宇土の城主なり。安國寺またいやしむべき者にあらず。軍敗れて身の置き處なき姿となるも、大將の盛衰は古今に珍らしからず。命をみだりに棄てざるは將

の心とする所、和漢其のためし多し。更に恥辱にあらず。其のまゝ京中をわたしなば、將たる者に恥をあたふる事吾が恥なるべしと仰有りて、三人に小袖を賜はりけり。石田に見すればこれはたがあたへたるぞと問ふ。江戸の上様よりといへば、それは誰が事ぞといふ。徳川殿と答ふれば、三成何徳川殿を尊ぶべきとて一言の禮に及ばず、あざ笑ひて居たりけり。

〔小西は敵對の吾れにこれまでのいたはり心に恥ぢたりとて涙を落しけり。安國寺はとかくいばで赤面し俯き居たりけりとぞ。三成を誅する時車に載せて六條河原に出だすに、石田顔色平生の如くなりきとかや。又石田治部が天下を取りたると云ひけるを聞きて打ち笑ひ、われ大軍を率ゐて天下わけ目の軍しけることは、天地やぶれざる間はかくれあらじ、ちつとも心にはづる事なきよ、はやさずしてもありなんといひけるとぞ。〕

三三四 小幡助六郎忠死の事

小幡助六郎信世は上野介信繁が三男にて上野の人なり。十五歳にて大阪に赴き跡家の體を見るに、石田は大閻無二の寵臣なれば仕へけり。後ち疎二千石を興へけり。關ヶ原にて三成敗北の時、おし隔

てられ三成に従はず。そこを切りぬけて三成が行方を尋れ、江州石山に來りしを、郷民からめとりて大津に參る。百姓をば賞せられて金二十枚を賜はりぬ。さて信世を召し出ださせ石田が行へなとせ給ふ。信世承り三成が士小幡助六と申す者にて候ふ。主の在所よく知りて候ふ。然れども年頃恩を請けたる身の今日の難をのがれん爲に主の在所を申す不義や候ふ、たとへ骨をひしがるともかたく申すまじきにて候ふ、試みに拷問あれと申し切つてけり。東照宮聞し召し忠義の士なり。三成が行方ゆめゆめ知りたるにあらず。しらざる故にこそ落ち行きてからめられたれ。士ほどの者を拷問におよぶべからず。將たる人は忠臣義士に不憫をこそ加へめ。とく繩をとけと仰ありて則ち赦させ給ひけり。信世近きあたりの寺に行き其の由こまごまと語り、おもはざる外に赦を蒙りたれども、亦恥にあはんも計り難し。屍をかかくし給はれとて自害しけるを、大津に申し上げければ殊の外になしませ給ひけり。

三三五 河村權七郎が事

關ヶ原の亂の時、加藤嘉明の北の方大阪に在りしかば、河村權七郎を伊豫の松前より大坂にやりけるに忍びて屋敷に至り北の方に相見え、松前より長臣等がかはりとして參り候ふ。若し奪ひ取らんとせん

とも、臣かくてあらんほどは、危あやふくな思し召され候ひそとて、屋敷の隅すみに井せいのう樓ろうをあげ、柵さくの木きゆひ、敵にむかへるが如し。かなはぬ時は自害じがいをすゝめ、臣も御供申すべしと云ひけるに、細川忠真ほそがわのちかたけの北の方自害の後人質ひとぢぢを奪ひ取る事止みたりけり。河村に二百石の祿ろくを増し與へられしに、後河村いひけるは、大坂川口おほさかがわぐちの守固く中々通るべき様なきを、尼ヶ崎あまがさきの漁夫いさなをかたらひ、船に乗り網の中に身をひそめ、敵の中に入りて守りしは、必死ひつしを思ひ定めたる事なり。關ヶ原の軍に首取つたる者に同じからず。然るに恩賞おんしょうノ薄うすき事、明らかならぬ殿なりとて出奔しゅつぽんしければ、嘉明かみ怒りて探し出だして誅せばやと言はれしかば、ある山中に隠れ居たり。大坂の亂らん起りし時、嘉明江戸に残しと定められ、不慮ふりよの事あらば取りまきて攻め殺さんといひあへり。其の比夜更けて河村嘉明の屋敷の門をたゞき、青木あおき佐右衛門を呼び出だす。青木あやしみ立ち出で見るに河村なり。こはそもいかなる事ぞといふ。河村事あたらしきやうなれども、君に仕つかふる者の忠を致すは常の習なひなり。然るに過ぎにし大坂の事にはこりて、殿とを嘔あせりて出奔しゅつぽんしける事、事後悔ごうかい今さら益なし。十餘年山中にかくれ居しに、しかじかの事にて、殿とも危あやふくおはしますと聞きて、夜を日に繼つぎて参りたりといへば、青木誠まことに義理ぎりの志こころざしはさる事なれども、殿とのいかり甚だしければかくと申したりともゆるされじ、とく歸られよといへば、河村臣しんたる者の職

を知られなば、河村はなご來らざるかといはるべきに、門内もんないにだに入れずとく歸れとは口をしの詞ことばよ。此の上は町屋まちやにかくれ居て殿との先途せんじゆを見んと云ひしかば、青木さらば先まづ申して見んとて、内に入り嘉明に告ぐれば、それよび入れよとて、やがて寢所しんじよに召し出だされしが、一目見るより涙なみだを流されしに、河村も涙にむせび、君臣くんしんしげし詞もなかりしが、河村おもひもよらず殿の御前ごぜんに出づる事よ。今生いまの思ひ出に候ふと申す。嘉明汝が志いはんやうもなしと悦よろこばれけり。夜明けて河村こそ來れとて下部べまでいひはやし、大軍の援たすけあるが如くいさみけり。嘉明寵愛ちゆうあいして八千石あたへられけり。程なく病死びやうじしければ、奥州おくしゆ四十萬石になられし時、河村ながらへたらんには、國政の輔佐ほさたらんとなげかれしとかや。

三三六 加藤清正の北の方大阪を忍び出でられし事

加藤清正かとうせいせいの北の方も大坂に在りしを、石田人じちにとらばやと云ふを聞きしかば、清正より付けられし竹田善兵衛家正たけのたにぜんべゑけいせい・大木土佐恒持おほきとさのちかもち謀めくを廻らし、轉法口てんぽうぐちに居ける清正の舟奉行梶原助兵衛かきはらすけべゑに山梶子やまがしの煎汁せんじゆを飲ませ、四五夜ねぶらせず疲つかれおとるへ大病人のことくなりしを、かごにのせ綿帽子わたぼうしをかぶら

せ、前後に食くかされ、門番の前にて戸をひらき、斷ことわりて屋敷にゆく事度々に及べり。後は見なれて更に咎とがめず。又川口にて蜈蚣船むごぶねを晩毎にこぎくらべをさせてけり。是れも番船見なれて、後ちはいづれは早はやき遅おそきなきいひて守まもりたりぬ。かゝる處に清正より吾れは石田に與ともすべきやうなし。いかにもして北の方を敵にわたさずして落おせよかしと云ひ來りければ、大木たくみつる事にてはあり、北の方に此の由を告げて、梶原かじはらが食くの下に北の方をおしかくし。其の上にもたれかゝりて毎らの如くかこの月をひらき門番の前を通りけり。土佐も跡より供して、若し見咎みとがめられれば北の方を刺殺さしころし切死すべしと思ひたれども、事故こじゆなければ轉法口てんぽうぐちに行きて、頼たのて蜈蚣船むごぶねに乗せこぎ出し、番船の前をつと行き過ぎて二三町にもなりければ、あれはいかにとさわざひしめく間に、鳥とりの飛ぶがごとく一里あまりもこぎのびぬ。番船ばんぶねもたばかられたるよとて銃ゆかりをあげ、追ひ付かんとせし間に行き過ぎて、遂いに肥後いごに下り着きぬ。大木・竹田は大坂に居残りて此の事洩れ聞え、打手うちて來らば思ふほご戦はんと待ち懸けしに、關ヶ原の軍破れしかば、思はざるに難がたを遁れけり。大木もと佐々成政ささなりまさに仕へ後ち清正に仕へ、才略さいりやく篤實兼備じつけんへし者なれば、清正寵愛厚かりしに、今度こんどの事によりて又二千石の祿ろくを増しあたへられしなり。

三三七 淺井噺合戰前田丹羽の將士功名の事

附松平久兵衛軍學鍛練の事

前田利長の士松平久兵衛、若き頃より兵書へいしよを読み一飯の間も懈おこらず、常に人に語りて云はく、此れ一人に對するわざにあらず。萬人を一刀に斬きるの道なりといへり。利長大聖寺の城を攻め落し引き返す時、利長の士大將山崎長門守淺井噺あきのねよりせんと云ふ。久兵衛道細ちほく左右深田ふかたなれば大軍の進退いかにあるべき。半退はんたいきたらん時長重兵を出ださば、進退共ともにかなひがたかるべし。敵は案内者あんないしやなり。必定ひつじやう方利候はじといへども、山崎聞きも入れず。既に大聖寺を攻め落し、大軍なれば敵は攻められざるをよきにして、いかでか討つて出づべき。若し軍を出ださばおし包み一人もあまさず討ち取るべしといへば、久兵衛、長重は勇將ゆうしやうなり。大聖寺の後詰ごづめに後れ、口惜しく思ひて打ち出でんに、其の鋒ほこ日比に倍せん。吾れは怠り敵其の虚まよをうたば危き事に候ふ。又誰れにもあれ、吾が城を馬の蹄ひづめに蹴けちらして過ぎ行く敵に、箭やの一筋ひとぢも射懸いけずしてかゝり居る者や候ふべき。明日の軍陣をみだされ候ふな。わが敵をおそれぬ證しやうはあす人々に知らせんものと云ひけり。其の夜物主皆張番あしのぬしみなはりばんを出だす。山

崎打ち巡り見て久兵衛が足輕は何故に味方近くに置きたるかといふ。久兵衛聞きもあへず勝敗の理をしらず敵を侮り勇にはこりて、利害にくらき身の士を下知する事こそうたてけれといへば、山崎聞きて敵を恐れてしかしたるならんと罵りしを、かたへよりせんなきあらそひよと留めけり。久兵衛いよいよ憤りて強敵にあたりて目を驚かさん物をと定めて居たりけり。

〔其の夜長重は士大将を集め、江口三郎左衛門を大将として夜がけせんとなりしに、俄に大雨にて、風烈しく夜討を止められしかば、江口風雨は夜討に好む所なりといへば、人々皆尤もと申しけるに、長重いやいや御幸塚の左右沼にて、人馬のかけ引心にまかせじ。明日敵引き取る時追つ詰めて、思ひのまゝに討ち勝つべしと云はれしとなり。〕

長重の士大将江口三郎左衛門正良惣がまへより見渡せば、敵段々に引き退く時こそよけれと兵を出し、おし行く敵を喰ひ留めんと鐵砲を打ちかくる。長重もやがて兵をすゝめらる。

〔又一説、長重鐵砲の音を聞き後れな者ごとて、馬に鎧を合はせてはせ付けられしかば、江口ふり願みて、今に初めぬ此の殿の早わざ哉と悦びけり。長重われ浅井山を取り敵の頭上より打ちすくめなば、盾をつかする事あらじと言はれしかば、江口尤も然るべしとて、あとよりつゞきたる

人を兵三百引き具し浅井山にのぼり、敵を目の下に見下して鐵砲を打ちかけければ、阪井與右衛門直吉も馳せきたる。長重いよいよ競ひかゝりて、一足も前にすゝめ、一寸も退くべからずと下知せられけり。金澤の軍をやみなき終夜の雨に、かりの陣屋もあらざれば物具皆濡れとほり、鐵砲の銃口に水入り火繩もふりけされ、左右は泥なり。多くははいだて櫓のものをなげ入れ、足だまりとしきといへり。〕

金澤の殿長九郎左衛門連龍が陣色めくを見て、江口魔を取り、かゝれと下知すれば、松村孫三郎馬を乗り出だし、敵の陣の中に乗り切つたり。荒田五兵衛ついで馬を入る。

〔松村は五ヶ所痛手負ひ馬より落ちけるを、小池新兵衛松村を馬にのせ引き取らしきとなり。〕長父子ふみ止まりこゝを専途と戦ひけるが討たる者多し。長好連ことし十八歳、手の者あまた討たせ、敵の中かけ入りて討死せんとせしを、横田久右衛門馬の口に取り付き引き返す。長重の軍勝に乗りあまさじと追つ詰めたり。太田但馬は殿の陣に軍ありと聞き兵を返して馳せ来る。水越縫殿介山城橋において、鎗を提げて敵に向ふ。松平久兵衛は太田が陣にて足輕を下知して居たりしが、銀にて飾りたる兜を着、黒き物具にて馬を駆けよせ來り、馬を乗りはなし水越が前につと進み出でて、小

松の士拜郷治大夫と鎧を合はししかば、水越もつゞいて安孫子作大夫と鎧を合はす。

「一説、松平は不破空兵衛と鎧を合はすともいへり。」

爰にて雙方手負ひ討たる者多し。互に精力盡きて、相引にひき退いても別れせしなり。後ちに利長二人の前後を問はれしに、久兵衛申しけるは、繼殿介は初めよりふみ止り候へば、一番誰か垂ふべきと申す。繼殿介は久兵衛に鎧を合はしし事早く候へば一番に候ふと申す。利長聞きて武功は猶及ぶ者あらん。かく譲る志萬人にもこゑたりとて、一番を松平に定められ、共に感状あたへられぬ。松平此の時録五百石、後ち三萬石を賜はりて伯者とひけり。

「一説、松平を松原に作る。何れか是なる事をしらす。一説に、此の日金澤の士七人鎧を合はせける中にも、岩田傳左衛門、小松方の手負ひたるを首とらんとせしに、松平久兵衛岩田今日晴なる鎧を合はせ、其の上ひるひ首何にかせんといひしかば、岩田尤もなりとて同時に引き取りきとなり。後ちに岩田が曰はく、首を取つて太音あげ、岩田傳左衛門鎧を合はせ又首を取りたり。引取口の殿と呼ばはらば、一芝居にて三度の功名なるべきに、松平が物せし故、己が下知につけて引き取りしきとて後ちに悔みけるとなり。岩田後に内藏助と稱す。又利長淺井にて鎧合はせし

士に感状あたへられし由小松に聞えしかば、小松の士共殿にも御感状下し給はらんやと云ひけるを、長重淺井殿は道細く、左右深泥にてかけ引自由ならず。勝敗定かならざるはことわりなれども、退く敵を追つ時め橋の彼方にてせり合ははじめ、橋のこなたにてもの別れせしかば、引き取る敵に少しながらも追ひ返されたるに似たれば、人々武勇の働はさる事なれども、感状は與ふるに及ばずといはれけり。」

三三八 山田勘六郎討死の事

利長の兵山田勘六郎は十四歳にて父の仇を討ちたる人なり。ある日利長士藏の戸を開くとて、山田に鎧をあづけられしゆゑ、急ぎ來れと呼ばれしに、遅かりければ忿つて持つたる杖にて突かれしに、思はざるに額に中りて血流る。跪きて平伏せしに脇差の鞘走りければ、手むかひもするかとて、たみかけて杖にて打たんとせられしを、かたへより山田を引きのけたり。山田此れより病と稱して引きこもり居たりしに、關ヶ原の亂起りて利長大聖寺の城を攻むる時、一段高き所に打ち上り武者おしを見物せらる。山田五六十人計引き具し、けふを最後と出でたちておし通り、城につくと先がけして

一番に乗り込み、鎗にて乳の下を突き通され、痛手なれば堞の下におつる。かれて従者にいひふくめしかば、息絶えざる内に利長の前に身き来る。利長見て後悔せらるる事甚しく、其のあやまちを懸にことわりて涙を流さる。山田やがて死にけり。行年廿歳、世にすぐれたる美男なりしが、大剛のはたらきして討死しけり。其の前日したしき朋友に奇南香をわかち贈りしを、其の頃大聖寺きやらといひてもてはやしたりといへり。

三三九 黒田如水凶相の馬に乗られし事

黒田孝隆入道如水關ヶ原亂の時、九州を打ち平げられしに、乗られし馬は二寸計の黒き馬なるが、百會に手負といふ旋毛あり。如水此の馬を指さし、われ此の凶相をしらざるにあらざれども、人は萬物の靈なりと聞きたり、人に勝つべき萬物なし。吾不道ならば凶相是れより大なるはなし。此の馬の毛きずにかかはらずと云はれきとぞ。

三四〇 黒田大友石垣原合戦の事

關ヶ原亂の時、大友義統木付の城を攻むると聞きて、如水後卷せられしかば、大友立石に引き退き、石垣原に先陣をおし出だす。黒田の士大將久野治右衛門歳若しとて、曾我部五左衛門を添へられしが、敵四五千計立石の民家を後にあて待ちかけたるを、久野遙に見て金の天衝のさし物さし、栗毛なる馬に乗りかゝれと下知しけるを、曾我部今しばし待たれよ、はやらは勝利候ふまじ、おり立ちて馬に息つがせ、一同にわりこつかはせ、後に味方のつかん時衝きかゝり、一戦すべしといへども聞き入れず。久野が従者荒卷軍兵衛といふ者豊前の地士なりしが、若き時宮松といひて十五歳より功名せし剛の者、五右衛門が詞尤もなり。馬にあて倒し蹴ちらすと申すは敵によるべし。けふの敵は國替の時よくしりたる者にて皆物しなり。近年落ちぶれて此の亂を死すべき時節と思ひ定め、鎗を膝の上におきしづまりわたる所へ、一騎二騎ばらばらとかけ合はせんにいかで勝つべきや。鎗をつき折るほどの軍ならでは叶ふべからずとて、馬より飛び下り久野が馬の口に取り付き、わか氣ながら餘りのはやりやうにこそ候へ。後陣に先をこさればこそ恥ならめ。後におし詰めん時に懸りてつき崩すべしと云ひけるに、平田彦右衛門といふもの馬に乗りながら、いやいや後陣をまたんとせば、井上・野村すゝもき男なれば必ず先を争ふべし。大友が者ども木付にて度れ又爰に來りたり。進めすゝめといひければ、

荒巻怒つて、平田汝と共に豊前の者なるが、度々手なみは知つたるよ。今井の軍に汝を追つかけて、具足の押付切りたりし疵は有るべきに、其の後四兵衛精助汝を呼び出たすとて問はれし時、汝がけなげさに討ちとめざりきといひつる故に縁を得しかば、わが陸と悦びしは忘れたるかといひすて、馬に乗り先がけすれば、二十騎ばかりつゞいたるをおしつめてかゝりけり。敵三手に分かれたるを一陣を突き崩す。久野はやりたる者なれば少しもためらはず、一文字に乗り込み戦ひけれども、大友が兵ども度々の事になれ、今度の亂に故主の招きに従ひ、けふを限と芝居にひたと折りしき待ちかけたれば、久野主従五騎一所にて討たれけり。曾我部は久野が討たれたる所に横あひにかけ入りて討死す。平田は久野が討たるを見て馬を引き返して引き退きぬ。荒巻は敵驚ひ掛かるを見て、いざ引がんとて人数を集むるに、敵嚴しう進むを見て首をば皆捨てさせ、馬に輪を懸けて引きさがり、後殿して引き退きけるが、久野が討死を知らざりし故、其の日の功名いたづらに成りにけり。黒田の二陣の士大將井上九郎右衛門元房後田、野村市右衛門後田、遙に跡にて関の聲を聞き、此の山に上りて敵の軍立を見抜くべしと井上手の者に下知し進み行く。野村先に軍有るは分明なり。何見わくる事の有るべきといへども、井上が陣おしかねめて通さざれば今少し先に押し出だされよ、廣き所にて陣せんといへど

も聞き入れざれば、獨言して怒りける所に、井上主従三騎小山に乗りあげ、さし物をぬいて味方をまれき陣をすゝめけり。

「井上唐冠の兜烏毛の袴のさし物したりといへり。又佩帯を取つて捨てければ、井上が手の者すはやばげしき軍よといさめるとなり。」

井上・野村敵は皆がちだちなり。馬のかけ場をたのみとも、必死の敵にかるがろしくかゝり離しとて、皆馬よりおり立つ。勝に乗つたる敵にて、殊に譜代重恩の士ども、けふを限と思ひ定めたるなれば敵がゐるとも相がかりすべからず。待軍して突き崩したりとも、足を亂して追ふべからずと下知し、しづしづとおしかゐる。大友が兵是れを見て、まばらがけせば忽ち突き崩さんと思ひしにたがひけり。野村は朝鮮にて澳南の軍に功名し、膝に手負ひ行歩心に任せざれば、片はものにて候ふほどに馬に乗り候ふというて下知しけり。石垣原は原の中に高さ一丈餘の石垣土宇六七町ばかりつゞきてけり。井上・野村の右垣をこなたに取らば軍に勝つべしと通みければ、敵も同じく進んで石垣を踰えんとせしを、つき崩したれども逃ぐるを追はず。井上鎧を横たへ押しといひ、野村は馬を乗り廻し兵を整へたり。大友の士大將吉弘加兵衛・宗像掃部是れを見て、かくては味方まけ軍なるべし。敵勝に乗つて足

を亂さん所を追つ立てんと思ひしに力なし、とても討死せんと思ひ定めれば、いざ懸らんとして二千計静々と歩みよる。井上・野村是れを見て少しも騒がず、折り敷きて相がかりにもせず待ち懸けたり。間近く詰め寄せて敵々に突き合ひ切り合ひて、大友勢一町計引き退きければ追ひもかゝらず、もとの芝居に跪きて心静に息をつぐ。大友勢又押し懸かりて愛をせんごと火を散らして戦ひけり。吉弘は尖眉刀を打ちふり、けふを最後とふるまひけるを井上見て、いざ参りあはんと詞をかくれば、吉弘打ち笑ひ渡し合はししが、草摺のはづれを十文字の鎗につかせて、深手なれば少ししさりけるを、小栗治右衛門が従者弓を持ちたるが真中を射つらぬく。吉弘心猛しといへども、終に叶はで首をば小栗取りてけり。

〔又一説に、吉弘は黒革にてをぎしたる鎧を着、熊毛にてしころを飾りたる兜にて、三尺計の刀を以て井上と馬上にて渡し合ひ、馬より突き落されしが、脇指を抜いて手裏劍に打つ。井上が弓手の股に中る。其の間に小栗引つ組んで吉弘が首を取るといへり。又一説に、吉弘と井上は吉弘一年中津にありてしたしみ深かりしかば、此の日井上に向ひて珍らしや一鎗参らんというて突き合ひしが、吉弘が胸板を二鎗まで突きけれども鎧かたくて裏かゝず。井上吉弘が内兜を突きけるに、

十文字の横手にて忍の緒を切り、兜傾きて目を塞ぎければ少ししさりける處を、吉弘が左の脇より下著の背く出づるを目に懸けて胸腹をつきたりしかば、吉弘遂に討たれきともいへり。又此の軍場の後に吉弘が厲鬼あらはれ、ゆききの人に祟をなしける故、吉弘がゆかりの人石垣原のかたへ別府といふ所に吉弘が屍を葬りてけり。別府・清田・濱田の百姓おこりをなやめば、米を供ふるに忽ちおこりおちけり。吉弘が嫡子は清正に仕へ、二男は細川忠興に仕へしが、父のなき跡を見んとて別府に行きて其の印の石を拜せしが、多く米を供ふるによりて、鳥の集まりて糞にけがれしかば、今より武具をそなへたらば治し給へ、さなくば治し給はざれといひしが、是れより米を供ふるにしろしなし。木刀を作り供ふればしろしありといへり。

宗像も井上も従者大野勘右衛門と引つ組みたる處に、勘右衛門が弟休也といひし法師武者走りより、掃部が脇腹に刀を突き立てて、えいやとはれたりければ遂にそこに討たれけり。大友の勢突き崩されてはさつと引く。又おしかゝり戦ひけれども、井上・野村追つかげずもとの芝居に跪き、又かゝれば立ちあがり、突きのけ幾度といふことをしらず。大友が勢遂に打ちまけて残りすくなく討たれしかば、僅計になりて立石に引き返す。義統力盡きて如水に降参せられけり。

三四一 三宅喜藏武勇の事

義統未付の城にむかふ時、細川忠興の士大將松井有吉、加藤清正に加勢を乞ひければ、三宅喜藏をやらせり。三宅、殿の先陣にて功名せんと思ひしに、他國に往きて城にかゝりたり。事は存じもよらざる事なりといふ。清正汝が武功ある故に他國につかはしたりとも、吾が名を汚さじと思ひ寄りたるに己が名を賣るこそ心得ぬ。永く我が家を去つて心まかせにせよといはれしかば、三宅そこを出でて、庄林隼人にかくと告げ、殿の咎を蒙りたれど、殿ならで奉公せんと存する大將も候はず。哀れ隠し匿きて給はらんやといひしかば、隼人心得たりと許しけり。清正宇土の城を攻むる時、三宅はあかれの三本じなへの惣物さし、夜半より鹽田口の堤に行きて明くるを待つ。宇土には南條元琢こもり居たり。此の元琢は伯耆羽衣右の城主南條左衛門元次の二男にて、兄の元重に劣らぬ大剛の者なるが、毛利元就と軍する事度々に及びけるに、敵寄すると聞きて、只一騎馬上にて上帯しめてかけ出だし、半里が程に軍兵ども追ひついて、速に國境に馳せ行き、押し寄する軍兵を追つ散らしたる勇士なるが、秀吉の勘氣にて小西行長が許にかくれて、朝鮮にては武勇の振廻せしなり。此の度清正寄すると聞き

只一騎城を乗り出だす。元琢が従者福西九郎大夫是れも十八の時より朝鮮の軍にあひて物師なるが、元琢に後れじと城を出でて馳せ行く所に、山の上に清正の馬蘭の馬印ひらめきて見えければ、彌々進んで三宅に行き合ふ。元琢馬より下りて三宅と鎧を合はせたる處を、福西透間なく走り、三宅を斬る。三宅がつきたる鎧を元琢握りて、遂に引き奪ひて既に危かりしに、三宅が従者元琢が兜の眞向を一刀斬りつけたり。元琢目眩きてくるくる廻りながら、刀を抜いて三宅が従者を切り倒す。清正茜の三本じなへは三宅喜藏ならん、討たすな者どもと下知せらるる詞の下より、飯田角兵衛・庄林隼人馬に諸鎧を合はせてかけ來りければ、元琢敵つゝきなばあしかりなんと三宅をすてて引き返す。清正三宅を呼びて、其の日被られし羽織に千石の祿を添へてあたへられけり。

〔又三宅元琢が兜をつき落ししかば、頬に手負ひたれども、淺手なれば三宅が鎧に取り付きたれども、三宅鎧をすて、組み合ひたりともいへり。〕

其の後ち關ヶ原の軍破れて行長生捕になりしかば、清正使を城に立て城を明け候へと云はれしかば、城代小西隼人自害して、城中の者ども助け給はらんやと申す。清正許諾して入代の城代小西若狭も自害し、宇土・入代を清正に授く。清正南條に六千石の祿を與へられけり。三宅と南條と物がたりする

に、元塚汝を討ち留めずして残り多しとたはふれしかば、三宅我れも存ずるなりといひけるとぞ。
 「三宅宇土にて組みたる時忽ち刺し殺すべきに、其の日さしたる小脇差少し長かりし故なりと語り
 かと云へり。」

三四二 肥後國宇土城攻杉本次郎介夜討の事

清正宇土を圍む時、ある夜敵夜討すべしなむとたりそと下知せられけり。果して杉本次郎介を大将
 として清正の陣に夜討す。日下部平介・阪川忠兵衛鎗を合はせ散々に攻め戦ふ。杉本守り固きを見て
 城中に引き返す。田中兵助は酒に酔ひて臥し居たりしが、鐵砲の音に驚き起きあがり、鎗を取つてか
 け出だししに敵引き取り、皆門内に入りて杉本一人大手の櫓の木戸口に残り止りたり。田中詞をかけ
 たれば、杉本十文字の鎗にて田中を一鎗つきて櫓の中に入りけり。清正火を燈し軍せし者どもを呼
 ばれしに、田中今夜先がけしたりと申す。清正能く見て一番は日下部・阪川二人の内なり。二人とも
 箭創有り。弓は鎗を合はする時射て一同にかしければ射がたきものなり。田中が創は右の腕にあり。鎗
 創ならば左の手に有るべし。ことに横に疵あるは汝が自ら切りたるにやと云はれしかば、田中敵は銀

のおもだかの立物打つたる兜を著、十文字の鎗にて杉本次郎介と名乗りたりき。猶偽と思し召し候
 はんには不幸の至りに候ふとて退きけり。後城明け渡し杉本も清正に奉公しければ、此の夜討の事を
 問はれしに、杉本城に入らんとせし時、とつばいの兜を著鎗を提げて走り來り候ふ武者を一鎗ついて
 候ふと申す。清正田中が詞證據に符合しければ、五百石の祿をあたへらる。田中其の夜一通の書を殘
 し、虚名を蒙り世の誹にあひ候ふ程に、加祿に本の祿を添へて返し候ふとて肥後を立ち退きけり。田
 中は其の初盜賊にてありしが石川五右衛門といへる強盜の長を、秀吉の時京の三條河原にて刑誅せら
 れしに、道々見物の男女群をなす。田中其の中に紛れて石川を引ききて過る時につと飛び懸かり、石川
 が繩取を唯一刀に斬り倒し、五右衛門殿日比の恩に報じ候ふと呼ばはりさわぎひしめく間に、人の中
 に走り入り、終に逃げ出でける男なり、此の時二十六歳とかや。

三四三 福島家の士大将東照宮を拜する事

關ヶ原の軍に功ありける諸將の家臣を召して、東照宮御盃を下されし時、福島正則の士大将福島
 丹波は、尾關石見は、長尾隼人は、近習の人々能くもかたはの集り候ふとさ

やきけるを聞し召し、汝等年若くとも能く聞け、女は容儀を尊ぶ事よ。よし形はいかにせよ、かゝる軍に功名したるを男とはするぞかし。彼の三人は世に勝れたる大剛の者なり。汝等志士に二三は、彼の者に似たらんはよかりなんとぞ仰せられける。

三四四 加藤清正治亂を論ぜられし事

關ヶ原の後、東照宮、石田が亂は雨ふりて地かたまるといふに同じ。此れより解體ならんと仰せありしに、諸大名皆祝し奉りたる處に、加藤清正仰せの如く、惡逆の輩誅せられ泰平たらん事必然に候ふ。然れども天下の治亂は天の陰晴にたとへ候ひなんには、晴れ渡りたる晴天と見るも俄に雲の出で来て、雨うつすが如き事もあるものに候へば、測りがたきは人の心にて候ふと申されければ、淺からず御感ありきとなり。

〔但し清正の此の論いづれの所にての事なりしや詳ならず。〕

三四五 黒田如水豪氣の事

關ヶ原の時黒田如水は豊前中津にありしが、九千餘の兵を率ゐ、九月九日打ち出でて、諸所の城ども攻め落し、筑前・筑後の浪人共相集まり大軍に成りし時、嫡子長政の使來り、關ヶ原にて石田をはじめ敗北し、金吾中納言秀詮は長政の謀によりて、裏切せられしよし告げられしかば、如水大に怒り、うつけ果てたる甲斐守かな、天下分目の軍はわざと月日を過して、浪人のすぎはひをあたふるものなり。何事の忠義だてぞ。日本一のうつけは甲斐守なりとぞつぶやかれける。其の後長政に筑前を賜はりければ、如水も京に上られけるに、諸國の大名如水の門に來りて市をなしけり。山名禪高如水と年比の友なりしが、如水の許に來りて諸將の尊崇大方ならず。殊に夜中は密議も候ふとて世の疑ふ事も候ふなり、就中三河守親の如くに敬はれ候ふ。かたがた徳川殿怪しみ思し召す處なり。徳川殿遠き慮ある人なれば、こなたに心安く立ち入る人の中にも、いかなる目附をか股げられたらん。筑前守の武畧徳川家の賞恩淺からず候ふに、斯くては筑前守の爲に悪しかりなん。徳川殿しきりに用心あるも皆如水を恐れての事なりと人も申し候ふ。猶又醍醐・山科・宇治に浪人あまた居候ふも、如水の隠し置きたると人々疑ひ申すなり。いかにと申されけるに、如水聞きもあへず、内府を攻め亡し天下を取らんと思はんにはいと易き事なり。筑紫をば皆打ち平げたり。島津のみ残りしかばあつかひを懸け

て味方とせん。若し楯つかげ攻め破らん事尤も易き所なり。中國備前・播磨まで皆空國にてありしかば、我れ其の頃二萬餘の軍兵を率ゐ、加藤・鍋島は既に我れに随従すれば、兩先陣として海陸二手に分ち、道すがら浪人どもをかり集めん十萬はあるべし。清正は猛將なり。吾れ旗本にありて攻めのぼる程ならば、内府を討ち滅ぼさん事掌の中に有りと覺えたれども、われ年老いぬ。切り従へし國を捨てて京に上りしに、臆病者どものたはげにて、いろいろの事に恐れていふ事を誠と心得られたるやとて、扇をぬいて疊を打つて大言せられしかば、陣高とかくの詞なくて歸られけり。

卷の十六

三四六 浮田秀家八丈島へ配流の事

備前中納言浮田秀家は關ヶ原の時一萬八千を帥ゐられしが、軍敗れて近江の伊吹山にかゝり落ちられし美濃の白樺村にしばしかくれてありしに、遂に忍びて四國に落ち下り、薩州に著かれしに其の事聞えて東照宮死罪一等を宥めさせ給ひ、八丈島へぞ流されける。まことに苦ふく菴竹あめる月に、雨もたまらず風もふせがれば、黒木の柱を削りて書き付けらる。

もしほ焼くうきめかる身は浦風のとふばかりにやわぶとこたへん
 其の後芳烈公光政 備前におはしましける比、兒島大寺村の商船風にはなたれて八丈島にいたりけるに、秀家九十餘までながらへて居られしが、故郷の者として、いとなつかしげにさまざまの物語して、

〔秀家備前には誰かあると問ふ。新太郎少將と答へ申すに、誰れが事ならんとて家老の姓名を聞きて後、さては池田の家にてありけるよ、又所々に城多きや、城の北に伊勢の官を股け置きたるが

いかなるぞと問ふ。伊勢の宮は候ふ。されども士の家ひしと相並びて續きて候ふと答へければ、さては世は治まりけり。亂世ならんには國境の城に士を分かち置き、岡山には士の家多かるまじきに、今の有様にて治まれる趣を知りたりといはれまじと云ふ。われこそはにひ島もりよおきの海のあらし波風心してふけといへる後鳥羽帝の御製を短冊に書きて、かの船人にあたへられけるとぞ

三四七 小早川隆景遺訓の事

安藝中納言毛利輝元は、關ヶ原の時秀家と共に徳川家に弓矢を取られしかども、關ヶ原に自ら赴かざるの故に、安藝・備後等の國を削られ、長門・周防兩州を賜はりけり。是れより前小早川隆景遺訓して輝元を諫められし中に、毛利家五十餘郡を領し富貴誠に溢れたりといふべし。此れより後ち苟にも國を食ふ心あらば忽ち滅ぶべきと戒められしに、輝元隆景の戒を忘れ、果して國を削られたりき。隆景先見の明かなる露もたがはざりけり。隆景は武勇のみにあらず智謀にすぐれたり。父元就病重くなりて其の子を集め兄弟の數は三箇を取り寄せ、多くの矢を一つにして折りたらんには、細き物

も折りがたし。一筋づつわかちて折りたらむにはたやすく折るるよ。兄弟心を同じくして、相親むべしと遺言せられしに、隆景其の時争は欲より起り候ふ。欲をやめて義を守らば、兄弟の不和候ふまじといはれしかば、元就悦びて隆景の詞に従ふべしといはれまじとぞ。秀吉九州を討ち平らげられて後筑前五十萬石を小早川にあたへられしに、景隆これに吾れに過ぎたる事なり、此の頃まで敵なりし身に大國をあたへらるるは、吾れを愛するに非ず、九州をなつけん爲のかりの謀と思ひて秀詮に國を譲り、備後の三原に引きこもられまじとなり。

三四八 佐竹義宣國替の事並車野丹波が事

佐竹右京大夫義宣の士大將車野丹波は剛の者にて、白練に火の車を書きて指物とす。關ヶ原の亂に義宣上杉に心を合はせられしかば、

「義宣四萬の軍をひきぬ、水戸の城を出て多珂郡に到る、これ上杉の加勢の爲なり。然れども父常陸介義重はもと徳川家に心ありしかば、しひて諫められし故、義宣も兵を水戸に返されまじとぞ。」伏見にて義宣の八十萬石を六十萬石に削られ、出羽の秋田二十萬石賜はりけり。若し辭むならば其の